

特集 ● 私の受けたカルチュアショック 濱千壽子 倉橋祐子

投稿 ● 「東アフリカ野生動物」の旅 小出久子

新連載 ● 八路軍とともに 法村香音子

アンケート ● 結婚成功の条件を探る① 佐藤詔子





株式会社 ミネルワ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

それぞれの花を いだいて

養護施設の少女たち

神田ふみよ 親の顔を見たことも可愛がられたこともなく、つまずきながら生きていく子どもたち——そんな揺れる子どもたちとの葛藤の中で「桂子」は保母として女性として成長していく。一三〇〇円下 250

おんなな三代

俵崩子——それぞれの出発——

ひとりの女の生き方は、その母の考え方に影響され、また娘の育て方に現れてくる。母——著者——娘というおんな三代にわたる生き方を描きながら、著者自身の体験が一つの婦人問題として語られている俵崩子の自伝的エッセイ。 予価一三〇〇円下 250

わかりやすい

新年金入門

社会保険労務士

安藤幸子著

・あなたが年金を受けるとき 老いを迎えてからでは遅い——61年4月に全面改正された国民・厚生・共済の新しい年金のしくみを、年金相談のベテランがわかりやすく手ほどきします。 一三〇〇円下 250

保健室の子どもたち

—父母・教師へのメッセージ—

永井瑞江著

三十一年の養護教諭の仕事をした著者が、豊富な現場経験にもとづく養護教諭のあり方、学校保健の見直しなどの提言を、子供たちとの心暖まる交流を中心とした生活記録の中に織り込んだ随筆集。 B 6判・二六〇頁・一四〇〇円下 250

いじめ

見えない子供の世界

箭内仁・徳重篤史・須永和宏・富樫道明共著

青少年の非行問題に日夜取り組んでいる第一線の実務家（東京家庭裁判所調査官）が、実務体験からいじめを生む子供の心の世界とその背景、さらにいじめの対処法といじめの後に来るものについて論じた好著。 B 6判・二五六頁・一二〇〇円下 250

新しい障害幼児の指導

中村四郎編著

父母・教師・保母を対象とした障害幼児教育の新しい手引書。今日の障害幼児教育の課題から指導原理、さらには具体的な指導事例および就学指導まで懇切かつ行き届いた指導要綱を設けて解説している。 A 5判・二八〇頁・二五〇〇円下 300

(108) 東京都港区三田2-19-30

慶應通信

☎ 451-9309 電話注文も受け付けます
振替・東京 9-155497 図書目録送呈

いいたい放題 したい放題

書きたい放題 よみたい放題の

投稿誌が わいふです

人間 ほんとにやりたいことは やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いっきりやれば 気ははれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回 わいふが出来あがるのです

仕上げに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを！

ピリツとくるか まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第！

WIFE 204

わいふ目次

表紙イラスト カステラネンコ

忙中閑あり

俵崩子さんの山荘ぐらし 4

写真 ビヤネール多美子 文 田中喜美子

特集・私の受けたカルチュアショック

アエットの目 10

濱千壽子

ネグロスの莊園で 18

アシエンタ

倉橋祐子

思い出—北の国の食べもの 23

栗原みどり

ナウい熟年 28 ★

井上治子・藤輝美



職場は多面体 32 ★

荒井明子・日下部直子

新連載

八路軍とともに 36

法村香音子

マン・ウオッチング 50 ★

岩田厚子・中川敏子

対話のページ 52 ★

匿名・伊藤真砂子

わが家の三原山噴火騒動記 55

佐々井優子

狂育ニッポンどこへ行く 58 ★

竹本数子・匿名

エッセイスト・クラブ 64★
中村道子・中松ミナ子・金井和江

アンケート

結婚成功の条件を探る ① 70
まとめ 佐藤詔子

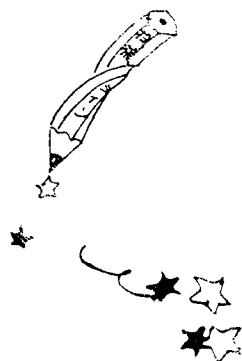
情報センター練馬のパーマ屋 80
小江鐘子

オットどっこい 84★
山田幸子・法村祐子

マジの発言 88★

大沢陽子・春名春美・小川由里・河上友子・
原眞智子・河野民枝・古池けい子

生きてます活字人間 99★
岡部佐智子・和田好子



ファミリィ・イン・ブルー 104★
黒崎和子・日比野都・田中久子

読者相談室

フライベート・ルーム 112
相談 匿名 アドバイス 原田静枝

「東アフリカ野生動物」の旅 117
小出久子

わいわいがやがや 128★

匿名 鈴木洋子・野村純子・古沢涼子・
つばきはらミナ子・長井淳子・匿名
作田美恵子・山田淳子・匿名

情報コーナー 102ほん 110

サークルだより 116特集テーマ原稿募集 141

投稿規定 142編集だより 144

★印は
投稿ホットライン
の、ページです！

忙中閑あり ①

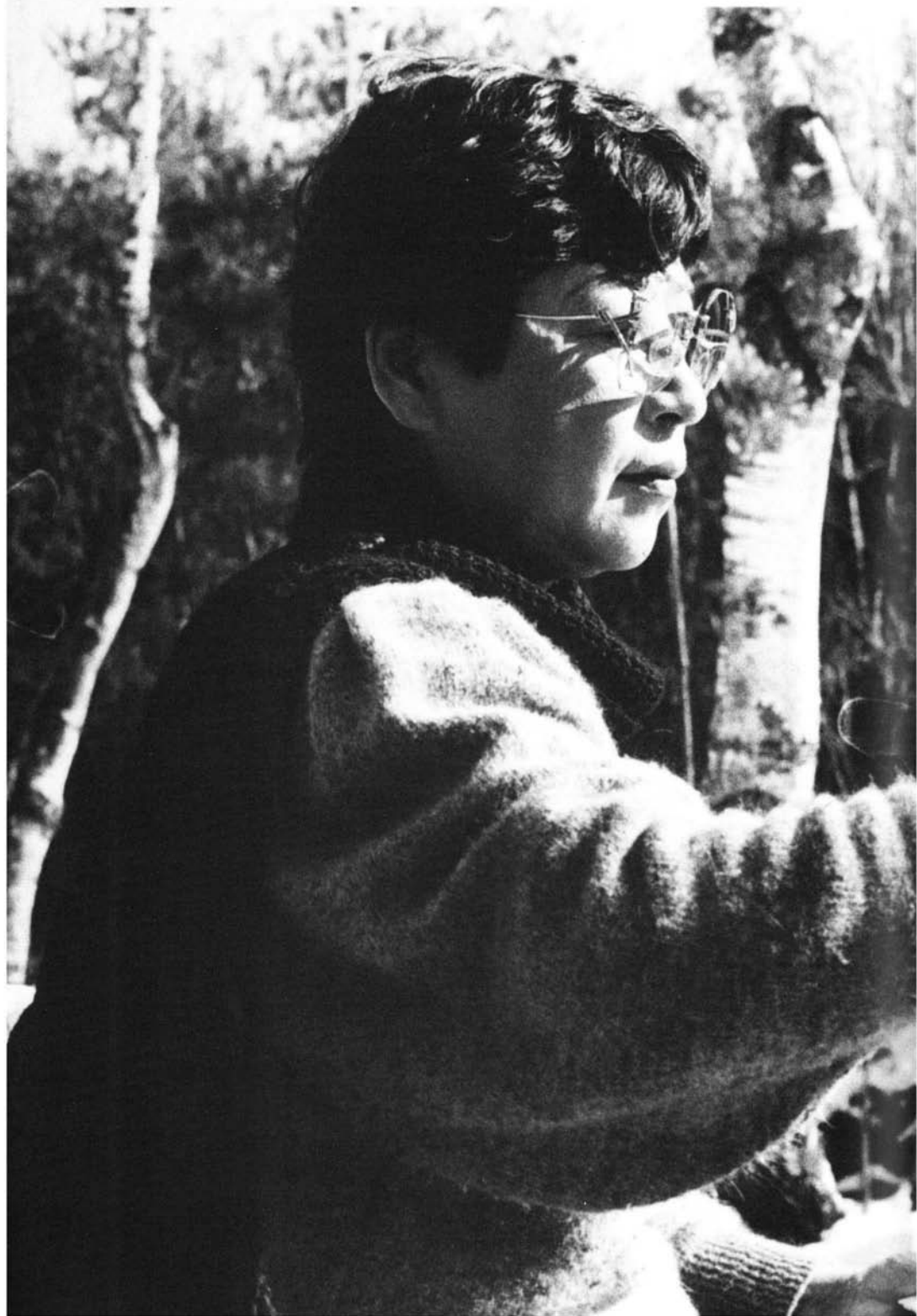
私のホビー

——俵萌子さんの山荘ぐらし——

写 真・ビヤネール多美子
文 ・ 田中喜美子

庭先の炉でたき火をし、
双眼鏡でバードウォッチングを楽しみ、
気が向いたら絵筆を握り、
台所のゴミは堆肥にし、
三度の食事は自分でつくり、
そして何よりも、
ボケーッと何にもしないでいる
自然の中の暮し、
赤城山のふもとの山荘で、
俵さんはその夢を生きる。





台所仕事は超スピード



日本でいちばん忙しい女性の一人、
評論、小説を含め著者四〇冊、
無数の講演に日本中をとり廻る。
市民運動の機関車でもある。
臨教審の向こうを張る「女性による民間教
育審議会」、離婚相談に一肌ぬぐ「女性
の自立を支える会」、一昨年まで教育委
員をしていた地元中野区の「みつわ会」。
「女性民教審」の会議には、発足以来、
一回も休んだことがない。



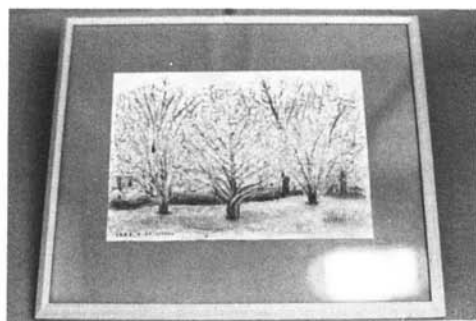
描き出すと昼食も忘れる

のんびりバードウォッチング

自分の筆で枕びょうぶを



火を燃やすのは案外むずかしい



花ざかりの樹々を描いた作品

激務のなかで、生かされていないもう一人の自分、人間らしい、自然の暮し。俵さんはそれを、この山荘でとりもどす。庭には湧水が流れ、池には鯉が棲む。訪ねてくる土地の人たちと談笑し、暮にはもちつきを楽しむ俵さんはもう、赤城の村人の一人である。

いつかは小さな美術館を敷地のなかに作りたい……俵さんの夢はふくらんでいく。

女の近代365日

円谷真護著／上・下2分冊各1500円

女性近代史と女性解放の基礎知識——この二冊があなたの毎日を変える(?)

時代との葛藤の中で、生きぬき歴史を動かしてきた女たちの足跡を二六五日の「こよみ」に刻んだ、おんな百年史。あなたの側にぜひ置いてほしい。

反天皇制面白読本

制作集団Q／編

1200円

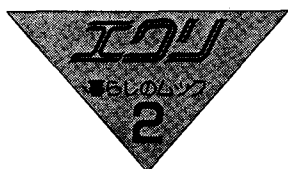
「なるほど」「これは、ひどい……」面白くて、グサリと天皇制のオカシさを切り、歴史にも強くなる——本書は、「天皇を知らない」ヤングたちに、もしもXデーがやってきたら、これだけは知っておきたい重大事項をあつめた読本!

かりだされる子どもたち

中曾根「教育臨調」と青少年健全育成運動
林雅行著

1900円

つ け
柘植書房 東京都文京区小石川2-24-7
電話 03-818-9270



暮らしの探検

生活年鑑1987

エクリは暮らしを発見します

●ひとと暮らし、この1年

ベッドの中で過した1週間、誰もが気になる
病院内の暮らし——入院患者の1週間
おばあさんの大切なものは何? たずねてきたのは誰?——ひとり暮らしのおばあさんの1年

先生1年生、学校は大忙し——新任教師1年目の1学期

妊娠から出産まで、いつもと違う1年の暮らしに起きたことは——子どもを生んだお母さんの1年

自校方式とセンター方式、行革でこんなに違う学校給食の現場——学校給食調理員の1日

●暮らしの動き

円高でリサイクルピンチ?

原発事故とわたしたちの暮らし

ファッションになった? 水

新しい農薬の登場

ダイレクトメールに開かれた暮らし

生まれ方、死に方が変わる? 新しい生命観
児童扶養手当制度その後

今年の流行最先端は?

子どもたちにいまなにかおきているか——
おしゃれな女子大集合

1月15日発行 定価550円(送料200円) A5判 112ページ

エクリ——暮らしのムック1

[暮らしの探検]—水と食べもののガイド

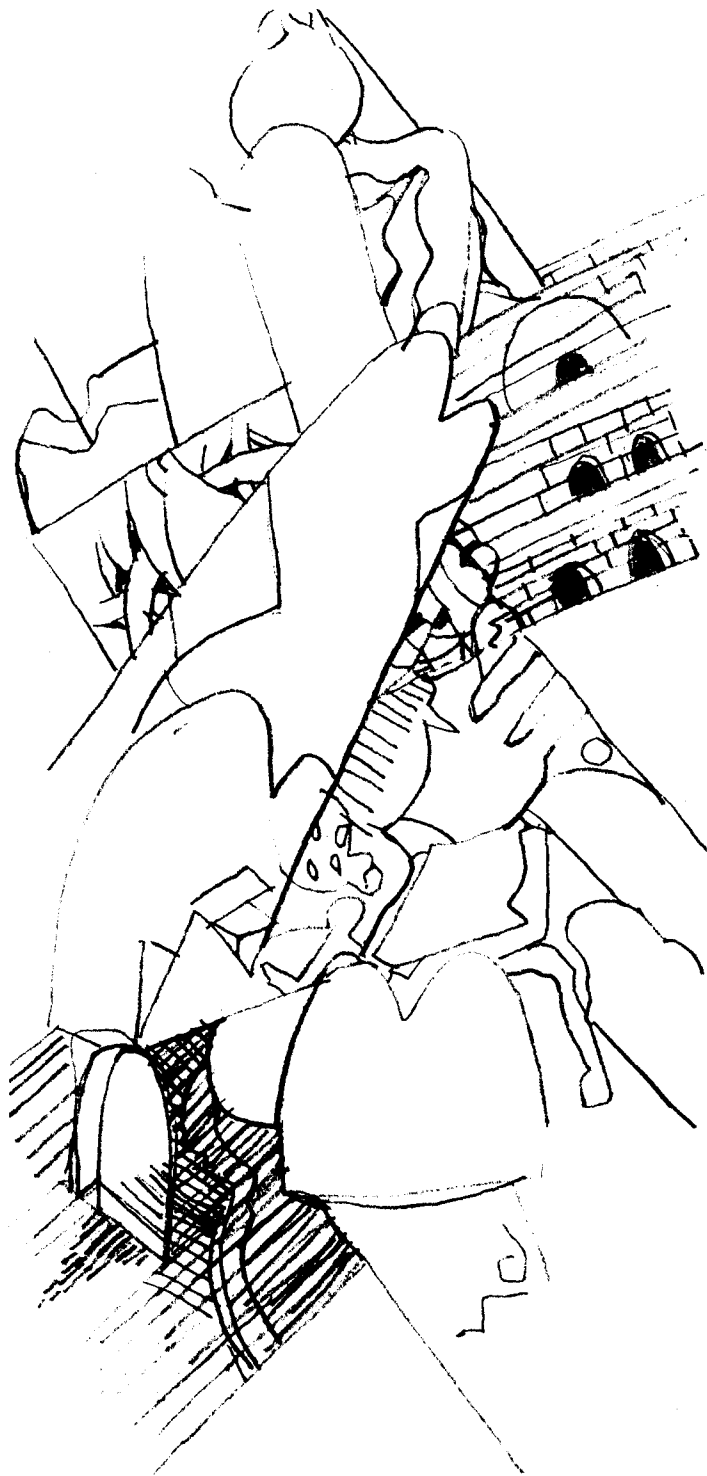
- 東京湾食べもののガイド——輸入食品・生鮮食品見て歩き
- 食べものの原料は世界から
- おいしい水を求めて
- パイオは食べものを変えるか?
- 食べものから環境へ広がる農業
- 発がん性研究情報を追う
- 中国茶は健康茶?

ご注文は最寄りの書店(地方小出版流通センター扱い)または直接ご連絡を。

生活クラブ生協連合事業部・発行

〒156 東京都世田谷区宮坂2-26-17 ☎ 03-706-0039

特集
私の受けた
カルチュア
ショック



アエツトの目

濱 千壽子

東京都調布市



英語の先生はエストニア人

夫から私の英会話の家庭教師をミスター・ホールに頼んだと言われたとき、私はちよつと気が重くなった。

確かに英語の国で英語のしゃべれぬ不自由さは充分感じていた。日常の生活はそれでもどうにか切りぬけることができたが、困るのはパーティーであつた。

身長一五三センチの私は、長身のイギリス人の中に混じるとそれだけでも圧迫される感じを受けるのに、社交なれした美しい身のこなしとともに流暢な英語で話しかけられると、さらに身の縮む思いであつた。

かつては日没することがない、と言われたほど多くの植民地を持っていた大英帝国国民には、地球上の人間はみんな英語が分かつて当然と思ひ込んでゐるふしが見られた。イギリス人の中華思想め、日本人に英語が分からなくても何の不思議があるうか、と跳ね返そうとしながら

も、パーティから帰った後は矢張りしばらく心で着物を片付けていた。夫が家庭教師を、と考えるのは当然であった。

ただ、当時の私は、家族の口に合う食事を作ることと、三歳の息子と生後一年に満たない娘の世話とで、毎日がもう精一ぱいだった。

最初に住んだマーブルアーチのフラットは、三階の窓から出した首をちょっと右に向ければ、ハイドパークの木々を百メートル先に眺めることができ、ロンドンの中心にも近く、環境としては申し分がなかった。しかし周囲に住む日本人は一人も見当たらず、フラットの中は閉鎖的でボーターも変にとりすましていた。また、子供が怪我をしたり急病になったりしたときのことを考えると、日本人医師の住むゴードアスグリーンまでタクシーで一時間余りは、母親が安心できる距離ではなかった。

頼れる人が身近にいないなかで、大切な幼い二つの命を気遣う気持ちがいっつも

心のどこかを圧迫していて、余裕のないのは時間よりもむしろ精神的な面であった。

そうした状態も含めて、夫はミスター・ホールに相談をしつらしい。

ミスター・ホールはロンドン大学の図書館に勤める三十三、四歳の英国人で、オックスフォードイングリッシュを学びたいと言う夫のために、週一回、木曜日のきまった時間にベルを押した。

広い額の下に灰色の聡明な目を持つその人を、夫はとても信頼していた。

ミセス・ウエキには、英語を母国語にしている人より、英語を外国語として学びマスターした人のほうがいいと思う、と言うミスター・ホールは早速、アエツト・ジローという女性を紹介してくれることになった。

彼女はエストニア人で、両親とともにオーストラリアに亡命した後、ハワイ大学を卒業して現在はロンドンで働いている、とミスター・ホールから聞いたもの

の、それまで私は「ESTONIA」という国を全く知らなかった。

「ESTONIA」は東欧に在った。しかしもうソ連邦の共和国の一つで、世界地図では独立した国としては扱われておらず、ソ連邦と同じ色でぬりつぶされていた。フィンランドのちょうど対岸にあって、人口は一五〇万人に満たず、国の面積は九州の一・二倍、バルト海に面した小さい国であった。

とにかく一度会ってみよう、ということになった。

私がロンドンに住んで五か月ばかりたった一九六八年の春、化粧気のない顔に黒味がかったブラウンの髪の毛を無造作に後ろで束ねて、約束の四時きっかりに、そのひとはドアをノックした。

彼女の生まれた国の位置から私は、肌の透き通るように白い、金髪で面長の女性を想像していた。しかし目の前に現われた身長一七〇センチぐらいのその人は、白人としては色黒の顔に少し上向きの可

愛い鼻と茶色の目を持ち、野性味を帯びたしなやかな体を、すいすいと軽く運んでソファに腰をおろした。

私はとっさに猫を連想した。

先ずお互いの条件を話し合うことにした。

夫と話をしているときも、私に対しているときにも、彼女の目にはどこかで相手の心を推し量っているようなものが感じられた。それは卑屈と呼ぶには当たらないにしても、周囲の思惑など気にしないで生きてきた人の目とは異なるように思えた。異国にあって気持ちの萎縮していた私は、その目を見てはっと気が軽くなるのを覚えて、夫にこの人から英語を習いたいと伝えた。

幼い子供二人を横に置いてのレッスンは、特に教科書など使わずに、気楽に身辺のものを話題にのせていく、という形でスタートした。

元々語学の苦手な私の英会話はなかなか上達しなかったが、乏しい語彙で少し

ずつアエットと話し合うのが楽しみみの一つになっていった。

一応のレッスンは終わって紅茶を飲むころになると、アエットはよく祖国エストニアの話をした。ソ連軍が侵入してきたときの様子。両親、弟とともに、オーストラリアにのがれたときのこと。エストニアにそのまま残っている叔父、叔母、いとこ達のこと。

アエットの祖国

エストニアは九世紀以来、数々の異民族の侵入と支配を受けている。十三世紀にはドイツ騎兵団、次いで、デンマーク、ロシア、十五世紀には、スウェーデン、デンマーク、ポーランドに支配され、十七世紀には、エストニア全土がスウェーデンに征服されている。

その後も、ドイツ、ロシアがかわるがわる侵入する中で、一九一七年に独立をするが、それも二十年間で崩壊している。アエットの年を正式には尋ねなかった

が、前後の話から、二十七歳ぐらいと考えていた。とすると一九四一年ごろに生まれたことになる。

僅か二十年間の独立が一九四〇年にソ連軍によって倒され、一年後にはドイツ軍の侵入で、一九四四年までエストニアはドイツ軍の占領下にあった。一九四四年十一月にはソ連軍が侵入してドイツ軍を駆逐している。

アエットが生まれたときには、エストニアはすでに異民族の支配下で揺れ動いていたことになる。

一九四四年からたくさんのエストニア人が海外に逃亡している。約三万三千人がドイツに、三万人が海からスウェーデンに、（このときには数千人が海で死んだということであるが……）また数千人の若者がフィンランドの軍隊に入って、共産主義と戦ったが国を救えなかったと、一九六七年に印刷されたブリタニカには記されている。

しかしアエットの年齢、エストニアに

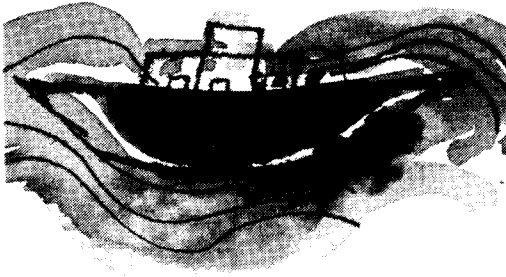
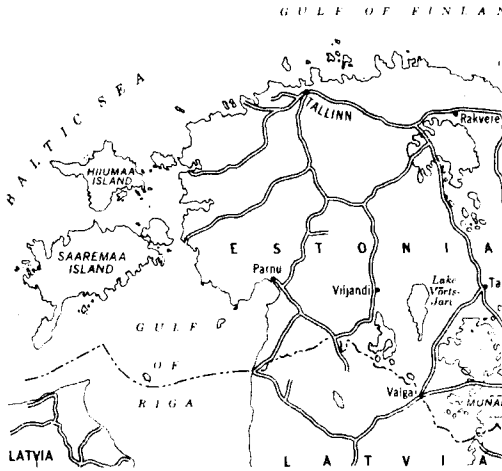
おける記憶から考えて、一九四五年から五六年にかけてソ連によって行われた二万人の追放者の中に、アエットの両親が含まれていたのではないかと、私は推測していた。

ロンドンに來たのは、少しでも祖国に近い国に住んで、エストニアを訪れる機会を窺うためで、一度だけ近くまで行ったことがある、とアエットは話した。

近くとはどこの国であるか、それにっいては触れなかったが、

「そのときも、ソ連政府は入国の許可を与えなかった」

と言ったとき、アエットは語尾を震わせて口をキッ／＼と閉じた。押さえに押さえている口惜しさが一瞬ほとばしり出た感じで、私もしばし言葉がなかった。



乏しい語彙で思いのたけを

レッスンの初めに、毎回私は一週間の出来事を彼女に報告することになっていた。

私が大英博物館へ行ってきたことを話したとき、アエットは、

「ミセス・ウエキはそこで何を感じたか、何でもいいから話してみなさい」と言った。

夥しい文化遺産を目の当たりにして、私は強いショックを受けていた。

特にミイラの展示室に入ったときは、かつて私達と同じように意志と感情を持って動いていた肉体が、二千年後の今の世に動かぬ一つの物体になって残っていることに恐怖に似た戦慄を覚えて、しばらくはとてもミイラを正視できなかった。それらは得意の日本語を駆使しても簡単に言い表わせるものではなかった。まして英語においておや……である。

I thought, human's life is very short.

私はただそれだけを言った。それは多くの言葉を知らないために、かえってそのときの私の気持ちを、明確に表わしたと思う。

アエットは、はた、と私の目を見た。

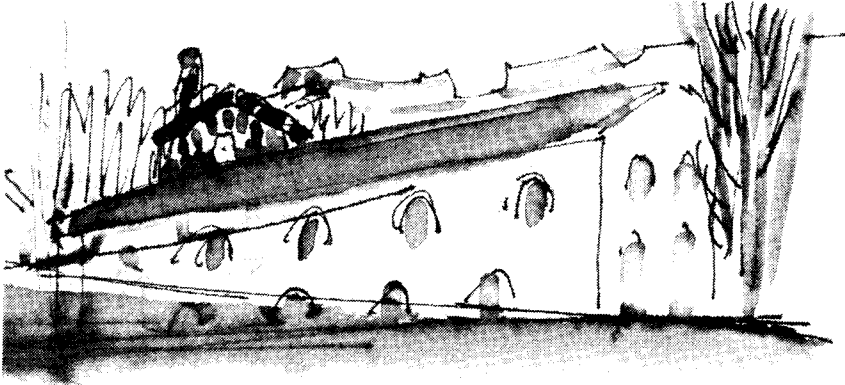
私もその目をしっかりと受けとめた。

アエットと私が共有できる言葉はまだまだ少ないものであったが、限りある時間の中で生きる者同士の口惜しさ、とでもいうものが、そのとき二人の間に通い合ったのを、私ははっきりと感じた。

いつでも帰りゆける母国を持つ私に較べて、少女期に祖国をのがれ、異国で成長しながらなお捨てがたい思いを抱くアエット。ロンドンの片隅で、祖国の土を踏む日を待ち侘びている彼女にとって、限りある時間に対する思いは、より、切実なものであったに違いない。

その年の秋アエットは、病気の父親に会いたいの、オーストラリアに行く、と言っしてはらくの休みを申し出た。

間もなくアエットからは十一月二十八



日付けのエアメールが届いた。そこには先週の火曜日に父が亡くなり、金曜日に埋葬したこと。それはかつて経験したことのないほどの悲しい出来事であり、かつて家族と一緒にいたときがどのように幸せなものであったかが、綴られてあった。

祖国を思いながら、娘からの朗報も聞かずに、そのまま異国の土となった父親の死を、アエットはどのような思いで受けとめたのであろう。家族とともにあったときを偲びながら、彼女の心の中には今、両親と別れて住んできたことへの痛恨の思いが強いのではないか。そして残された母親に対しては……と私は心が痛んだ。

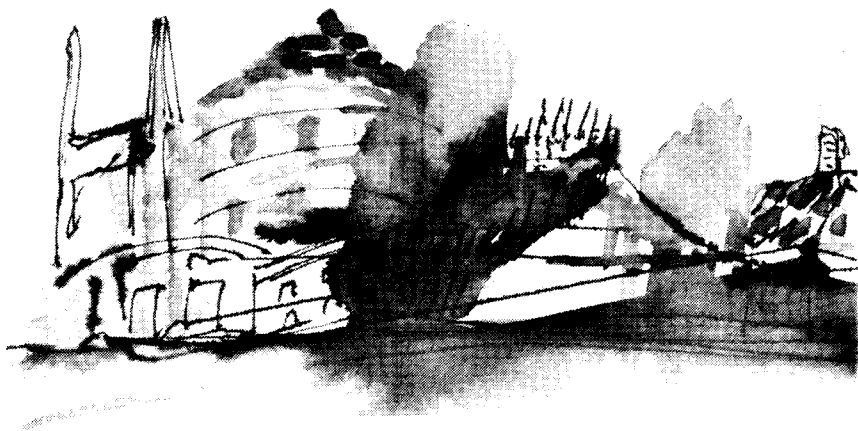
しかしそこにはなお、十二月十日ごろ私はロンドンに帰ると書いてあった。

アエットは、カンガルーの毛皮で作られた小さいコアラベア二つを、私の二人の子供達への土産にと渡し、また、同じようにレッスンが始まった。

コアラベアは子供達の気に入りの縫いぐるみになった。特に息子は、外出するときも、しっかりと両手で抱きしめていた。高熱を出して入院したときにもそれを離さなかった。自然の毛の柔らかさ、温かさに心ひかれたのかもしれない。コアラベアの毛は次第に擦り切れてきて、その下の白いすべすべした部分が広がっていった。

そのコアラベアを二十歳を過ぎた今でも、息子は大切に持っている。毛の擦り切れたコアラベアの縫いぐるみは、小さい手でそれを抱きしめていたそのころの、息子の淋しさを私に伝えてくる。部屋の片隅でコアラベアに独り語りかけていたときの、息子の細いようなじが、たまらないふびんさで、私の胸を熱くする。帰る国を持った子供にすら、親はこうした思いを抱く。

アエットの両親は娘へのふびんさを、彼女の望むままに祖国の近くに送り出す、そういう形で消化してきたのであろうか。



母の死

一九六九年一月十六日、夫のヨーロッパ出張中にもたらされた、母の死を知らせる電話を、暗い冬のロンドンで私は一人で聞いた。

それは私にとって、生まれて初めて味わった、深い深い悲しみであった。

レッスンの初めにそれを聞いたアエットは、「貴女の悲しみが、私にはよく分かる。私も同じ悲しみを持っている」と言った。

父や兄弟達と遠く離れていて、同じ悲しみを分かち合うことのできなかった私にとって、そのときのアエットは、私の心の一番近くにいた人であった。

その年の初夏に、アエットは同じエストニアの青年と結婚することになり、友人の、やはりエストニア人のミス・マイナ・トムソンが、私の新しい先生として紹介された。

ミセス・ウエキにとっても先生を変え

たほうがいい、とアエットは言った。確かに私はアエットに対して、正確に英語を話すよりどんな言い方でもいいから自分の思っていることを伝えようとしていた。

ミス・トムソンは、私がアエットに会う前に想像したような、典型的な北欧の容姿を持った女性で、中学の教師という職業柄か、落ち着いた物腰で熱心にレッスンを進めてくれた。

私をテイトギャラリーに連れ出してくれたのも彼女であった。ターナーの絵を二人並んでゆっくり観賞した。私の質問に、彼女は気長に、完全に理解したと分かるまで、丁寧に答えてくれた。

自分の教え子のいろんな例をとりあげて、彼女の周辺にいる英国人は恵まれた階級の人達であり、英国にもいろんな階級のあることを彼女も知らなければならぬと言った。

ともすれば安逸にながれようとする日本の女に、彼女なりの誠意で接してくれ

ているのが、私にもよく分かった。

彼女もよくエストニアの話をした。

日本語とエストニア語の発音が似ていることを話し、「マヤマ」と言って眠るしぐさをするときの彼女の目は、やはり祖国を恋うる目であつたと思う。

しかし私は、アエットの目をときどき、たまらなく懐かしく思い出していた。

ときには悲しく、ときには優しく、無邪気にも、コケティッシュにもなり、また野良猫のように油断のない目つきにも変わるあの目の前で、私はどれほど自分の心をほぐしてきたことか。

私は二人をランチに招待することにした。

その日私達は、よく食べ、よく飲んだ。私とアエットとは、酔った体をカーペットの上に行儀悪くべったりと座らせ、ゲラゲラと決して上品ではない笑い声をあげたりした。

私の英語力ではたかが知れていたが、随分しゃべったという満足感があとに残

った。

ミス・トムソンは、いつものように静かに、落ち着いて子供の相手をしてくれていた。

一九七〇年三月、私達は帰国することになった。

結局、私の英会話は大きく上達しなかった。私は英語よりも、祖国を失った二人の女性の口から出る話そのものに興味を持ち、頭の中には、そのほうを優先して入れていたらしい。

交流のあった人とお別れの食事が続いた。スチュアート夫妻との最後のディナーもその中の一つであった。

羊毛の買い付け商人の取り引き場や、古い教会や、観光地図にないイギリスを紹介してくれたミスター・スチュアートは、ミスター・ホールを夫にひき合わせ、結局それが私とアエットとの出会いに結びつくことになる。食事の後私達は、テームズ河畔の古いパブに寄った。初めてこの河を見てからはや二年半の歳月が流

れていた。

その夜チームズはいつもより水量を増し、黒い水面がぐーっと盛り上がるようであった。

チームズのうねりを見ながら、私は、止まることのない時の流れに飲み込まれていく、人間の一生を思った。

帰国して

帰国後、私は繁雑さの中で二人に連絡する機会を失ってしまった。

三年たって、ロンドンに出張した夫は、ミスター・ホルの家を訪ねてきたが、その後毎年届いていた彼からのクリスマスカードもいつか途絶えた。一九八三年十年ぶりにロンドンへ行った夫は、ミスター・スチュアートから、ミスター・ホルがアフリカに行ったまま消息不明だと聞かされた。

消息が分かったら知らせてほしいと頼んできたが、ミスター・スチュアートも一九八五年初秋、心不全のため五十歳で

突然この世を去った。

ミスター・ホルもアエットも、広い地球のどこかに吞み込まれてしまつて、私達は彼らをもう、見つけ出すことができないような気がする。



ロンドンで厳しい人生を精一ぱい生きる人に親しく触れながら、自分の国に帰り、肉親や親しい友人に囲まれれば、その居ごこちよさにどっぴりとつかってし

まい、アエット達が祖国を失い、どこに安住するか分からない人達であることを忘れてしまう私は、しょせん、同一民族の中で生きる、気楽な日本人であった。彼女達二人を思い出すとき、熱心に語りかけたあの目を裏切った後ろめたさが胸をよぎる。

祖国ポーランドへの告別の曲となった、ショパンのピアノ協奏曲第一番ホ短調は、その繊細さ、華麗さゆえに、かえって深い悲しみが強く伝わってくるのを覚える。動乱のポーランドを偲びながら、ついにその土をふむことなく、三十九歳の短い人生を異国で閉じたショパンの曲は私に、やはり同じ東欧の人、アエットの目を思い出させる。

偉大な天才も、平凡な民衆も、祖国に寄せる熱い想いは同じであろう。

そしてその想いは、国破れてなお山河のあった私達には、どうしても理解し尽くせない、深い、強いものであらうと思う。

(え・岡田正子)

ネグロスの莊園で

アシエンダ

倉橋

祐子

東京都渋谷区



ジブニーの上で

飢える島ネグロスへ

去る八月、私は「ピースボート」という、若者が中心となって運営しているグループのサマーツアーに参加し、パラオ、フィリピン、台湾を一万トンの船でまわってきた。当初から私はフィリピンのネグロスに興味をもち、ピースボート用のガイドブックに記事を書いたりしたが、飢えに苦しむ人々の姿を実際に見、また二日ではあったが彼らと生活をともにすることで、あらたな衝撃を受けた。パラオを立て三日後マニラ港に入港、霧雨の中、我々ネグロス・チーム（約四十名）はフィリピン国内線でネグロスにむかった。

ネグロスは、フィリピン中南部に位置する人口三百万の島で、島民の生活はすべて砂糖キビにたよってきた。その生産はフィリピン最大で、最盛期には国の六割をしめていた。しかし、八〇年代初頭

に始まった砂糖の世界的不況のため、この砂糖ブームも終わりを告げ、今では地主の多くがその栽培を中止している。

食物はきわめて乏しく、昨年だけで千人を超える子供が栄養失調で死亡している。日本の新聞、雑誌には、よく教会所属のボランティア団体による一日一回の給食配給の記事が掲載されるが、すべての子供にゆきわたっているわけではない。

労働者の一日の平均賃金は、一般農業労働者の半分の十ペソ（約一四〇円）程度で、一本五十ペソもする点滴や、一キロ二十ペソもする米を買うことはとうてい無理である。また農閑期中は地主から借りた米の返済におわれる。私たちが今回訪ねたのは、こうした状況にある労働者たちである。

ネグロスの州都バコロド市内の空港ゲートを出るやいなや、数人のうすよぐれた若い男たちが、自分たちのジブニー（ジープを改造して作った乗り合いバス）

に乗らないか、と近づいてきた。まわりを見ると、他の客にもそれぞれジブニーの運転手が群がっている。ようやく本命の青年たち四、五人を見つucker——ニコニコと特別な親しみを示してくれるのですぐにわかった——全国砂糖労働者同盟（NFSW）のメンバーたちである。

砂糖農園閉鎖で失業

昼食後、三つのグループに分かれ、それぞれのアシエンダ（莊園）へ向かう。私たちのグループは、NFSWのアーチーという青年がガイドをつとめる。もうもうたる砂埃の中、ジブニーにたっぷり一時間揺られて目的地オウレリオ・アシエンダに着いたのは、もう日もすっかり暮れ、あたり一面は闇、大空にぎっしりと星が重そうにぶらさがっているところであった。かすかに小川のせせらぎが聞えるが、そこが人家であることは、共同住宅の前の広場に案内されるまでわからなかった。広場の真ん中でみたランプが、

その夜私たちが接した初めての光であつたからだ。

住居は高床式で、竹を組み立てて作ったごく簡単なものである。赤ん坊を抱いた母親や小さい子供たちがこちらをじっと見ているのが、ランプの光を通してわかる。それから、アーチャーが彼らのタガログ語を英語に、私が英語を日本語にするという二段階式通訳の交流会となった。話をしてくれたのは、主に長老と思われるかなり年配の男性数名であったが、ときどきまわりから、訂正もしくはつけ足しと思われる声がとぶ。このアシエンダでは、一九八三年に砂糖農園が閉鎖されて以来、朝早くから他の村まで刈り入れなどの仕事を捜しに出かけていく毎日がつづいている。週に三回仕事をもらい、六十ペソかせげればよいほうで子供たちを小学校にやる余裕など全くない。空いた土地にタピオカ（イモの一種）を育てて何とかしのいでいる。

今年六月に米の転作を認可されてから、

少しずつ米作も伸びてはいるが、自分たちの食卓にのる米をまかなうには到底及ばない。野菜などは市場のある数十キロ先の町まで、金ができた時点で買い出しに行く。その際は、そこまでの交通費も考えなくてはならない。こうした話を聞いて小一時間たったころ、夕食となる。

空腹な人々がご馳走を用意

大きな葉にもったお米、カエルの挽肉とタロイモのいためもの、焼魚などが、ゴザの上に次々に運ばれてくる。皿は日本の八百屋さんで使っているようなプラスチック製の緑色やだいたい色のもの、スプーンやフォークはなく、すべて手づかみで食べる。人々は私たちに思う存分食べてもらうつもりなのか、輪をますます大きくして、離れてとりまいている。私たちのために用意してくれたのはありがたいが、栄養不良に苦しむ彼らからこんなご馳走をいただくわけにはいかないと辞退しようと思い、アーチャーにその

ことを告げるが、彼は「ここではお客さんが来たら、みんなで分けあって食べるのがならわしなんだ」と言って、彼らに我々の辞退を話そうとしていない。あとで分かったのだが、その日の食事はすべて、NFSWのほうで調えたそうだ。

私たちは遠まきになっているアシエンダの人たちにもこの食事を一緒にしてもらおうと、数少ない皿によそいはじめた。こうして温かい「荒野のマナ」が始まったのだ。どの皿も最後はなめるようにきれいになった。みんな空腹だったのだ――私たちは慣れぬ土地で移動を続けたため、そして彼らはいつものように。そのあと、歌がはじまる。はじめは恥ずかしがっていた子供たちも、次第に私たちが持つていったメガホンにむかって一所懸命に民謡を歌ってくれるようになった。最後に彼ら全員で「バヤンコ(故郷)」を、私たちは「僕らはみんな生きている」を互いにプレゼントしあう。

無言で微笑む子供達

それから五人ずつに分かれて、家族たちと寝ることになる。部屋は高床式壁面のはしごを登っていったところにある六畳程度のもので、そこに母娘三人が暮らしていた。電気、ガスはもちろん、風呂やトイレもない。寝具、家具も全くなく、ただ竹をくんで作った床があるのみ。用を足すには草むらか、川の上にはられた仮テントですませる他はない。緊張しながら懐中電燈を片手に、そろそろと家のかげに行く。なるべく人目につかぬところと土手を下りていったら、とうとう川に片足をつつこんでしまった。トイレに行くたびにこんな苦勞をし、人目を気にしなければならなかったら(気にするならの話だが)、とくに女の人は大変だろうなあとぼんやり考える。

竹の床にじかに横になったときは、さすがに体の節々が痛かった。ネグロスの夜は冷えこむ。日中の暑さが嘘のようだ。

もってきたトレーナーやTシャツすべてを着こんで寝る。どこからかしら、トランジスタラジオが響いていたのを不思議に思っているうちに眠ってしまった。

朝、ニワトリや豚が床下でとびまわる音が目覚める。豚といってもやせこけ、どう見ても犬としか思えぬ体つきである。高床式の家から下りていくと、外のテールにはもうパンや大豆がならび、コーヒーマで用意されている。明るいところであらためて彼らを見ると、素朴で、どこか寂しそうな目をしている人が多い。子供たちは明るい、あまり声をたてない。無言で微笑む子供が多い。あちらこちらに穴があいたTシャツを、男の子までワンピースのようにして着ている。

衣服は外国からの古着で賄っていると見えて、米国製のものが多かった。私たちも船底に八百箱もの古着のダンボールを積んできたのだが、マニラでエピックという国際活動機関に手渡してしまっただので、ネグロスには直接持っていか

かった。一人数枚でも持っていけば、少しは足しになったろうにと残念に思った。彼らにとって客人は大変うれしい存在らしい。別れ際には泣いている人もいた。アガトゥーナという四十くらいの女性は



交流会で“バヤンコ”をうたう

目を真っ赤にして私を抱いてくれた。(アガトゥーナから十一月に手紙が来た。彼女は病気で、金がないため医者にかかれぬとたどたどしい英語で書いてきた。それでも彼女は大多数の文盲の人々の中で、めずらしい存在である)

何もできず、ただ話だけ聞いて帰る他ない自分の無力さを心にのこし、オウレリオ・アシエンダを後にした。

なぜ人々は貧しいのか

再びジブニーに十五人が重なり合うようにして乗り、次のアシエンダであるサンバークへ向かう。アーチーともう一人の案内係など、乗り切らないので屋根の上にする始末。メーターも方向指示器もなく、やたらにスピードを出すジブニーは、砂埃をあげ緑の大地を走って行く。この豊かな土地で人為的な飢えが存在するなど、一体誰が想像できよう。

このネグロスでは、スペインの植民地時代からひと握りの農園主が労働者をア

シエンダに住まわせ、彼らの生活全体を掌握し、利益を吸い上げてきた。砂糖以外の作物栽培を禁じ、それを犯した者の運命は決まっている。ある日ふと姿が見えなくなり、次の日、近くの郊外で死体となつてあげられる。サルベージである。だから人々は肥沃な土地に何もつくることができない。

サンバーク・アシエンダでも昨日と同様、車座になつて彼らの話を聞いたり質問したりする。ここでも人々は仕事がない出かせぎに行く。食事は一日一回、米は配給制である。

「宗教は？」と聞くと、「ローマン・カソリック」と返ってきた。しかしそれは地主がローマン・カソリックであるという事で、彼ら自身は日曜礼拝にも行けず、聖書も開いたことのない人が多いそうだ。ある老人が「地主は我々の苦勞を『すべて神が与えたもう恵み』と教え諭し、懐柔するのに、カソリック教義が都合よいのだ」という話をしてくれた。子

供たちを小学校にやるだけの金はない。唯一の教育といへば、読み書きのできる人が、アシエンダの一角に子供たちをあつめて文字や数字を教える程度である。

前日のアシエンダにもサンバーク・アシエンダにも、十代の女の子の姿が見えなかった。バコロド市内やマニラにメイドとして働きに出ているという話だが、私の脳裡には、貧しい村から働き口を求めて都会に出てくる夜の街の女性たちのことが浮んだ。

無力な私たちは 何をすべきか

午後はバコロド市内の州立病院とスラム街を見学する。

州立病院は州唯一の無料総合医療機関で、栄養失調の子供たちのために特別室が設けられている。そこには七歳で五キロ、五歳で二キロといった重度の栄養失調の子供たちが入院しているが、部屋に入りきらず、下にまでベッドが置かれて

いる。顔中に血管をうきあがらせ、しわくちゃの手をあげて泣いている子供たちの傍に、なすすべもなくつきそう母親の姿があつた。各援助団体の金も上のほうで搾取され、この子供たちの食事代にまではまわつてこないそうだ。

スラム街は海に沿つた汚泥の地の上に建ち並ぶバラックである。近くのゴミ捨て場から、金になりそうなものを拾つてきては売って生活している。それでも暮らしたはアシエンダの人々より楽なようで、子供たちの大半が学校に通っている。

わずか二日間ではあつたが、ネグロスの土地と人々の生活を十分に心にしるしてマニラへ帰つた。ネオンサインのきらめくきらびやかなマニラの町中を、空港からマニラ港へと向かう間、政治、経済のからむ一国の問題の解決に、我々素人がどのような形でたずさわっていったらよいのだろう、と思ひめぐらすばかりであつた。



思い出—— 北の国の食べもの

神奈川県藤沢市
栗原みどり

憧れの北海道

今年もライラックの咲く季節になりました。毎年今ごろになると、私の心ふるさと北海道旭川をしきりに思い出します。

憧れの北海道に転勤になったのは今から十年も前、赴任先は旭川です。

十一月の半ば、一足先に行っていた主人を追いかけて千歳空港に着いた日は、しぐれて寒い日でした。迎えにきてくれた主人の車で旭川へ向かう途中、みぞれ混じりに見る景色はもうすっかり冬で、茶色く枯れた葉の間から、なかなかまでの赤さだけが眼につきました。旭川の街の灯を峠の上から見たとき、何ともいえぬジワーとした熱い感情が湧いたのを覚えています。借り上げの社宅にやっとどりついたときまわりの家々の赤や黄のカーテンが、家の中のストーブと電気に照らされてか、明るくカラフルにみえたのが第一印象でした。つまり、北海道の

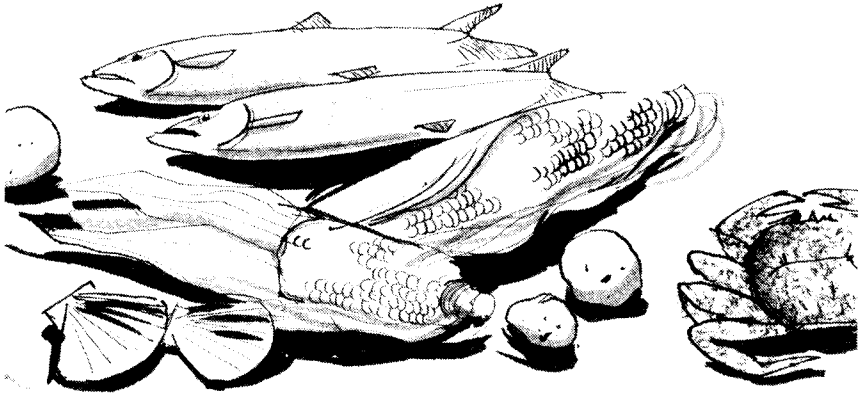
家は、雨戸がなく、二重窓にカーテンなのです。

旭川の生活が始まりました。思ったよりよほど都会的で、駅のまわりは特に繁華であり、立派なデパートが立ち並び、ゆったりとした買い物公園がありました。忘れがたいのは食べ物のおいしさでその思い出を書いてみたいと思います。

水と魚と貝と

旭川が一番おいしいもの、それは水です。水に味があるというのかコクがあるというのか。これは東京の水で暮らしていたから余計に感じたのかも知れませんが、旭川で二番目の子を身ごもりましたが、そのつわりの最中にもこの水だけはおいしく飲めました。

魚屋さんに行くとき一番の大衆魚はホッケ。これを北海道の人は実によく食べます。二枚におろして塩やき、ミソづけ、煮つけ、フライに天ぷら、それに開き。さしずめ関東のアジかいわしといった使



い道の広さと出まわり方。アジといえばそのころ旭川ではめったに見られませんでした。たまにデパートでアジの開きを買ってなつかしんだくらいです。

サケは文句なしにおいしい。東京の一切れいくらで売っているサケとは塩かげんが違います。切り身の厚さもグッと厚いのです。秋に川にあがったサケが出まわるころには、子が入ったサケを一尾買ってきて、まず子（イクラ）を出します。うす皮に包まれた生のイクラをほぐすには、大根をオロシ金ですって、そのギザギザの切り口でイクラを一つずつほぐしていきます。ほぐしたイクラにうすく塩を振り、酒、しょうゆ、みりんにつけて二日もたつと、それはおいしいイクラの出来上がり。どんぶりめしに振りかけたり、大根オロシの中に散らしたり、ああ北海道ならではのごちそうです。

また、生のイクラを（味つける前の）ホタテの貝からの中にサジで一盛り入れ、わけぎのみじん切りをタップリかけ、み

そ、みりん、酒でのばしたタレを一さじかけて貝がらごとストープの上で焼きながら食べるおいしさ。

さて、サケのほうは一般的な食べ方の他に、サケをブツ切りにし、かたくり粉をふりかけて熱湯の中に入れ、ツルンとした舌ざわりのサケを酔じょうゆで食べるおいしさは、北海道に行ってから覚えしました。ヤナギのマイという魚があります。実にきれいな名前ですが、煮つけて食べます。ソイ、これもさしみか煮魚。真ガレイ、キンキは東京でも見なれていました。

キンキはよく鍋に入れます。ブツ切りにしてみそ汁に入れるのも、旭川の人はよく食べます。私が気に入った食べ方はキンキを丸のままよくウロコと腹わたを取り、塩、コショウを振り、一ぴきのキンキに対してキャベツの葉を五枚ほどゆがいておきます。そのゆがいたキャベツでキンキをタップリ包み、大皿に盛り、さらにその上から塩、コショウを振り、

酒をオタマに一杯振りかけ、よく蒸気の上がった蒸し器で一氣に皿ごと蒸しあげます。アツアツにソースをかけて食べるとおいしさは、キンキから出る油とエキスでキャベツがトロけるよう。中身のキンキもさらに美味。これは我が家のごちそうでした。

次は貝、ホッキ貝というのがあります。貝ガラを割ったばかりのをさしみで食べたり、サツとゆがいて酔みそ、すし種、おいしくて今でも食べたくります。北海道で一番出まわっているのはホタテ貝、これは東京で食べるよりも文句なしに新鮮で安くておいしい。何よりもおさしみにして実によく食べました。

あとツ貝が出まわっています。クルクルとうず巻きみたいな貝ガラから身を引かず出し、下のほうの黄色いところは酔う部分だからと切り落とし、塩でもんだ後乱切りにし、きゅうりの乱切りとガラス鉢に入れ、薄い塩水に浮かして、水貝として食べたり、または貝つきのま

ま東京のサザエのつば焼きのように焼いて食べるおいしさ。ああ、北海道の魚市場はおいしさの宝庫です。

みがきニシンの生干しをサツとあぶって、みそをつけてかじりながらの晩酌、ニシンのぬかづけ、そしてもちろん毛ガニのおいしさは周知の通りでした。

ジンギスカンは 雰囲気で食べる

お肉のほうは、何と言ってもジンギスカンが北海道の代表です。タレにつけ込んだラムが、キロ売りでとても安く売られています。実に実によく北海道の人はジンギスカンを食べますが、東京人の悲しさで、とうとう私はラムの匂いに慣れることができませんでした。

後に札幌に住むようになったとき、かの有名なサッポロビール園で、ジンギスカンを黒ビールで食べましたが、周りの雰囲気になまき込まれたためか、匂いも気にならず、実によく食べられました。



また札幌の北のはずれにベケレット湖園という所がありますが、そこは中でジンギスカン料理を食べる人だけが入れます。個人のお庭とか聞きましたが、手入れがよく、広くて気持ちの良い所、ちょうど五月の連休でどこも混んでいるのに、ここだけはゆったりと、水ばしうがあちこちに咲いていたりカタクリの花をみついたり雑木林の中に思わぬ花が咲いていて、恋人達なら一日歩いて語らってもまだ飽きないような所でした。湖には鴨が浮いていて、その湖のはとりの東屋で

食べたジンギスカンは、おいしさひとしおでした。

私が住んでた当時、旭川もはずれのほうの肉屋さんでは、凍った肉をスライスして売っていて、それが行ったばかりのころは驚きでした。

凍る大地の味

北海道の野菜。北海道のじゃがいもがおいしいことはだれでも知っての通りです。

このじゃがいもの変わった食べ方として、じゃがいもをマッシュポテトにし、その分量の三分の一くらいの片くり粉を混ぜあわせまます。それを手の平でまな板の上でゴリゴリやって長い棒状にします。その棒状になったものをトントんと庖丁で一センチぐらいに切り、みそ汁に入れるのです。おもちと白玉のあいこのような感じですが、この食べ方も北海道に行ってから覚えたやり方で、こちらに帰ってきてから思い出しては、実にくさ

んのみそ汁にこれを入れ、お屋がわりに今でもよく食べます。

アイヌネギというのが春出まわります。ニンニクよりも匂いが強く、かなり精力がつく野菜で、これをゆでて酢みそあえで食べるのは、酒の肴にもってこい。クリカボチャ、本当に栗のようなカボチャを小豆と甘くたきあわせて、お茶受けによく頂きました。キノコ類もよく出まわって、こちらのマイタケのようなもので、色が黄色いのはみそ汁の実に大根オロシと入れて、おいしく食べました。

旭川の豆腐、とっても美味です。水がおいしいせいかしら？ もちろん豆腐屋さんのがおいしいけれど、スーパーのも東京よりおいしく感じました。東京では見たこともない大きな三角形の油あげを売っています。

くだものも、アイスクリームもまだまだおいしいものがたくさん旭川でした。寒い寒いとは聞いていましたけれど、東京とは寒さの種類が違います。初めて

の冬はびっくりぎょうてんの日々でした。

朝一番にすることは、熱湯をやかん一杯沸かすこと。その熱湯を凍りついたドアの周りかけ、氷がゆるんできたら力一杯ドアを開け、しばれる寒さでそれでも開かないときは体当たり、これでやつと玄関のドアが開きます。

春先には、庭先に積みあげた雪がくずれてドアをふさいで、外に出られないときもあり、近所に電話で雪掻きをお願いして、やっと外に出られたことも、今では懐かしい思い出です。

外に出たら雪掻き、軒のつらら落とし。そのつららも寒い日は軒から地面（雪面？）まで届く長さです。でも朝早くキーンとした寒さの中で見る木々は樹氷でキラキラ輝き、それはそれはきれいです。

屋根は降る雪が積もって一晩で氷になります。日曜日にはどの家も夫達が屋根に上がって、氷をなたやつるはしでたたき割って雪を下ろしました。後で札幌に住むようになったとき、屋根の傾斜も

あるでしょうが、日中陽が照ると雪がすべり落ちていくのを見て、やはり札幌のほうが暖かいと思ったことでした。

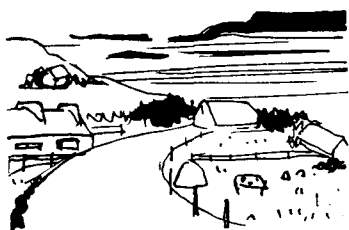
旭川の家トイレは汲み取りでした。

冬の間は用を足すそばから凍っていき、そこだけ山になっていくわけですから、春先にはもう手が届きそうで、暖かくなるとそれが一時にとけて、あふれるんじゃないかと心配したり、冬中干せなくてしめっぱいふとんを、ストーブの周りで乾かししたり、それはそれは春の来るのが待ち遠しいのです。そんな夜、子供連

づけで食べるおいしさが忘れられなくて、こちらに戻ってきてからも何度か試みましたが、気候がまるで違うので、こうじがすぐ発酵してしまうし、粕づけの粕にしても、あちらでは板粕ではなくみそ状のものを使うので、どうしても北海道のようにはいきません。あれはやはり寒い所で野菜の保存という意味も兼ねてのこちそうでしょう。

雄大な景色、おいしい食べもの。

そう、魅力が一杯の北海道なのです。旭川はあずましい北の国です。



（え・堀切潤子）

投稿ホットライン——精神一到何事か成る？

ナウい熟年

死計

神奈川県横浜市 井上 治子



私の四十代中ごろに、姑がときどき具合がわるくなった。お医者さんは「今度はむずかしいよ」とそのたびに言った。姑の死におびえて、お墓を買って準備した。しかし注射をするとすぐ直った。

何度もむずかしいと言われながら、本当に寝ついたのは、数年たって九十五歳のときであった。

姑は昼間眠り、夜は大声で呼ぶので、私は満足には眠れない状態が続いた。昼間はおむつ洗いに明け暮れた。雨の日は乾かすゆうつになった。

二十年前は、洗濯機も手動で、乾燥機も紙おむつもなかった。看病づかれで、腕は後ろへ回らなくなり、足は上り下りに激痛が起った。

そのころよく看病疲れで、お嫁さんが亡くなるという話をきいて、自分も姑より先に死ぬのではないかと不安になったことがあった。

その姑も、感謝の言葉を口にしながら九十六歳で他界した。そのとき、何年も

看取るお嫁さんは大変だとつくづく苦勞が身にしました。

半年で役目の終わったことを申しわけなく思いながら、姑の靈に感謝をのべた。姑の法事をすませてから、自分の体を直すことに夢中になった。マッサージに通い、電気治療に、鍼、お灸、指圧、そして温泉は湯河原、伊豆にまで出かけた。

二年目ごろ、ようやく手足の痛みがとれて普通の体に戻った。それから三年、いろいろなパートで働いた。自分の厚生年金が入るようになって、こんどは遊びに熱中した。大山阿夫利神社に登り、箱根山に行き、鎌倉の山々を歩き回ったが三年で終わった。

また足腰が痛み出したのだ。私は闘病生活にはいった。しかしこのころは、死ぬことは考えていなかった。指圧の先生が「神経痛じゃあ死なないよ」と言ったのを信じていたからである。

何かに熱中すると、その倍の年月を病むことがわかった。そのとき六十歳をす

ぎていた。気をつけながら、恐々と始めても、すぐ熱中する性格は直らず、失敗をくりかえしている。

近所の知人が次々と亡くなり、こんどは自分の番かしらと思うようになったのは六十五歳。その後二、三日は身辺整理に没頭する。それもすぐやめる。財産整理ではなく、趣味のがらくたなので、死ねば捨てられることに気づくからである。

おばあちゃんへのラブレター

東京都豊島区 藤

輝美

寝たきりの母に区の好意で入浴サービスが受けられることになり、その日を迎えた。

しかし当人は朝から頭がいたい、寒気がするなどとやたら機嫌がわるい。近ごろとみに人嫌いとなり、定期的な民生委員や保健婦などの巡回もことのほか敬遠する。まして入浴ともなれば、見も知らぬ他人に寄ってたかってみくちやにさ

それでも死後の準備はしている。息子たちがまごつかないように、告別式用の写真を書し、お寺で戒名を作り、墓石に彫り、位牌に書きいれて、あとは待つばかりである。

でも、死神が迎えにきたら、私は泣きながら逃げまわると思う。六十七歳、心の支度はできていないし、まだ死にたくない。

れかねない、などとハナからそっぽを向いているのだろう。

正直いって私にも多少の不安はあった。それというのも高層住宅の四階住まいとなれば、本番までの準備にも手間取るのは確かだし、動けぬ老人相手にどんな顔ぶれがどのように事を運ぶのかと、朝から落ち着かなかった。

やがて約束の時刻に現われたのは、男

性一人を含む四人のメンバーで、型通りの血圧、脈はくの検査が終わると、あれよあれよという間もなくわが家のダイニングキッチンには、たちまちにしてにわか浴室に仕立てられた。

「さあ、おばあちゃん」

リーダー格の声が合図で、六本の腕がさっと伸び、干からびた体のしわしわの下腹部を手際よくタオルで被う。

「いいかい？ はじめるよ」

今度は待機していた男性が角張った母の裸体をひよいと抱きあげ、がっちりと逞しげな両腕にすっぽり包み込む。

「オレにつかまりな。ほら……」

とおそろのおそろ差し出した両手を、素早く自分の首に巻きつけ「大丈夫だよおばあちゃん。ゼッタイに落っこしたりはしねえよ」

ぞんざいな口調のなかにもほのぼのとしたぬくもりが伝わり、まさに気はやさしくて力持ちの実感が頼もしい。

続いて冷え症によく効く温泉が入って

いるからと、ちっちゃな母の体は浴槽のなかへふかぶかと沈められ、寄ってたかって全身を몬드たりこすったり。気持ちがいいでしょうと代わるがわる顔を覗き込まれ、こくりと神妙に頷いていた。

最後に洗髪が終わわり、バスタオルにくるまっただまま例の男性に寝床まで運ばれ、無事終了である。

一同が引き揚げた後の母の表情は、これまでとは打って変わって晴ればれとしていた。二か月振りの入浴だし、さぞかし「いい湯だな」の余韻に浸っているのだろう、と解したが、上機嫌の原因は例の「力もち」の男性にあるらしい。

「ほんまにええお方やった」「そうね、あの若い看護婦さん？」「ちがいますかな、男前のおにいちゃんや、としなんぼやろ」とかなりの関心を寄せている。

「ほら、いちばん先輩の方も、感じがよかったわよ」と水を向けても「そうか」と素っ気ない。「ここへつかまりイいうて……、やさしゅう抱いてくれはった」



上野千鶴子の本

女という快樂

〈女と男の關係の解放〉を説きつづけ、時代の稀有な転換点をスリリングな発見とともに生きたフェミニストのすべてを収める。 1900円 ¥300

女は世界を救えるか

これからは女の時代!? □当りのよいフェミニスト神話を拒否し、女と男の關係を問い直す。 1600円 ¥250

構造主義の冒険

レヴィ=ストロースの方法を批判的に再構成、構造主義の洗練された核心がここによりみかえる。 2200円 ¥250

上野千鶴子編 主婦論争を読む I・II

各1900円 ¥250

B. シンクレア 矢木公子・上野千鶴子他訳 アメリカ女性学入門

2000円 ¥250

A. クーン他編 上野千鶴子他訳 マルクス主義 フェミニズムの挑戦

2400円 ¥300

勁草書房

東京文京後楽2-23
☎814-6861 (朝)東京5-175253

かつてのつれあいと過ごした遠い日が甦ったのか、いつにない柔らかな表情を見せていた。しかし憧れの男はんはそれ以来い子ども姿を見せず、メンバーの顔ぶれもつきつき変わったが、いつの場合もボランティアに徹した奉仕の精神で、温かく接してくれる。母も「こんどの男はんがいちばんよろし」とその都度くりかえしていた。

「お風呂に入ってますかアー」

久し振りにわが家を訪れた保健婦のKさんの笑顔につり込まれ、想像もつかなかった母の反応を伝えると「ヘエー、お宅のおばあちゃまも？」と目を丸くする。

Kさんによると例の男性は、どこの老婆にもかなりの人気者だとか。たとえ頭のとっぺんが淋しかろうが下腹が出っ張っていいように「おにいちゃん、おにいちゃん」と彼らの来訪を待ちわびる姑に「いやらしい」と非難の目を向けるおヨメさんもあるという。

夫は「いろボケだよ、まともならば羞恥心があるはずだ」としたり顔できめつける。じゃあいい年をしてポルノビデオに熱中するお方は、いったいなにボケでしようねエー、と返してやろうか。どうやらうちのおっさんは、性欲は男だけのもの、いくつになっても健在なのだ、

本気で信じているらしい。

私だって老婆たちのこの種の感情を、すぐさま性欲に結びつけるつもりはないが、男女を問わず人間の本能だろうし、生きていることへの証だと思っている。定期的な「入浴サービス決定日」の知らせを受け取る母の表情は、思いなしかな若やぐ。

次回は○月○日と印刷されたなんの変哲もない一枚の葉書が、寝たきりのおばあさんにとって、ささやかなラブレターの役目を果たしてくれたらと、ひそかに念じている。

(エ・カステラネンコ)

投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

私の「女工哀史」

東京都多摩市 荒井 明子

転職をするときは、それなりの理由がある。

「好きなことで生活できるようにしたい」と昭和四十八年、江戸小紋の着物を染める会社に勤めた。

会社は西武新宿線の中井駅から二、三分の所にあった。八月の暑い中を、一時間半ほどかけて通勤しはじめた。作業場はマンシヨンの一階で、染めているのは

三十人ほどの女性達であった。三十代から五十代ぐらいの人達が、二列に並んで畳に座っていた。仕事中の姿勢はまちまちで、正座している人、両足を投げ出している人、あぐらの人、疲れたのか手を休めてタバコを吸っている人。しかし、大方の人はひっきりなしに刷毛を動かしていた。うす暗く、静かで、おしゃべりがない職場であった。

反物はすでに下絵が描かれており、色がついては困る所にだけ、防染剤として糊伏せがしてあった。糊のついていない部分を染めるのが、私達の仕事であった。一反ごとに、色調を決めるメモがはさんであり、使用する染料の名前や番号が書かれていた。座布団の周りには、染料を入れたボールが、いつも十個ほど並んでいる。下絵に合わせて、染料と刷毛の大きさを忙しく替える。細かい作業で、約十メートルの一反を仕上げるのは、なかなか根気がいる。

糊のせいで、色がちよっとくすんで見えるのが残念だったが、着物になったときを想像しながら染めるのは楽しかった。ついつい手を止めて模様を眺めたり、染めた色に満足して見入ったりしていた。そんなある日、山の手線の車中で、うちの会社で染めたと思われる着物に出合った。その女性は、座っている私の前のつり皮につかまって立った。

地色は渋い茶色で、縦に並んだ花柄は

白、黄、青の更紗模様であった。ひょっとしたら私が染めたのかもしれない、と思うとドキドキした。興奮したままじっと着物を見つめていた。

「ああ、この花はこの色を使ったんだな」「ここは、にじんでむずかしかった……」

染めていたときより着物にしたほうが鮮やかで、印象は強烈であった。その人はすぐ降りていった。

それ以来、一段と染めることに熱心になった。といっても相変わらず「この色いい色だわ」「この柄がいい」などと思いがながらの仕事だから、手を休めることが多かった。一反の反物を急いで染め終わるのは、何だかもったいなかった。

染め上がった反物の隅に、鉛筆で小さく名前を書き入れると回収された。糊を取る作業で、私の名前も糊とともに消えてゆく。

給料は出来高制だとは知っていたが、部屋の壁に、全員の染めた反物の数が、棒グラフで一覧表にして貼ってあるとは

知らなかった。私は出来上がりの反物の数が一番少なかった。「はじめてだから仕方がない」とのんびりしていたが、二か月たっても三か月たっても、私はビリであった。棒グラフはそのまま給料の額でもあった。

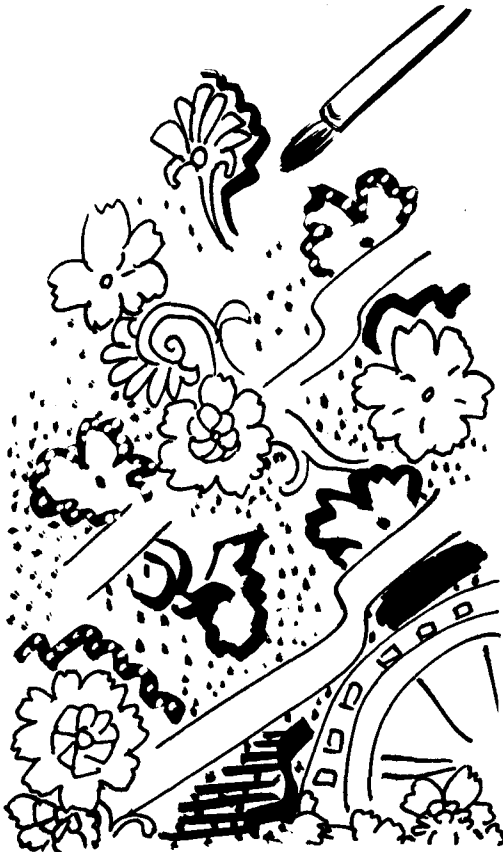
アパートで一人暮らしの私は、生活費が必要であった。半年たっても生活費には程遠い給料であった。夜、アルバイト

もした。健康だけが取り柄の私も、少し不安になってきた。

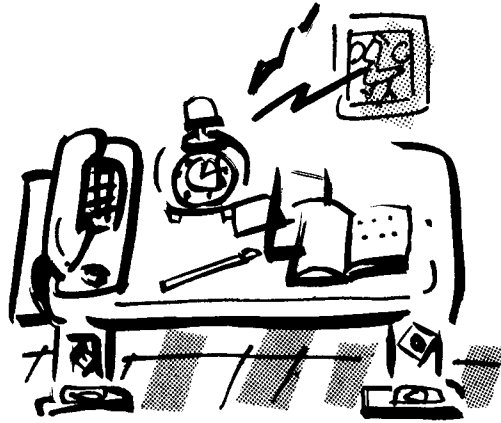
会社は、健康保険も失業保険もボーナスもない職場であった。巷では、ボーナスのニュースでにぎわっていた。

私は、仕事に未練を残しつつも、やる決心をした。

「染め物は、やはり趣味にしておこう」



共働きと有給休暇



夏休み!! 小五、小二の子供の一応母親させてもらっている私は、夏休みが頭痛の種である。幸い、週休二日制で年休二十日ある主人ががんばってくれるし、義父母も「夏休み、待っているよ」と言

神奈川県川崎市 日下部直子

ってくれるので、何とか無事五回の夏休みを過ごしてきている。

大学通信教育部職員の我々は、夏はスクリーニングで一年中で一番忙しいときなのだ。それでも七月下旬から八月二十日ぐらいまでの間に三日間休める。さらに八月の日曜日の中、三日間は出勤日があるので、その振り替えて週日に三日間休むことができる。また、八月下旬から九月初旬まで、日曜日から日曜日まで八日間連続して事務所が閉じられる。企業や商店に比べれば本当に恵まれてはいるものの、しかし、七月下旬から八月中旬の夏休み真っ盛りが、非常に苦しい。

今年、私は次のような休みのとり方をした。

ちなみに、夏休みとしての三日間と日曜出勤三日分の休み計六日間を、連続し

てとってはいけない。連続してとる場合は、二日間だけならよいというルールもある。

七月三十日 夏休み

三十一日 夏休み

八月 一日 出張（移動日のため実質仕事なし）

二日 出張

八月一日は、事実上休暇なので、三日間を利用し、主人の実家へ行くことにした。七月二十九日の夜行で出発し、二日間「東京からきた嫁」としてがんばり、八月一日の午後大阪に向かった。子供達も喜び、舅、姑も喜んでくれて、良い休みを過ごさせてもらったと私も嬉しく帰京した。

職場から見れば私は、連続四日（日曜日の八月三日を含めると五日間）不在となる。その点は、庶務課長にも事前に了解をとったことだった。

ところが、出勤したその日の昼、「お姉様」からご下問があった。

台所でお茶をいれているところを見計らったように、おいでになり、「ねえ、あの夏休みはどういうことなの？」ということだった。「えっ」と聞き直すと、「三日以上続けて休んじゃいけないんですよ」ときてくれた。

「ええ、けれどもね、八月一日は出張の移動日で、八月一日の夜十二時までに大阪に行けばいいんですよ。極端に言えば、だから、七月三十、三十一日が夏休みで、八月一日は移動のため出社せず、ということとで課長にも了解を得ているんですよ」と答える間、厳しい眼差にさらされて、ドキドキものだった。

思い返せば、産休をとるときも、育児休業をとって間も、いつもこんな眼中を泳いできたような気がする。特定の誰ということではないけれど、「直ちゃん、大変だけれど、頑張りな。いまに楽になるよ」という励ましの声とは別に、主任に「日下部さんの育児時間はいったいいつまでなんですか」と、アフター・

ファイブの飲み会るとき、事新たに聞いていたという話が入ってきている。育児時間は一年間請求できるということを知った上で敢えて聞くのは、悪意があるとは思えない。

法律で決められた以上に優遇されようなどとは露ほども思っていないが、夏休みのとり方の件と言い、不特定少数の「お姉様達」の突つきあい腐ることしきりの私なのだ。

核家族で、二人とも地方出身で、しかもフルタイムの共働き。共働きとしては最低の条件だけれども、それでもギリギリのところまで有給休暇や育児時間をめ一杯利用させてもらっている私。

理解ある眼を向けてくれるのはインテリの上司に多く、冷たいのは、こんなに私は働いているのよと気負った「お姉様達」のような気がする。温かさに甘えることなく、冷たさにメゲルことなく、マイペース、マイペース!!

(え・カステラネンコ)

誌上販売

地方にいらしてはなかなか手に入りくい本を、読者に直接お届けするサービスをしています。一割引、送料無料で郵送いたしますのでお電話またはハガキでお申しこみ下さい。締切りはもうけません品切れの節はお許し下さい。

女の立場から医療を問う 中村智子著

(田畑書店 一五〇〇円)

誰のために子供を産むか 青木やよい著

(オリジン出版センター 一六〇〇円)

なぜこの学校に行けないの 障害児と普通学校・全国連絡会編

(八月書館 一六〇〇円)

教科書に書かれなかった戦争Ⅰ、Ⅱ

(梨の木舎 一二〇〇円)

ルポ内申書・見えない鎖 佐藤章著

(未来社 一三〇〇円)

かりだされる子どもたち 林雅行著

(柘植書房 一九〇〇円)

あざみ
薊の花 (富本一校小伝) 高井陽・折井美

耶子著 (ドメス出版 一七〇〇円)

とともに

——私の放浪の旅——

法村香音子



八路軍

＜中国丹東＞編組編集による 丹東導遊図 - 1985年10月出版より



() 内は現在

加筆大字は著者

至湯池子

サイレン山

元はモヒ患者の
衛生技術廠
收容所だった家

兜山

兜小学校

房産住宅

ロータリー

六道溝

鴨

朝鮮



拉致された私たち

鋭い急ブレーキの音とともにジープが家の前で止まるのと同時に、

「コケーッコ、コケーッコ、ココココ、コケーッコ！」

けたたましいめんどりの悲鳴があがった。

「何なのよ！ 何しに來たの！ 帰って！ 帰って!!」

母のするどい叫び声に下駄や靴の音が入り乱れ、突如として庭先で起こった騒ぎ。

私は箒を持ったまま二重窓に駆け寄った。庭に米の研ぎ汁を撒きに出ていた母が、柄杓を振り回して二人の八路軍の兵隊と渡り合っている。棒立ちになっている私のそばに寄ってきた二人の妹は、私にすがってギアギア泣き出した。

母が戦っている相手は、父を送ってうちに来るので、ときどき見掛けるようになった八路兵だ。しかもそのうちの一人

は見たことがある。私は何をどう考えたらいいか分らなかった。終戦直後にあちこちで起こった中国人の掠奪が、今ごろになってうちにも來たのだ、と思った。

（大変なことになった。どうしよう……。妹達を連れて逃げなければ……）

私は混乱した頭で、裏の石炭置場を思い浮かべた。しかし、母をそのままにして隠れることはできない。私は畳にぺたりと座り、すがりついて泣きわめいている二人を両手に抱えてゆさぶり、「黙って！ 黙って……」と小声で何度も繰り返しながら、（どうしよう……、どうしよう……）と思っていた。

ところが、外の騒ぎはほどなく収まったのである。やりあっている、と思ったのは私の見間違いで、一方的に怒っている母を相手が宥めていたのであった。

二人の兵隊のうち、年かさのほう差し出した手紙をようやく受け取った母は、薄暗くなってきた庭の真ん中に立ったま

ま、ためつすがめつ、しばらくそれを眺めていた。

米の研ぎ汁をひっかけられても兵隊たちは怒った様子もなく、母が手紙を見ているあいだ笑いながら何か話し、濡れているところを手で払っていた。

八路というのは、中国共産党の軍隊の通称である。その当時は一般的にそう呼ばれていた。

彼らは黒か消し墨色、あるいは草色の木綿の、だぶだぶでよれよれな軍服を着てベルトを締め、太い包帯のようなゲートルを巻いて同じ木綿のだぶだぶの帽子を被っており、お世辞にも格好良いとはいえなかった。

私達は父の関係からときどき八路兵というものを見るようになっていた。だが、八路軍そのものの性質を知らず、その軍隊を構成する人たちの人柄までを推し量ることなどはできなかったから、暴徒と同じに見えたとしても無理はないといえよう。彼らが、天下に名だたる「三大規

律、八項注意」という立派な軍律を持った人民の軍隊だということを知ったのは、彼らと一緒に生活するようになったのこのことである。

そのときの、彼らが汚水を引っ掛けられても怒りもせず、穏やかに笑って母の様子を見ている光景は、私には不可思議でさえあった。

母は半信半疑な様子で手紙に目をやったまま、ゆっくりバケツの中に柄杓を入れ、やがてそれを提げて玄関に入ってきた。

「香音ちゃん。父ちゃんがすぐにあの私たちと一緒に父ちゃんのところにおいて。荷物した後で取りにこれるから、今すぐ、要るものだけ持っておいで、だって……これ、父ちゃんの字だから大丈夫だと思っただけだね」

私は一応考えてみたが、十歳の頭では、どうにも分らない。

「じゃあ、あんたも自分の物を用意して。だらしくしていると、こういうとき困

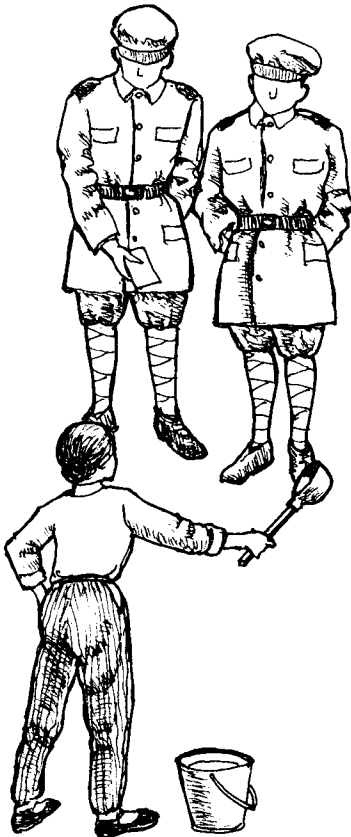
るのよ」こういうときなんて、そんなにあるもんじゃないのに、母は台所に行きながらぶすぶす言っている。

まだ夕ご飯は作ってなかったから、台所の始末だけして出て行くことになった。自分の分だけはすぐに用意できたが、母のほうは台所の始末が終わってから荷作りに取りかかった。母は行李を縛りながらあれこれと私に指図し、私はそれに従って整理箆筒から妹達の服や下着を出

して着せたり、風呂敷に包んだりとかかなり急いだが、用意ができたときは日はとっぷり暮れていた。

兵士たちは急がず騒がず、のんびり庭で待っていた。どうやら私達は見張られているらしかった。

近所の人達が、うちで何か起こっている、と思ったらしく、何人かがジープを遠巻きにしてしばらく様子を見ているようだったが、後難を恐れてか、たいした



ヤ

ことではないと思つたか、声を掛けてくれもせず、行李を兵隊達に運んでもらうころには、陽がかげつた道に人の姿はなかった。

いつもはヤンチャなのんちゃんも、リュックサックを背負つて生子ちゃんと手をつなぎ、えらく神妙な顔をして上がりがまちに腰掛けていた。

私は何だか、もう、この家に戻つてこないような気がして、開け放した二つの部屋を見回した。本当にうちは何もなの家だった。六畳の部屋の壁に、脚を折り畳んだ茶ぶ台が立てかけてあつた。おもてに向いて整理筆筭、奥の四畳半に本棚ひとつ……。

八路は、私達四人がうしろに収まったのを見届けてからライトをつけ、ジープをバックさせた。

そのとき、二重窓のガラスを通して家の中がピカリと鈍く光つた。

(あ、ペチカだ)

なかなか燃えつかないペチカ……でも

良く燃えてくれると暖かつたペチカ……。

何だか急に悲しくなつた。

ジープは氣を使つた運転でバックのま角を曲がり、住宅の外れの通りに出た。ポツン、ポツンとひどく間を置いて立っている細い電柱の街燈が、汚れた白い笠をうつむけ、近づいてきては遠ざかつていった。ぼろん、ぼろんと涙が出てきた。

「母ちゃん……、にわとり小屋の鍵はずしといたの？」

「ん……」

「金網は？」

「開けておいた」

「イタチ、大丈夫かなあ……」

「大丈夫よ……心配しなくても……どこかで何か食べたらあの小屋に帰ってくるわよ」

「……もしかしたら、今度帰って見たら、小屋にたまごいっぱい産んでるかもしれない

ないね」

「そんなに早く、大きくなるわけないでしょ」

母が笑つた。

車が本通りに出て東に向かうと、本当のところ、どこに連れていかれるのか分からないと思つている母は、不安なのか緊張し、腹をくくつたような硬い顔になつた。

私は、また家に帰つてこられるのかこれられないのか、べつに心配もせず、何の不安も感じなかった。片手でジープにつかまり、のんちゃんの手を握つてオカッパの髪を風になぶらせ、前を見たり後を見たりキョロキョロしていた。

山の麓のほぼ真つ直ぐ、線路に沿って延びている道路を走り、安東市内に向かった。

にわとりを自由にしてきた私達は、まさか自分達がこれから自由を奪われるとは思つてもみなかつたのである。

八路軍に軟禁される

私達の住んでいた六道溝の房産住宅は、安東市街から西へ二キロ、鴨緑江の下流にあたる。サイレンはないのになぜかサイレン山と呼んでいる低い岩山に登れば、六道溝の中国人商店街も見え、鴨緑江が帯のように光り、朝鮮が実際より近づいて見えた。サイレン山にはさまざまな野の花が咲き、鴨緑江に流れ込む、私が溺れかかった小川もあった。

一步家の前に出て右手を見れば、道の真ん中に、私達の学校の名に冠した兜山が本当に兜そっくりにこんもりと眺められた。

思い出が、夕闇のなかに遠のいて消えていった。

市街に近づくとき次第に明るくなり、ガードをくぐって安東駅の前に出たらパアッと明るくなって、私の頭から房産住宅での生活はさっぱりと消え去っていた。

私たちのついたところは、安東省政府

(旧省公署)であった。安東の東の端に位置する元宝山の中腹に建っている、どっしりとした風格ある三階建ての建物である。

ジープはなだらかな車寄せに入り、正面玄関の、太い柱に支えられた屋根の下に止まった。運転していた若いほうの兵隊が乱暴に鳴らした、びっくりするほど大きく響くジープのラッパに呼ばれて、父が数人の中国人と一緒に玄関に出てきてくれた。

父に先回りしながら、「みなさん、よくいらっしました」と、手をさし延べてきた若い人がいた。それが私達と侯さんの出会いであった。

二階の、安東の町が見渡せる一室に部屋を与えられた私達は、その日からそこで軟禁状態となったのである。

そういうことになった当時の状況を少し説明せねばならない。

終戦直後の中国はどこでもそうだった

が、安東も、為政者がくるくる変わった。日本人の次は国民党、ソ連軍それから八路軍、そしてそのどれもがいて、どれが「あたま」だか分からない時期もあった。しかしすぐに八路軍が主力となってからは、情勢は約半年目ぐらいいは安定し始めていた。

終戦前の省公署衛生課からそのまま引き続き戦後も省政府衛生課に居残った父は、雇い主が変わったわけだ。当時の父にとっては、医療、防疫関係の仕事をしていさえすれば、どの政府に勤めても同じことであったが、それがたまたま八路軍政府になったにすぎない。

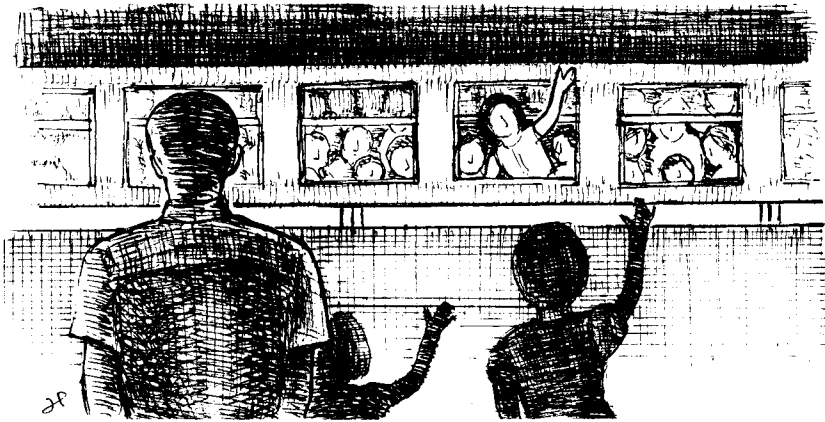
だが、新京の衛生技士廠で働いていたときにワクチンを作る技術を身につけていた父は、引き揚げが本格化した五月、六月にはすでに、戦後の混乱のなかで次々と各地で発生していた伝染病の予防や治療に活躍しており、夢中になって仕事しているうちに、八路軍に不可欠な存在になっていたのであった。

実際に患者と接する医者としての仕事以外に、特に防疫の技術を必要とされて私達を連れにくる数日前から、父は拘留されていたのだった。

父は昔から出張が多いし、家を空けても私達はさほど不審にも思っていないかった。

父は父で、「家に帰せ、働かない」と、ゴネたらしく、手を焼いた八路軍政府は、父の身柄の拘留とともに、父に落ち着いて仕事をしてもらうために、私達家族が必要になったのである。同時に、私達だけ日本に帰して父を身軽にしたら逃げられる恐れもあった。だから、日本人の集団帰国にまぎれて父が逃げ帰らないように、家族もろとも軟禁されることになったのである。

今になってみれば、この、家族ぐるみの抑留のお陰で私達はばらばらにならずに済み、得難い経験をしたことになるのだ。



軟禁されてから二か月あとの八月の暑い日の午後、私達は安東の貨物駅で、父の友人達や大勢の日本人達が列車に乗って引き揚げるのを見送った。

後で聞いたら、「逃げないから」と約束して、見送りに行かせてもらったのだという。

私達の周りには、ピストルを下げた八路の護衛が付いていた。みんながいぶかしそうに見ていた。コンクリートの照り返しが暑かった。

私の家族は貨物倉庫のひさしの下に立って直射日光を避けながら、なかなか発車しそうにない暑そうな汽車の窓から顔を出して、うれしそうに手を振っている見も知らない人たちに、

「さようなら……、さようなら」と、手を振った。

私は、父や母のころのなかを考えてみることを知らなかった。知らない人たちばかりで、つまらなくて暑かった。早く省政府に帰りたいかった。省政府の二階

の部屋が、もう、「私のうち」になっていた。
いた。

その日から数年後まで、私達はほとんど日本人に出会わなかった。

安東在住の日本人の引き揚げが終了すると同時に、私たちは今度は市場に一軒家を与えられてそこへ移された。それはその家のひとたちが引き揚げたばかりの家で、家財道具やお雛さままで残っていたばかりか、おまけに犬までいるという「居抜き」の状態であった。

ところが、そこに移って半月と経たないうちに、またもや突如迎えが来たのである。

戦火に追われて

いつもの夕方のように、母が夕食の支度をしている最中だった。訳も分からず伝令にせかされて七輪の火を消したただけで、作りかけのおかずも何もかもほったらかして、取りあえず必要な物だけをジュープに積み込み、出ていくという慌ただ

しさであった。母は今度こそ逃げ帰ってくるつもりであったから、柳行李に押し込んだのは、なんと、かさばるカヤだとか、アイスクリームを作る桶など、わざと要らないものばかりであった。

今度も行った先はやはり省政府であった。三階建ての建物の前は馬車や人でごったがえしていた。私達は兵隊の後についてそのあいだを通り抜け、中央の広い階段を上って行った。右に折れて、廊下の一番手前のあの部屋だった。

陽もとくに沈んだのに部屋には電気もなく、表に面した三つの窓が、壁を切り抜いたようにぽっかりと薄明るかった。兵隊と入れ代わりにすぐ父が入って来て、母に、

「あんたたち、どうして来たんだ！」と、いつもの父に似合わず激しい口調でいったので、わたしたちはびっくりしてしま

った。
「そんなこと言ったって、うむをいわさず連れて来られたんですよ。わたしはて

っきり父ちゃんが迎えをよこしたんだと思っただけだから……」

父は、途中で八路军軍から逃げようと思っていたから、朝家を出るとき、往診カバンと釣り竿だけを持って出て来たのだと言った。そんなこと私は知らないもの……、と母は不服そうにいい、なおぶつぶついていたが、それっきり黙ってしまった。父は、足手まといになる家族に付いて来られては困る、と思っただけで、来てしまったんだからしょうがない、といった。

私達はこどもだから、また戦争が起ったということも知らなかった。

夜もだいたい更けてから、遠くからおなかに響くような、ドーン……ドーンという爆発音が二、三度続けて聞こえてきた。外のがやが騒ぐ声がひととき高くなり、窓にのぼって来た。立ち上がって外を見たら、遙か西のほうがホワーンホワーンと明るくなるのが見えた。下を覗くと、みんなもその方角を見て大声で騒いでい

る。だいぶ遠くのほうだが、ここは高台だから目の高さに見えた。荷馬車のわきに青い光のカーバイトランプを下げ、大きな木箱を数人がかりで抱えて運び出したりしているが、男や女の八路の人たちが出たり入ったり動きが急に忙しくなったように思った。

(今のはいいんだらう)

振り返ったら、母は髪をひつつめにして割烹着をして、家を出たときのままの格好で、眠っている小さい妹を横抱きにして黙って椅子に座っていた。

すぐに父がカーバイトのランプをかかげて上がってきて、私に戦争が始まったから安東から逃げるんだよ、と教えてくれて、母になにか話すとまた出て行った。すべての準備ができたのか、父と侯さんがやっと連れに来てくれた。

侯さんは二十二、三歳、活発な美男子の青年で、父の通訳兼護衛だ。長身細身。草色の八路の軍服のベルトに拳銃下げてかっこいい。前にここへ来たときから私

達は何かというと、「ね、ね、侯さん、来て来て……」などといって侯さんを引っ張りまわし、通訳兼遊び相手にしていた。日本語はとても流暢に話し、上手な冗談も言えるから、中国人だということも意識しなかったぐらいだ。

車寄せから広い庭にかけて並んだ荷馬車は七、八台。全部がホロのない荷馬車で、山と積んだ荷物の上に人が乗っていた。うちの家族用に一台あった。

張さんもいた。炊事の張さんは、六十三、四歳ぐらいの小柄なおじいさんである。この人も、侯さん同様ここへ軟禁されたとき、わたしたちの遊び相手でもあり、ご飯の世話をしてくれていた人であった。すぐふざける元気なひとで日本語はぜんぜん分からないのだから、おあいこであった。

張さんの、日に焼けて深い皺が刻まれた顔に、いつも笑っているようなちいさな目がつき、十センチぐらいのしょぼしよぼで油っ気のない髭がはえている。そ

の張さんもわたしたちと一緒に行くということを知って、どんなにこころ強く思っている、嬉しかったかしれない。なにしろ、出発のときでさえ父や侯さんに聞いても、私達がこれからどこに行くのか分からなかったのだから……。

また、どこかで大砲の音がした。今度は、さっきより近かった。

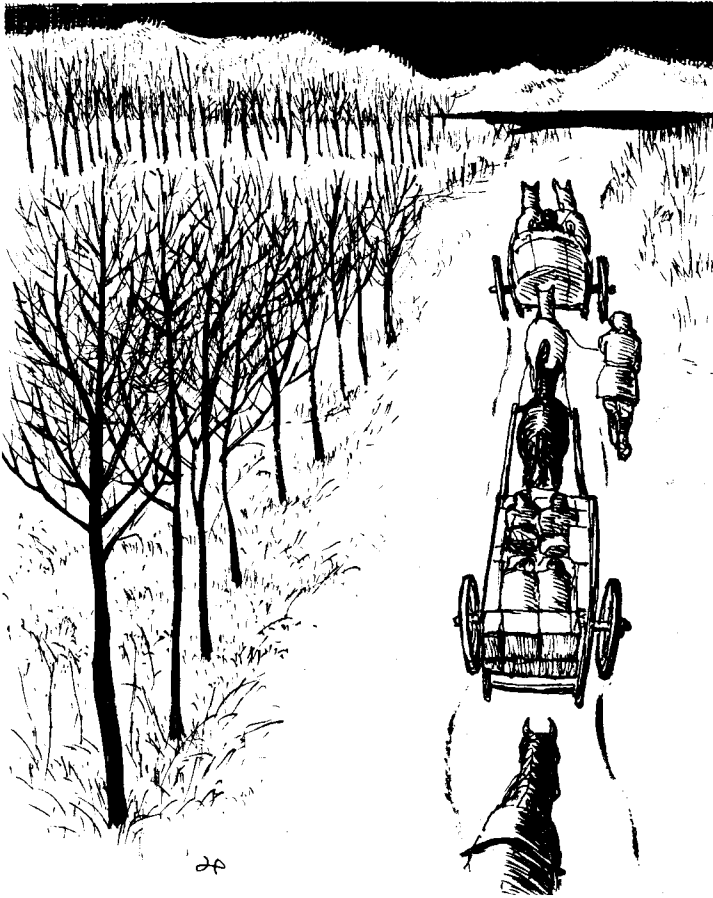
私達は、このときの爆発は国民党軍の砲撃だとはかり思っていたが、のちに幾つかの文献や証言によって、八路軍が安東から撤退の際に、自ら重要な施設を爆破したのだということを知った。

馬車にきっちり敷きつめた木箱の中は、父の仕事道具であるふ卵器や顕微鏡などの大切なガラス器具が詰めてある。その上にコウリャンで編んだアンペラが敷いてあり、薄い布団も敷いてあった。父は、私と妹を一人ずつぐるぐるとコケシみたい毛布にくるみ、並べて寝かせてくれた。

母は割烹着の上に八路軍のごつい綿入

れの外套を借りてはおり、小さい妹を抱いて馬のお尻と背中あわせに父と並んで、わたしたちの枕もとに座った。寝たまま

で首を反らせば三人が見えた。枕は自分の着るものが入っている風呂敷包みであった。



父は体格の良い三十六歳、母三十五歳、わたし長女で十一歳、まだあかい髪の毛がぼやぼやの二歳の生子ちゃんと男の子みたいに元気なのちゃん五歳、これが放浪の旅に出たときの私の家族であった。

馬車をねぐらに

一九四六年十月二十五日の真夜中に安東を出発した。

うちの家族五人を含む、総勢二十五、六名の部隊であった。

わたしは興奮して歯の根も合わないほどガタガタ震えているくせに、妹に小さな声で「おもしろいね」を馬鹿みたいに連発しながら、馬車に揺られて山を下りた。

中国の東北地方のこの時期はほとんど雨が降らない。乾いた道のでこぼこが、木箱を通して直接ゴトゴト身体に伝わってきて、車輪がわだちの跡にはまりこむたびに、頭が右に左にぐらぐら揺れた。

町の外れにある元宝山からわずか離れ

ただで、すぐに安東の町の家並みが途切れた。あたりが闇につつまれていくと、今度は満天の星が輝きはじめた。

私はその夜の、月のない、広くて深い星空を忘れることができない。あれが宇宙であった。遮るものがない、まるい夜空に絶え間なく星が飛び交い、絶え間なく星が降ってきた。雪たちはとてもおしやべりで、ささやきあったり絶えずピカピカして賑やかだった。

見上げなくても目の前は揺れるブラネタリウム。星の粒つぶを集めて天の川が私の足の先へ流れてゆき、顔を動かさなければ終わりまで見られないほど、星は長い尾を引いて落ちてきた。

夜が更けるにつれてだんだん寒くなり、糞虫のように毛布に首をすくめたまま、のんちゃんとお互いにどっちからともなくくっつきあって、車の揺れに身をまかせて星を見ているうちに、目が回って眠ってしまった。

翌朝目が覚めたら、柔らかにたちこめ

た朝もやの中にいた。びっくりして飛び起きてあたりを見回し、やっと、きのう馬車に乗って出発したんだ、ということを感じ出した。

私達の馬車隊は小さな村のはずれの野原に泊まっていた。張さんや八路のひとたちが、火を起こし、食事の用意をしていた。そこから良いにおいが漂って来て目が覚めたのだと気がついた。

私達の生活はまるでカタツムリであつた。

二頭の馬を縦につないで引かせる大型の荷馬車に、コの字に木箱を配置して、その中でわたしたちは寝起きしていた。木箱が風をさえぎり、普段はなかなか陽あたりがよく、山道を、景色を眺めながらぼこぼこ行くのは、居眠りするぐらい気持ちよかったものだ。しかし、いつもそんなにのんびりと良い日ばかりであつたわけではない。

大雨もあつたし、今夜は暖かい、などと喜んでいると、朝起きてみたら布団の

上に雪が積もっていたりした。

わたしや父は、ひどいでこぼこ道を馬車に乗って振り回されて行くよりも、お天気の日には道草しながら歩いて行くのが好きだった。

馬車が転覆する

寛甸というところを発って三日目の昼ごろのことであつた。

何日か前に大雨が降ってからはお天気続きであつた。低い山を越えて平野が見渡せる道に出ると、五、六キロ先に低い山がうねうねと連なり、その山裾にそって河が流れているのが見晴らせた。

ゴロゴロした石があるその河は、山を離れて畑をつつきり、崖の下にもぐるように入ってまた山に戻って、というように緩やかに蛇行していた。

そのときわたしたちの馬車隊は、浅瀬を捜して河に添って進んでいた。右は広々とした畑であつた。充分熟させたトウモロコシの実の収穫はとくに終わり、

屋根をふいたり垣根を作るコウリヤンの茎も切り倒され、それらの、薪用の根っこもすっかり掘り起こされて、茶色の畑がどこまでも続いていた。

まるでカレー粉で覆われたように素っ気ない景色。山も、みどりというものは松さえもなく、遠くに見える山や村までが茶色の低い姿勢になって大地にひれ伏し、冬將軍の到来を待ち構えていた。動いているものは私達だけであつた。

母はいつものように小さい妹を抱いて木箱に寄りかかり、馬車に揺られていたが、私と父は妹を中に、三人で手をつないでその後を歩いていた。うしろの馬車の馬も、上下に首を振ってポコポコと私達と丁度良い速さで歩いていた。

お天気が良いからみんな歩いていたいし、車夫も肩に鞭を掛け、着古した綿入れのあぶらで光った袖口に交互に手を突っ込んで、のどかに歩いていた。

崖から見下ろすと、先日的大雨で増水したのか、かなり深い恐ろし気な淵もある

り、流れが岸辺の木の根の土を半分洗い流してしまっているところもあった。ずっと下流のほうの、流れが広くなり浅瀬になってるところを捜して、馬車隊は縦列になって河に沿ってくだって行った。

河が左にくねっているところに出たとき、五百メートルぐらい先を先頭の馬車が浅瀬を渡っているのが見えた。河床の石がところどころ流れから顔を出し、石をよけて通る水が冷たそうにきらめいた。

（あれなら歩いて渡れそうだ。もしかしたら小さい魚がいるかもしれない）

「のんちゃん、早くいこう」

私は妹の手を引っ張って馬車の左側をすり抜け、急な坂を駆け下りた……。

突然、

ガラガラガラ……ダダダッ……、という激しく車輪の回る物凄いい音に続いて、ドドドドンというような地響きが起った。

驚いて振り向いたら、前の馬の鼻づらがそこにあった。慌ててよけようとして、

妹と手をつないだままつんのめって転んでしまった。這うようにして河っぶちに逃れ、起き上がりながら後ろを振り返ったら、もうもうと湧き起こった土煙の中で、私達の馬車が坂の途中で車輪を浮かして左に傾き、前の馬が右往左往して脚ぶみしている。その後ろの馬が右肩を下にしてもんどりうって転び、完全に仰向けになって四つの脚が宙を掻いているのが見えた。同時に幾つか小さな荷物がほり出されて宙に浮き、河に落ちて行った。

一瞬の出来事で咄嗟には何が起ったのか分からず、妹と抱き合ったまま枯れ草のなかに立ち、膝から血が流れているのも気づかずに、ただ呆然として見ていた。

馬車は持ち直したけど、馬が倒れているので坂の途中に逆立ちしたようになっただまだ。ゆったり繋がれていた前の馬は、驚いて右往左往しながらしきりに足踏みしているが、どうしてそんなことに

なるのか、後ろの馬は車体の太い棒のあいだにがちり繋がれたまま、右を下に横倒しになっているのだ。

手綱を持ったまま引きずられていた車夫は、やにわに鞭をふるって口汚く罵りながら、気違いのように馬をぶちだした馬の倒れかたのすさまじさと、その容赦ない激しい鞭の音と罵り声に、私達は声もなく、その場にただ立ち竦んでいた。

父は、目から涙を流して悲し気に横たわっている馬の背中のように回ると、引き棒の下にしゃがんで、馬の肩やお尻を何か言いながら手でさすりはじめた。

そのころには、先を歩いていた人達も騒ぎを聞き、駆けつけてきた。そうしていて十分ばかり経っただろうか……。

馬は前脚で何度か宙を掻き、不器用な後ろ脚もピクピク動かしただかと思うと、意を決したように前脚でガバツと起き上がり、大きなお尻をくるりと器用に回転させて立ち上がったのである。立ち上がったときにはもう何もなかったように、

車の引き棒のあいだにしっかりと繋がれておさまっていた。馬が立ち上がったと同時に、坂の途中にひっかかったようになって止まっていた車も動き出し、馬と一緒に平坦なところに行つて止まった。

わたしは、動かない馬を見て、死んでしまった……もう駄目だ……と思つていたので、バンザイと叫びたいくらいであった。見ていたみんなは口ぐちに、良かったといっているらしく、父も嬉しそうにいとおいそうに馬の身体を叩いており、車夫はすっかりおとなしくなつていた。

そのときになってやっと、母と小さい妹のことを思い出した始末であった。妹もわたしと同じであつたらしく、わたしたちは思わず顔を見合わせ、目の前を通り過ぎた馬車の後ろを慌てて追いかけて行つた。

あつ、と思つた瞬間、母は眠っていた生子ちゃんをしっかり抱きしめたから、荷物のように河にほうり出されずに済ん

だという。幸い木箱はしっかりと固定してあつたので、怪我もしなかった。

ハメートルぐらいの崖から河に落ちた荷物は、わたしたちの風呂敷包みがほとんどだった。それらは先頭の人達のいた浅瀬に流れて行つて石に引っ掛かり、全部拾つてもらうことができた。

あとになって「あれはどこにしまったかしら……」とか、「どこにいっちゃったのかなあ……」なんていつていた物は、あのとき、水の底に沈んだ物もあったのかもしれない、と思つた。

その日の夜は白菜地というところに泊まり、ほかほかの白いご飯を食べさせてもらつて、暖かい坑（オンドル）で眠つた。本当に天国があるとすれば、あんなものだろうと思う。

私達家族の放浪の旅は、まだ序の口であつた。

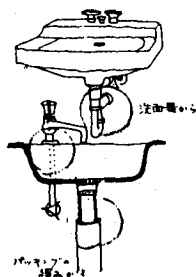
（え・早乙女光子）

住まいの収納100章

渡辺武信・林田 研共著

B5判 224頁 ¥1,500(〒250)

本当に住みやすい家は、いつも散らかっていて、しかもその散らかり方が美しい家だ——と著者は考える。本書は、散らかしやすく片付けやすい住まいの収納のコツとアイデアを、イラストを多く使ってわかりやすく解説している。



だれにでもできる 住まいの診断100章

中村幸安著

B6判 234頁 ¥1,500(〒250)

一家に一冊常備したい住まいの「家庭予防医学書」。こんな構造で、こういう症状が現われれば、こういう手当が必要——という、最小限知っておくべき住まいの診断法について、実例とイラストを使ってわかりやすく解説している。

● 住む人の側からまとめた住まいの本……

住まいにオヤジの居場所をつくる100章

棚沢成明著 B6判二三四頁 一、四〇〇円(〒250)

住まいを長持ちさせる100章

棚沢成明著 B6判二三四頁 一、四〇〇円(〒250)

住まいづくり・男の注文100章

棚沢成明著 B6判二三四頁 一、四〇〇円(〒250)

住まいの建て方と選び方100章

——失敗しないためのチェックポイント

中村幸安著 B6判二三四頁 一、五〇〇円(〒250)

マンションを長持ちさせる100章

棚沢成明著 B6判二三四頁 一、二〇〇円(〒250)

マンションをよみがえらせる100章

棚沢成明著 B6判二三四頁 一、二〇〇円(〒250)

マンションライフを快適にする実例100章

中村幸安著 B6判二三四頁 一、六〇〇円(〒250)

マンションの買い方と売り方100章

中村幸安著 B6判二三四頁 一、四〇〇円(〒250)



投稿ホットライン——情に棹させば流される

マン・ウォッチング

ベーさんに片思い

自分の顔に責任を持って泣かせる男の物語

京都市西京区 中川 敏子（26歳）

スカートをはいた サラリーマン？

東京都足立区 岩田 厚子

九月から働きはじめました。夫との家事分担のこと、会社での人間関係、帰宅時のスーパーでの買い物など、共働きの女性の話題にも十分参加できそうです。でも、今日はもっと珍しいことを通勤時に見つけたのでご報告します。

朝八時地下鉄日比谷線の秋葉原と小伝

馬町の間乗る男性のことです。頭が少しうすく、小柄で丸っこい体型のこの人は、なんとスカートをはいているのです。赤のスタジャンに紺のキュロットに赤のスニーカーが今日の姿です。毎日決まった電車に乗って通勤しているこの人を、変質者とか異常とかかたづけたくないほど、まじめに通勤しているのです。

一時期、〇〇おじさんというのが流行ったけれど、このおじさんは、まじめで、スカートも似合うのです。ただ正直言つて、隣にはなんとなく来て欲しくない気もしています。

働くこと、社会のいろいろな断面が見えるというけれど、本当にそのとおりだと思いません。

一九八六年、夏。我が家の生活をささえるため、子供を預けて下着屋へ出荷準備のパートに始めた。

毎日、ブラジャーやパンツの枚数を数えるのに必死で少々疲れぎみ、その上単純な仕事に情熱も持てないでいた。そんな日々のなかで私は彼に出会ったのである。

ちょうど電車の改札口を出た所の大きな柱にもたれかかり、うずくまるようにして彼は毎朝新聞を読んでいた。行きかう人の波の中で、そこだけ時間が止まってしまったようでもある。「ああ、けさ

もいるな」私は彼のいるのを確かめて毎朝仕事場へ急ぐのだ。

彼は一体何者なんだろう、土木作業員か、ただの風太郎か。私は彼のことを知りたいと思ったが、声をかける勇氣はない。ある日、朝寝坊して一本遅い電車に乗り、改札口を出ると、もうそこに彼の姿はなかった。「どこへ行ったんだろう」不安とも安堵とも区別のつかない気持ちで体を横切ったが、私も急いでいて立ち止まることはできなかった。小走りに彼の場所を過ぎて階段を駆け上がるようにしたとき、おどろいて一瞬、私の体は動きを失った。

いっぱい荷物を積んだベビーカーをゆっくり引いている猫背の彼がそこにいたのだ。彼は改札口の柱にうずくまって新聞を読んでいるときよりずっと老けて見えた。動きも緩慢である。彼は階段を上がりきると、ベビーカーを押してどこかへ消えていった。

その日から私は彼を「ペーさん」と呼ぶことにした。やっぱりペーさんは風太郎だったみたいで、その後、ゴミ箱を覗き込んでいる彼を通りで見かけた。

風太郎のペーさんは、家財道具全てベビーカーに積み込んで、毎日、その日暮らしを楽しんでいるように見える。誰に

干渉されるでもなく毎朝新聞を読み、お腹がすけば、食べ物を探しに町へ出る。そんな彼をさげすむ気持ちは、私にはない。むしろうらやましいと思う。毎日お金のために、自分の大切な時間を切り売りしている私に比べれば……。ときどき何もかも捨てて彼みたいに生きてみたいなあ、と思うけれど、まだまだ私は若すぎて、そこまで世捨て人にはなりきれない。

いつか、あったかい焼き芋でもほうばりながら、ペーさんと人生を語れたら、私の迷いもふっ切れるかもしれない。

自然食通信

31号

特集 水

毎日なにげなく口に入っている水。お茶やコーヒーはもちろんのこと、牛乳も野菜も魚も大量の水を含んでいます。酒や豆腐に限らずおいしい食べものの影にはおいしい水があります。今、水は暮しの中でどんなふうにくめくり、私たちはどんな水を使っているのでしょうか。

年間直接購読料三九〇〇円（送料込）

隔月刊
定価五五〇円（千一〇〇円）

改訂保存版 手引 百姓になるための

定価二二〇〇円（千二五〇円）

からだまるごと自然のなかに解き放ち、自分の流のくらし創りたい。一足先に「農の営み」の中にその答えを見つけた今百姓99人があなたの疑問に答え、道案内をします。

ご注文の際は発売元・新泉社で
東京都文京区本郷2-6-10
☎03(816)3857 振替・東京5-78026
自然食通信社

投稿ホットライン——あちらを立てればこちらが立たず

対話のページ

二〇三号の市川千歌子さん

「むかつき言葉駆逐法」について

滋賀県 匿名

二〇三号の市川千歌子さんの「むかつき言葉駆逐法」痛快でした。市川さんは頭がいいとつくづく感じしました。まず「むかつき言葉」の迫力に負けないで、冷静に観察、分析する。次に作戦をたてて最も効果的なタイミングを狙って、自分自身がその言葉をマスターした上で（なかなかマスターできるものではありません）、相手と同じ「武器」で攻撃する。なかなか「素人さん」にはできる芸ではございませんよ。

さて何をかくそうこの私めも言葉に関して

は「セミプロ」を自認したい人間ですが、

「敵」がワルい、息子ではなく夫なのです。

最近（八六年十二月）フライデーに殴り込みをかけて俄然注目を浴びた「たけし」。夫は我が家の「たけし」なんです。「テーマ、

コノヤロウ、ブッコロスゾ」という物騒なセ

リフが夫の口から吐き出されると、たけし以上の迫力があります。

「他人のふり見て我がふりは直さず、他人をボロクソにけなす」ことを習性としていた

夫は、私がジョークで使った形容詞「ヤバイ」はヤクザ用語だからと使用を厳禁するくせに、

自分の使う言葉はヤクザ用語のオンパレード。主語は「アイツ・コイツ・ソイツ」のいずれ

かで始まり、人に関する名詞は「ヤツ」か「ヤロウ」のどちらか、最後はほとんど「しやが

る」で終わります。

したがって「わくわく動物ランド」を子供達と和気あいあいで見ている、関口宏がアフリカの〇〇族のチンパンジー監視員の男性を、敬語を使って彼の働きを感謝しつつほめるのを聞いて、夫自身が関口氏をほめるセリフがこうなります。「コイツ、なかなか偏見の少ない、レベルが低くないヤロウだ」。八歳の息子が耳ざとく「あっ、お父さんがまたコイツって言った」と批判しますが、夫はまったく馬耳東風。



こういう難物を相手にときに真剣勝負を挑まざるをえないのは、私のようなドシロウトにはものすごい負担です。

それでも最近、もう数か月前になるでしょうが、ささいなことが原因で（朝の七時前から、やれ部屋が片づいてないだのなんだのしようにもないことで、例のヤクザ用語でどなりまくられた）、さしもの私も怒り心頭に発し（私は市川氏のご令息とは逆の意味で朝に弱い——つまり忍耐力が朝は最弱）、それまでの恨みつらみもたまっていたので、それが起爆力となって、完全ヒステリー状態に突入しました。

自分でも興奮の絶頂にあるのもう何をどう言っているのかわからない。ただひと言覚えていたのは「おまゑなんか——中略——わからないんだ。」という完全男言葉の使用です。これまでジョークではしゃっ中男言葉を使っていたが、怒りをこめてまじに使ったのは、私の記憶する限りではこれが初めてでした。

もちろん敵も私が鬼気迫る形相で迫ったと

て簡単にひるむタマではない。二、三分くらいはすさまじい言葉のぶつけ合いと暴力（ケガをするほどではなかったが）が続いたように思います。とうとう最後は「わかった、オレが言い過ぎた」と敵が折れて、一応一件落着となったような気がしますが、後がいけない。火事場で馬鹿力を出したようなもので、もう底無しの自己嫌悪とうつ状態に落ちこんでしまいました。



幸い、私は夫に比べれば心優しい子供達と愉快な友人に恵まれているので、なんとか一週間くらいで危機を脱することができましたが、そういう歯どめがなかったら何をしたらとやら、自分でも自信がありません。

しかし、あのど迫力はさすがの夫にも少しはこたえたようで、以降数か月は以前よりは彼の状態はだいぶましです。ただ市川家の場合と違って、中年男に何十年もの長期にわたってしみついたむかつき言葉は、一朝一夕でなくなるものではさらさらなく、これから私の「苦闘」はときどき大爆発を起こしながら続いていくのでしょう。彼が年とともに少しは丸くなるか、私が年とともにエネルギーを失うか（もうあんなエネルギーは二度と出てこないように思う）、いずれにせよしんどいことではあります。

市川センセイ、夫のむかつき言葉を駆逐するにはどうすればよろしいのでしょうか。私が消耗しつくさなくてすむ良い方法をなんとかその明晰な頭脳で考え出して、ご教授下さいませ。

もっと多くの声を聞きたい

東京都足立区 伊藤真砂子 (48歳)



はやはやの会員が、「わいふ」の内容に注文をつけるのはおかしいかもしれません……。

「わいふ」の投稿が大変増えてきたということとは、自分を主張する場を持たない私のような女が多いのではないかと思うのです。

「わいふ」を読み始めて少し物足りなく感じたのは、掲載文が会員の割に少ないということ

とです。「わいふ」を手にする前に、もっともっと多くの人の本音が聞けるものと、楽しみにしておりました。ところが定期購読者三千五百人のうち、一割の人が投稿しているとしても、その五分の二、六分の一しか掲載されていないのです。

いろいろな事情はあることでしょう。でも、読者は多くの声を望んでいるのではないでしょう。投稿した人は、採用されることを期待しているのが本音です。

できることなら、「わいふ」の別冊のようなものを年一回くらい出していただき、その中で長編ものを扱っていただければ、と思うのです。

「山の彼方の空遠く」「私の昭和史」「教師とケンカする法」などは、作品として素晴らしいものですが、そのために多くの投稿者を落胆させている結果になっていないでしょうか。せめて、あと二十人ぐらいの声が聞けたらと思うのですが……。

(え・田井亮子)

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 事↓こと 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで etc

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変(わ)る↓変わる 浮(か)ぶ↓浮かぶ 話(し)合う↓話し合う 気持ち(ち)↓気持ち 行(な)う↓行なう 表(わ)す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお願い致します。

全島民と観光客に、避難命令が出た。私は懐中電灯をつかんで外に出ると、倉庫前のチェーンをはずし、トラックが入れるよう、鉄のポールをおろした。緊張感で、からだがビリビリしてくる。倉庫前を照らすライトをつけ、シャッターのスイッチを入れる。高さ四メートル近いシャッターが、ガーンという音がら上がっていく。三年前、三宅島の噴火の際に物資を搬出したのを思い出す。

九時すぎ、大型トラック二台が到着した。グレーの災害対策服を着た都の職員が、毛布、乾パン、ゴザ、カーペットをトラックにどんどん積み込む。積み終わったトラックに、「災害物資輸送車」の横断幕がつけられる。十時半ごろ、「またとりに来ます」と言い残して、第一便が避難所に向けて出発した。

部屋に戻ってまたテレビをつける。外輪山からあふれ出した溶岩は、真っ赤なアメーバのように元町方面へ流れていく。午後十一時、ついに全島民に避難命令が

出た。約一万人が船で島を離れるのだ。トラックの第二便がいつ来るかわからないので、私は服を着たまま、十二時すぎに子供たちの隣のふとんに入った。

どのくらい眠ったろうか、ガーンという音で目がさめる。あつ、シャッターの音だ。第二便が来たのだ。時計を見ると午前三時。とび起きて倉庫に向かう。空気がしんと冷たい。シャッターはすでに開かれ、十トン車の巨体が横づけされていた。

「奥さん、寝ていいですよ」

12月19日朝、芝居の港区立
スポーツセンターで、後片づけを
する。大島・元町地区の人々
(朝日新聞夕刊
86年12月19日
より)



と言われたが、やはり寝ているわけにはいかない。四時前にトラックが出ていくのを見届けて、また床に入る。幸い、子供たちはぐっすり眠っていて起きない。私はまたトロトロと眠りについた。と、ドンドンと外階段を人が上がってくる音。時計は午前六時。またまたとび起きて玄関を出る。第三便の到着だ。竹芝には続々と島民が到着しているという。これからお弁当屋さんを手配して、朝食の準備をするとのこと。都の職員たちは一睡もしていないわりには、緊張しているせい

かあまり疲れはみえない。私も眠さは感じなかった。

子供と朝食をとりながらテレビをみる。三原山は勢いを弱めたものの、まだ噴火をつづけている。一方、島の人たちは大した混乱もなく、無事避難したときいてほっとする。その日の昼間は、いちおう物資は足りたのか、トラックは来なかった。しかし、いつ電話がかかるかわからないので、私は子供たちと家の中ですごした。

夜おそく、疲れきった顔で夫が帰ってきた。きのうの朝から三十時間余り、ろくに物も食わずに不眠不休で働いてきたという。けさがた、午前二時ごろ、夫は銀座のデパートに行き、売り場の懐中電灯を全部出してもらって竹芝栈橋に向かい、避難してきた人たちを用意したバスにふり分けていたとのこと。その後、避難所と災害対策本部の間をたび回っていたという。私も大変だったが、夫はもっと大変だったのだ。



それから一週間、日に一度はトラックが来て、足りない毛布やカーペットを運び出していった。私はおちおち外出もできず、幼稚園の送り迎えも大急ぎですませた。

三十日には畜産家などの一時帰島があり、そのための毛布を船で運ぶため、また十トントラック二台がくる。しかし、駐車禁止と書いてあるにもかかわらず、倉庫前に乗用車がとめてあって、パトカーを呼ぶ騒ぎ。やっと車をどけてトラックを見送ったあと、倉庫内に目をやると物資がずい分減って風通しがよくなって

いた。

その後、三原山の噴火活動はしだにおさまり、十二月十八日の再噴火にはひやっとさせられたものの、二十二日に全面帰島は無事完了した。この一か月、避難所で不自由な暮らしをしてきた大島の人たちに、私は心からご苦労さまと申し上げたい。自然の前には、人間の力なんてひとたまりもないのはわかっているが、できることなら、私の住む倉庫のシャッターが、これからあまり開けられずにすむことを、願わずにはいられない。

(え・田井亮子)

狂育ニッポンどこ行く

—— 新人類大量異常発生中！ ——

いじめ地獄の原点

兵庫県神戸市 竹本 数子



先生が先生をいじめる

「またかー」

決して大声ではないが、鋭利な刃物で胸をつきさすような声。

「あんたッ、何か忘れてないか」

「は？」

頬骨の出た大皺の顔に、はったい粉をまぶしたようなファンデーション、舞台化粧のようなグレーのアイシャドウの女が、まだ童顔の若い女をどなりつけているのだ。

土曜日の放課後、小学校の職員室。教

師はまばら、しかし仕事をするふりをし
て聞き耳だけは立てている。

向かいあっている二人は同じ学年の教師である。

「あんた、どうするんですかッ」

「はい？」

子供のテストに○×をつけながら、顎をしゃくるはったい粉につられて目を向けた前の黒板には、同僚の家族の訃報。

「あっすみません。うっかりして気がつきませんでした」

「あんたも大人なんやから、それくらい
気イつけなあかん。黒板に色つきの字があ
ったらすぐ気がつかんとあかん。私から
言わんでも自分から言わなア。きょう
どうするんですかッ？」

口をとがらせいらいらしている。はったい粉女史はつまり「今夜の通夜、明日の葬儀に参列するのか。香料はどうするつもりか」を若い彼女に言わせようとしているのだ。

おびえ切った彼女は、おずおず、



「同じ学年の他の先生はどうされるのでしょうか」

「知りませんッ」

——少し間をおいて——

「〇〇さんは用事で行けないといってた」「私、きょうは無理ですが、明日都合がつけば参列させていただきます」

「じゃ、香料も一人で別にするということですね」

「他の先生は、どうされるのでしょうか」

「〇〇さんと××さんは、自分のほうからお願いますとちゃんと言いに来ました。こんなこと、私のほうから押しつけがましく言えません。一緒にしてほしいのなら、ちゃんと自分のほうから言ってもらわないと困ります」

「それは気がつきませんですみません。できましたらご一緒をお願いします」

お金を出す手がふるえている。

「あんたも大人なんやから、それくらいのこと心得ておかんと——」

最後まで子供達のテストの〇×をみて、

彼女の顔を一度もみなかった。

鬼だ、蛇だと恐れられ

はったい粉女史——Tさん。

年齢五十三歳、教師歴三十三年のベテラン。小柄で華奢な体つき、しかしさすが眼光鋭く、顔はいかつい。この年齢の女教師特有の母親的なやさしさは感じられない。

担任の子供達からは、鬼だ、蛇だと恐れられ、子供の口から口へと伝わって、父母まで「来年うちの子があ先生に当たったら、どうしよう」と真剣に心配をしている。

Tさんのいじめ方は特有で、担任の児童にしろ、同学年の教師にしろ、一人のターゲットを定め、集中攻撃する方法である。

昨年は自分の担任のKという男児をターゲットにしていた。しかし根性のあるK君は、登校拒否などせず、教師に反抗し続けた。それがTさんを一層いらだた

せたようである。

もちろん、腹が立つと、どの子にも、どなり、あたり散らし、ふるえ上がらせる。

同僚のターゲットは必ず女性である。同じ学年の中で、おとなしい、幸せそうな人が、生贄となる。ただし男性には絶対に意地悪をしない。若い男性には、蘭の浮くような言葉をかけ、年上の男性には低姿勢である。

今年の生贄は、教師歴四年目の二十六歳既婚のAさんとなった。毎日冒頭のような些細なことをとりあげては、どなりつけたりしつく責めたてるのである。例えば、

「明日までに理科のテストを作成せよ」という。夜なべで必死に作ったテストの原稿をもってAさんが、

「一度、みて下さいませんか」

と頼むと、ツンとして、

「いいです」（見なくていいです）

というので、そのまま印刷して配ると、

後で、

「あんなテスト、問題が一次元的で深くない。六十点七十点とる子が多くて、あれで理科の評価なんかできない。テストは普段から問題を探しておいて下さいッ」

という。新卒四年目の若い子がそんなことできるわけがない。それならなぜ教えてやらないのだろう。

こういう調子だから、Tさんにとっては、若いAさんをいじめる材料には事欠かない。

学年の打ち合わせはAさんのほうを向かず、他の人と話し合う。聞こえないことを聞いたですと、

「今言ったこと聞いてなかったの」とくる。

ところで不思議なことがある。三十人余りの同僚は、T先生のいじめぶりをみな知っている。ことに、同学年の教師など、毎日のようにえげつない現場を見たり聞いたりして、かげでは「毎日大変だ

ね」「気にするな」となぐさめる。しかし誰一人、Aさんに救いの手をさしのべないのだ。Tさんに「やめろ」という男性がいないのだ。いつも職員室にいる教頭も、Tさんがどなっている現場をみているはず。Tさんに注意しないまでも、Aさんと呼んで事情を聞いてあげることもしないのだ。子どものいじめを論じる教師達がこれでもいいのか――。Aさんが私の娘なら――。

私はある退職校長に事情をうちあげ、相談した。

「可哀想に。ここは年長女の出番です。あなたが校長に事情をうちあげ、善処をお願いしなさい。管理職の責任において、きつとよい方法を考えてくれるでしょう」

管理職とは何のための存在？

翌日、校長室のドアを叩いた。校長は、「いじめは知らなかった」

といった。しかしそのあとの言葉、

「Aさんも辛抱ということを経験させな

きやいけない。世の中は自分を甘やかしてくる人ばかりでない——」

「……」

これではまるでAさんが悪者ではないか。異常としか考えられないTさんのあり方を是とし、弱い立場のAさんに一般論をおしつけるなんて。

子供のいじめ問題にでてる議論の中に、「いじめられる側にも問題がある」というようなことをよく耳にする。しかし、これは絶対におかしい。Aさんのどこが悪いのだろう。

おりしも本校はある研究会の大会を間近にひかえていた。校長はそのほうに気をとられ、校内のいじめなどにかかわっている暇はなかったのかもしれない。(研究会より大切なことなのに)

「一度おひまのとき、話を聞いて下さい」と頼みに行ったAさんにも、

「うん」

といったのみで、

「今から話を聞こう」

という声はとうとうかからなかった。

研究会が終わったある日、本校のB教諭(男)が夜八時すぎAさん宅を訪れた。Aさんに、

「あんた、こないじめぐらいでギアアギアアいつていると、転動のとき『Aとはあのうるさい教師か……』といって、とってくれる学校がないよ。あなたの主

人も『あのうるさいA教諭の夫か』といって、これも転動がしくくなるよ」

なんのことはない、B教諭は校長の命令でAさんを脅しに来たのである。自分の配下の悩みを聞き、公平な判断をし、適切な処置をすべき校長が何ということか——。

私はもう一度校長室へいった。



「毎日、手をかえ品をかえ、赤子の手をねじるようないじめをするTさんからAさんを助けてあげて下さい。今にAさんはノイローゼになります」

「わかった。では教頭に注意させることにする。私が出ると事が大きくなる。まず教頭に注意させて、結果がダメなら私が出る」

あまり誠意の感じられない言葉だったが、うなずかざるを得なかった。そして年末のある日、教頭とTさんは話しあっていたらしい。その翌日Aさんと呼んだ教頭は、

「きのう話し合った。Tさんは非常に低姿勢であった。あまり低姿勢なので却って不安が残る」

といった。Tさんは年上の男性には絶対に腰が低いから、これは当然である。

それから一週間ばかり、Tさんはおとなしかった。教頭も気を使って校内巡視をするふりをして、AさんやTさんの教室を、たえず見まわりに来ていた。

しかし、冬休みが終わって三学期が始まると、Tさんは猛然とまき返しをはかってきた。「よくも上司にいいつけたな」といわんばかりである。

しかし私もAさんも校長室へ行かなかった。上司に絶望したのである。「他人の痛みは、三年でも辛抱する」——式の校長に何をいっても無駄だ。私とAさんは二人で自衛法を話しあった。

「できるだけそばへ近よらないこと」

ママの疲れる誕生会

千葉県 匿名

山の手のある幼稚園では、年々派手になる子供の誕生会を自粛するよう、各家庭に通知が出されたとか。何千円もする

一最低必要な話だけする。そのとき、ドナられても皮肉られても、だまって他のことを考えること」等々。

ときどきAさんの室へ行っ様子をきき、なぐさめたり、はげましたり……。そして二月、三月、Aさんはよく頑張りによく耐えた。そして待ちに待った三月二十五日、終業式。無事その学年が終わったのである。Aさんと私は肩をだきあって喜んだ。

長い長い半年だった。



プレゼントをもらい、それに見合ったおみやげを出し、ごちそうは豪華さを競い合う。女の子も男の子もドレスアップして（幼稚園の門の前で着がえさせるんですと）、さながらファッション・カタログから抜け出てきたような坊ちゃん嬢ちゃんのオンパレード。これじゃあ親もたまらない。

一方、下町の某幼稚園ではそんなめんどろなことはやらないそう。マクドナルドで、ハンバーガーにポテトにジュース、ケーキとおみやげまでついて、親子ワンセット千五百円なり。おねえさんが紙芝居やゲームの相手までやってくれるのだから、手間のかからないことこの上ない。でも、少々味気ない気もするなあ。

では、我が娘の誕生会はどうしたらよいだろう。実際のところはともかく、見た目にはお金をかけずにうまくやった、と思われるような工夫をしたい。決めた、手作りにしよう。ケーキやクッキーは何とかなるな。プレゼントやおみやげは、

できれば無しにしたい。だが、友だちの誕生会を経験ずみの娘は、自分の番を楽しみにしている。しかたがない、目をつぶろう。そこで考えたのが、家にあるキルトの布地でクリスマス・ブーツを作り、中に小さな熊のぬいぐるみを入れておみやげにしようというアイディア。これなら、そう嫌味にはならないだろう。

さて、困ったのは招待する子供たちをどうやって選ぶのかという問題。娘に、「だれを呼びたい？」ときくと、クラス全員の名前を片はしから挙げ始めた。こりゃだめだ。結局、一度でも遊びに行ったり、来てもらったりした友だちを呼ぶ、ということにした。娘をいれて六人だ。ちようどいい。

家族が寝静まった夜中、せっせとブーツ作りに精を出す。リボンやベルもつけて、これが結構かわいらしくて楽しい。ケーキとクッキーの試作も済んで、四日前には準備万端整った。

ところが、である。三日前になって、

娘が新しい友だちを二人、家へ連れてきた。うーん困った。招待の基準に照らせば当然呼ぶべきだろうなあ。いささか唐突ではあったが、声をかけることにした。急遽ブーツとぬいぐるみを追加する。

さらに前日になって、今度は娘のほうで初めての友だちの家へ遊びに行く約束をしてきてしまった。あくまで原則に忠実な私であるから、人数に加えたのは言うまでもない。そして、朝の三時までかかって、ブーツとぬいぐるみを完成させたのであった。

後日、母親の一人から尋ねられた。「どういうふうに、招待するお友だちをお決めたになったの」「一度でも遊びに行ったり来たりしたお友だちには、声をかけましたのよ。オホホホ……」娘の交友範囲はますます広がっている。来年は原則を変えなくてはならないなあ。それにして、ああ、くたびれた。

（え・万谷陽子）

投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶったまげた・頭にきた・ジーンときた

エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

野菊に想う

東京都中野区 中村 道子（34歳）

あれから二度目の十月二十日が来て、
そして去っていった。那須の野に、野菊
の花は咲いているだろうか。あの、イン
ターチェンジのコスモスは、風に揺れた
だろうか。

私をこの世に送り出してくれた父がい

て、育ててくれた父がいて、そして、心
の支えとなつて、一番苦しんでいた時期
を見守ってくれた、一番若い「父」が逝
つて二年が経つのである。

本当は、この一文は、私がつともつ
と大人になつてから書かれるべきものか

も知れない。だが、一度はキチンとした
文章にして、彼のことを記しておきたか
つた。少々カッコ悪い別れをし、そして、
彼の最期のときにも何もできなかった私
の、せめてもの哀悼の意を表して……。
彼、古賀先生は、由緒正しき（と、私

は今も誇っている。在野の児童劇団の团长先生で、私はそこで、たった三年ほどお世話になっただけである。だが、私は今でもそこを、心の故郷とし、彼を心の父と想っている――。

出会いは、私が東京の会社をさまざまな失意のうちにやめて、その劇団に入団すべく公演を観に行つたおり、帰りの駅まで送って下さったときであり、別れは劇団を去る前夜、挨拶に行つた私に、「失望したら、辛かったら、いつでも帰ってこいよ。力になるから」と言ってお下されたときである。

それまで二十数年、本当にふらふらと身も心も根無し草のように流れてきた私には、何と嬉しい言葉であつたか。ここで、この地で果てようという、悲壮な決意で入団したにもかかわらず、はからずも、まるでユダのように去るこの私にかけて下さった言葉を、私は信じていた。――なのに、余りにも呆気なく、五十二歳の若さで、夢も志も半ばで逝ってしまっ

た。だが、彼は、悔やむでも詫びるでもなく、こう言うだろう。

「いやあ、どうもどうも、ちょっと早過ぎたけど、まあね荒井君（私の旧姓）、人生なんてものはさ……」と、ボトルを前に、いつもの少々すわって来たその目で。

そう、人間が好きで、お酒が好きで。彼を、この地から去らしめたものも、そのお酒なのだ。その日、私は久々の日記にこう記した。

――爽やかな秋の日射がふりそそぐのどかな日である。なのに、古賀先生は、もう、この風景の中に立つことはないのだ。まだまだ遠くに、その存在を確かめていたかったのに。まぶしい光が矢となって全身を刺してくる。これが哀しみだ、これが人の死を哀しむということだ。

さようなら古賀先生。走って走って、走り抜けて逝ってしまった。先生は、深夜、ほろ酔い加減で横断歩道を渡るうとして、トラックにぶつかった。そして意識の戻らぬまま他界された。至極幸せな気分

で逝かれたと思うことにしよう――と。

劇団葬の日、私の後ろで、やはり退団したA君が、何も着るものがないから衣裳部屋から搜してきたんだと言って黒いオーヴァを着こんで、帽子を目深にかぶり、野外舞台で、一人チビリチビリとやっていた。「やあ、荒井さん。仕方ないねえ、本当に。また怒られちゃうかな」何が仕方ないのか、その目は泣いているのか、酔っているのか。ただ、皆無念なのだ。

そのころ、チェッカーズという若い男の子達が「星空のステージ」という歌を歌っていて、聞くとなかなか泣けた。彼もまた、星空の大ステージで、少々退屈している子供達相手におどけてみせているに違いないから。

父、若しくは恋人、古賀先生、くれぐれも安らかに。天国はいいね。いくら飲んで、もう心配ないから――。

母の存在

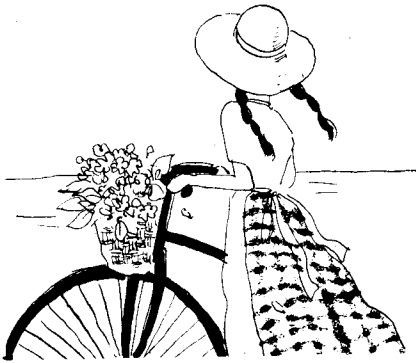
大阪府豊中市 中松ミナ子（50歳）

母は、ただ無心に眠っているかに見えるが、ときおりふっと目を開く、しかしその瞳孔は力を失って濁っている。

酸素ボンベの音だけがボニボコと四角い深夜の白い病室にこだまする。

巷では年の瀬のあわただしい日々が過ぎていく。私は心のうちのあせりをグッと押さえて、母の寝顔を見守っているしかないのだ。

十二月初めの朝、私は母の視線が、あらぬほうを見ていることに気付いた。しかも、目が覚めるとまっ先にテレビをつける母が、シーンとした暗い部屋にぼんやり座っているのを見たときは、ひそかに恐れていたことが現実となって、また発作が起ったことを認めねばならなかった。



五年前、脳溢血の発作が二度続いて以来、母は言葉を失ったままだ。それでも母は陽気な性格は変わらず、誰とでも会話を交わすことができた。耳が確かな母は、自分の言葉のみ文字で伝えることで、充分会話が可能だったから。

それなのに「おばあちゃん！ 大丈夫なの？」とたずねてもいつもは反射的に動く目の表情がうつろであった。

そして――

翌日には入院、容体は急激に悪化していった。

医師は声をひそめて「危篤です」と告げたが、七十六歳の母の心臓は驚くほど強かった。そして周りの者をオロオロあわてさせつつ危機をわずかながら脱したのである。

夜ごと母の側に付き添った低血圧の私が、睡眠不足に加えて家業の商売の多忙とも重なって、体はまるで雲の上を歩いている状態、張りつめているのは神経だけであった。

帰途のバスの中で、私は私自身に「負

けたらだめ／ がんばれ／」とカッを入れる。

そしてまた夜の八時のバスで病院へたどり着く、と酸素吸入の管をつけ、二十四時間点滴の母が、かすかに目を開き私が来たことに、わずかに喜びの表情を示す。

「気分はどう？ 体痛くない？ 足はだるくない？」と矢つぎ早に話しかけると首を小さく動かして精一杯の意志表示もする。たったそれだけのことが今の私にはなぐさめであり（よかった）とひとりつぶやく。

しかし、しきりに話しかけてもひたすら眠ったり、夢うつつの焦点の定まらない目が白い壁に向けられているときは、いくら強がっていても、私の涙はあふれてほを伝うのである。

そして私にとって母の存在が、どんなに大きいものであったかと母と娘の五十年を思い返してしまう。

母は世間のことを何ひとつ知らないま



まに父のもとへ嫁ぎ、戦争という悲劇さえなければ、平凡ながらも不自由なく人生を歩み続けられたはずである。

しかし父が戦死したあと、すさんだ戦後のくらしの中で、母と子は濁流に流される木の葉にも似て哀れであった。

母は、まだ小学生の私を唯一の信頼で

きる話し相手としていたようだ。

明日の米がなくなると、母は惜し気もなく貴金属から着物と、あらゆる物を売り払っていったが、いっこうに悲愴感がなかったことは救いであった。

いや、母は苦しみ悲しんでいたに違いない。ただ幼かった私の目に、それが見えなかっただけかも知れない。

あるとき、父方の親戚の人が「働きにも出ず身ぐるみ売り払ってバカな女……」と嘲笑しているのを耳にした幼い私は、口惜しさで悲しさでいっぱいになったことがある。

そして早く大人になって母を助けてあげなければ……と心に誓ったものだ。

私が結婚し商売も忙しく、夫のすすめで母とともに暮らしてきた三十年、母と娘は互いに分身のようなものだ。

「ああ、どうか今しばらく母の命を奪わないで下さい」私は夜明け前のバス停でまだ高い冬月を見上げて祈るのであった。

遠い日の話

栃木県宇都宮市 金井 和江

七月四日は父の祥月命日であった。昨年は三周忌ということで、集まった人数も多かったが、今年はごく内輪の集まりにした。

私たち姉妹三人とその配偶者、子ども、それに宇都宮近在に住む伯父と伯母、従兄を加えてのささやかな会であった。

父は十人兄弟の末弟であった。出席した武之助伯父は五つ上の兄、信子伯母は二つ上の姉である。十人兄弟の中で最も仲の良かった兄と姉であった。

父は伯父の腰巾着でいつも一緒に遊んでいたという。また、中学校は同じ学校、高校、大学と東京に遊学したときも伯父と同じ下宿にいたそうである。

信子伯母は年が一番近く、何かと父の面倒を見てくれた優しい姉なのであった。

父が結婚してから様々な挫折があり、酒を飲み過ぎて生活がどうにもならなくなったときなど、陰ながら助けてくれたのは伯父と伯母であつたと思う。

伯父と伯母にすれば、ずいぶん心配したり、迷惑をかけられたりした弟であつたろうと思うが、兄弟の情は厚く、親身なのであつた。

父が亡くなったとき、伯父と伯母の嘆きは深かった。

「片腕をもぎとられたようだ」と伯父は言った。

しかし、満三年を経た命日の集まりでは、際立った悲しみはそれぞれの胸の奥深く沈まり、伯父伯母の昔話に皆の関心が集まった。

伯父は器用な人で、八十歳を過ぎた今



でも竹で籠を編んだり、竹箒を作ったりするが、子どものころは魚とりや鳥をとるのが上手であつたという。

「武ちゃんはお目白とりの名人だったんですよ」と伯母が言った。私が初めて聞く話だった。

「伯父さん、目白をとってそれをどうしたんですか」と聞くと、

「なに、別にどうしようというわけではないのさ。ただ観賞用に飼っていたのよ」

という返事。

「武ちゃんが大事に飼っていた目白を源ちゃん（父のこと）が弓で射ってしまったことがあってね」

と、伯母が話し出した。

「源ちゃんがまだ小学校一年のころ、武ちゃんと喧嘩をして源ちゃんが負けたもんだから」

「なに、大した喧嘩ではなかったんだけど」

「源ちゃんが竹で作った小さい弓矢を持ってきた目白に矢を向けたんですよ」

「源ちゃんはオレの大事にしていた目白に八つ当たりしたわけだ」

「目白は小さいし、動いているし、源ちゃんだって本気で矢を当てようとしたわけではないんだけど、運悪くその矢が小鳥の目に当たってしまったんですよ」

「家中の人が皆出てきて、女たちなんか小鳥が可哀想だって泣いてしまってたね」

「そうしたらおばあさんが、竹筒の中にあったお金を全部出して、『武、これだかんべんしてやってくれ』って言ってるよ」

「そのときの源ちゃんは顔色がなかったですよ」

「小さい子どもの射った小さい矢が、小さい目白の目に当たるなんてね、ほんと

に偶然だったんでしょね」

と伯母は声を落とした。

わらぶき屋根の大きな農家の廊下に吊してあった鳥かご。

自分の放った矢が思いがけず目白に当たって茫然としたまま動けなかった父の幼い姿、悲しさに胸がつぶれそうになった伯父の姿、二人の子どもと小鳥を氣遣って出てきた大人たちの姿。——遠い昔の話なのに、その風景が映画の一場面のように私の頭に焼きつけられた。

昔話はまだまだ続き、命日の宴はささやかながら盛り上がりつつあった。

（え・堀切潤子）

月刊自治研

1987年1月号 ●
市民政治理論の検討

松下圭一・有賀弘

市民政治理論の現代的意義

杉原泰雄 人民主権と地方自治

発行・自治研中央推進委員会

東京都千代田区六番町一番地
自治研本部内

田中治男 トクヴィルとデモクラシー
白井 厚 ペン（ペイン）は剣（権威）よりも強し

山崎時彦 人間、自然、社会、政府

——ソーロウの場合

久保田文次 孫文と市民社会論

発売・八月書館

東京都文京区本郷一・10・12 カルム本郷4号
電話 03・815・0672

条件を採る①

まとめ 佐藤詔子

いったい理想的な結婚というものはあるのだろうか。男も女も大多数の人たちは、特定の異性と愛し愛されて一生を過ごしたいと、そう願いながら、結婚というかたちを選びとっていく。

昔の家と家との結婚に比べ、現在ほとんどが、自分の意志で相手を選び、結婚を決意し、幸せなスタートをきるにもかかわらず、年々離婚率が上昇していくのはなぜだろう。

1. 回答者の横顔(総計一二四名)

●年齢

二〇代……………九%(一一名)

三〇代……………五一%(六四名)

四〇代以上…………三八%(四七名)

他(男性)…………二%(二名)

●妻の職業 四六%が有職者であり、そのうちの五二%が一〇〇万円以上の収入を得ている。

●結婚年数 平均十三・九年

●夫の職業

会社員・勤務医・コンピューター技師・電機会社研究員、公務員、新聞記者、高校教員、

人それぞれにどんな状態を幸福と感じるのか異なるし、小さなアンケート用紙から、結婚生活の実態のすべてを浮き彫りにしていくことはむずかしい。しかし何とか、幸せな結婚への共通点、成功への羅針盤らしきものを見つけられないだろうか。

八四年末に実施したアンケートに対する一二四名の回答者の、紙面からあふれんばかりの思いの中から探りあてていきたい。

会社管理職、貸ビル経営、自営業、酒造業、銀行員、生協仕入部・ソフトウェアSE・建設会社・農業・不動産情報会社・自動車保険会社・国家公務員・書店勤務・医師・中華料理店・医科大助教授・中学教師・大学教員・不動産業・高校教諭・製薬会社・団体役員・会社役員・官吏・タクシー運転手・店舗設計・植木栽培・営業プロモーター・弁護士・小売店・新聞販売・エンジニア・放射線技師・地方公務員(回答に記載のまま)



● アンケート ●

結婚成功の

●妻の職業

電気工事会社社員・写真スタジオ・写植オペレーター・特許データセンターの下請け・パート（ギフトセンター）・新聞記者・夫の仕事のマネージメント・中学教員・フリー編集者
会社社員・酒造業の事務・非常勤の英会話講師
障害幼児指導員・学童保育の指導員・ピアノ教師・ベビシッター・経理事務・内職・教員・中華料理店手伝い・英語塾・私学教師・塾教師・パート事務員・和文タイブ・年金セ
ールス・駐車場管理・添削指導・農業手伝い
老人ホーム寮母・洋裁師・管理専門職・軽印刷業・タイピスト・会社役員・翻訳・地方公務員（回答に記載のまま）

2.「まあまあ成功」が過半数

Q あなたの結婚は？
大成功 まあまあ成功 可もなく不可もなし
あまり成功していない 失敗であつた

●妻の活動

洋菓子作り・全国心臓病の子供を守る会会員
・コーラス・謡いと習字・勉強会・公民館活動・生協運営委員・PTA活動・学習活動・雑文かき・科学読物研究・多摩友の会・ボランティア・生協・公民館講座・生活クラブ・画工教室・インテリアコーディネート・養生学校生・テニス・書道・心理学カウンセラーの勉強・料理教室・体操教室・サークル活動
宗教活動・消費者活動・婦人学級・女性史研究・子供会・同窓会、呉人会の世話・保育サークル・市民大学・市民運動・農業手伝い・小説の習作中・婦人懇話会活動・町会役員・家庭教育学級・老人看護・保健センター手伝い

推理小説の最後を先に読んでしまうようであるが、アンケートの最後の問をみたい。

全体の過半数を超える五五％が「まあまあ成功」と答え、「大成功」一％、「可もなく不可もなし」一八％まで加えると、何と八四％が、現在の結婚生活にはば満足している。

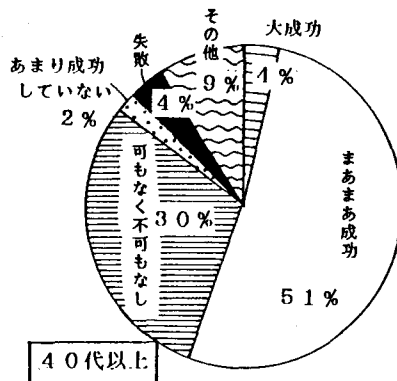
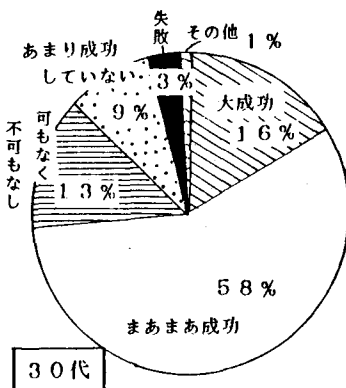
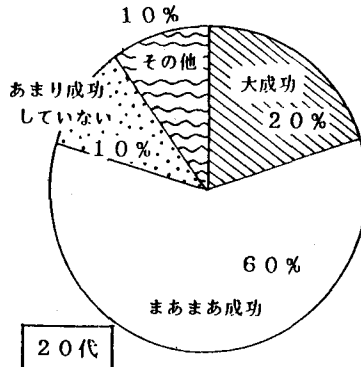
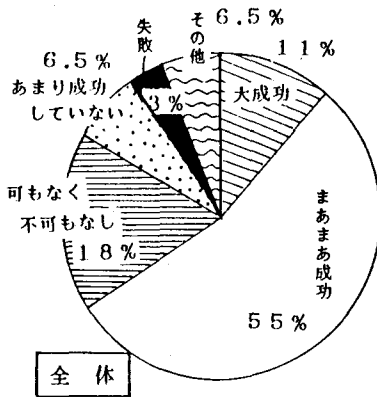
(図1) ①—最初に成功・不成功に分類したパーセンテージの人数を記しておきたい。(総数一二四名)

・大成功 — 一四名(一一%)
 ・まあまあ成功 — 六八名(五五%)
 ・可もなく不可もなし — 二二名(一八%)
 ・あまり成功していない — 八名(六・五%)
 ・失敗 — 四名(三%)
 ・その他 — 八名(六・五%)
 「その他」と答えたグループには、「該当なし」「不明」「答えようがない」と答えた人二つに○をつけた人、男性二人などが含まれる。

結婚平均年数 (表1)

	平均結婚年数
大 成 功	12年
ま あ ま あ 成 功	15年
可もなく不可もなし	18年
あまり成功していない	8年
失 敗	21年
そ の 他	13年
全 体	14年

あなたの結婚は? (図1)



■古女房になるほど下る幸福度

年代別に見てみよう。

「大成功」「まあまあ成功」とともに結婚年数が長くなるほど少なくなる。それに反し「可もなく不可もなし」が増えてきて、二〇代は〇であるのに四〇代は三〇%にまでふくれあがってくる。二〇代には完全に「失敗」した例は一件もない。

若いほど、新婚アツアツの恋愛ムードが持続しているだろうし、相手に気に入られるよう努力もする。子供もまだ小さいから、子育てに夢中で、夫に不満をいだけ時間的余裕も少ない。

年代が上がるにつれ、お互いに新鮮さも失せ、「アバタもエクボ」も不満に変わり、かといって離婚を思い立つほどではなし、出るに連れぬるま湯人生——というところであらうか。

これは、結婚年数をみてもはっきりわかる。(表一)。

「失敗」グループは結婚年数の平均が二十一年と、だんぜん長い。これは他にも「四〇代後半になると日本女性の幸福度は下がってく

る」という統計もあり、実によくうなずけるのである。

結婚して何年かたち「ああ、こんなはずではなかった」と思いつつも、努力を重ねてみたり、あきらめやごまかしで過ごしてきて、二〇数年たつと、やつとはっきり「失敗であ

3・基本データより

■夫との年齢差に「カギ」はあるか

年上の夫が圧倒的である。「同年」と「妻が上」をあわせても、全体の五分の一に満たない。「妻が上」の組合わせは全体でたったの八名(六%)であるが、失敗例がない。「一つ年上の妻は、金のわらしをはいてでも捜せ」

■約半数の人が二一〜二四歳で結婚するが：

全体の五一%が二一〜二四歳で、三六%が二五〜二九歳で結婚している。(図3)

この表で見る限り、二〇歳以前に結婚するのはたしかに危ない。早すぎる結婚だけはさけたほうがよい、ということは言えそうである。

った」と自覚するのかもしれない。

そして、悲しいかな、その予備軍が「可もなく不可もなし」「あまり成功していない」グループの中にすっかり潜んでいるような気がするのである。

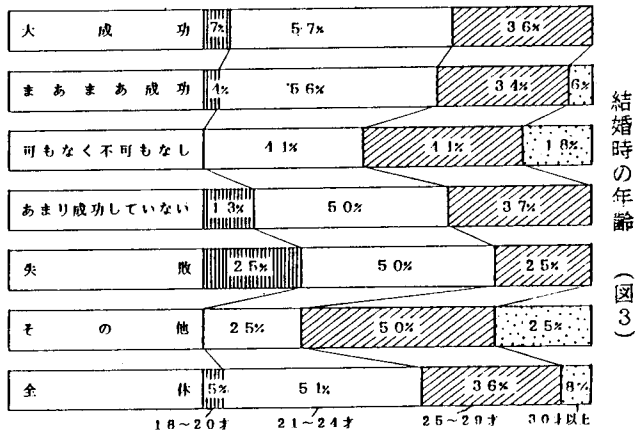
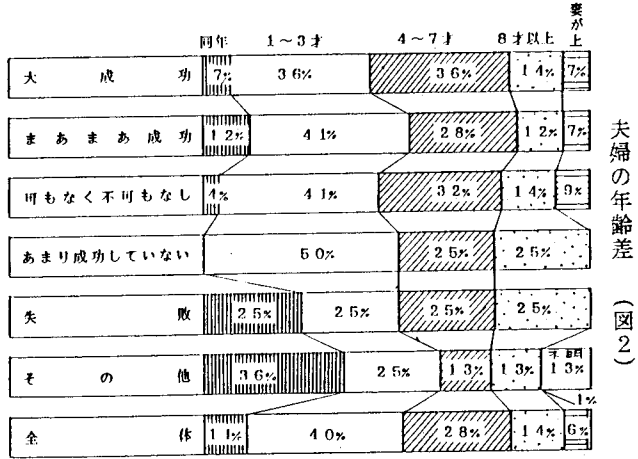
という言葉を出してしまふ。

しかし年齢差がどうであろうと、成功・不成功とは、あまり関連性がないようだ。(図2)

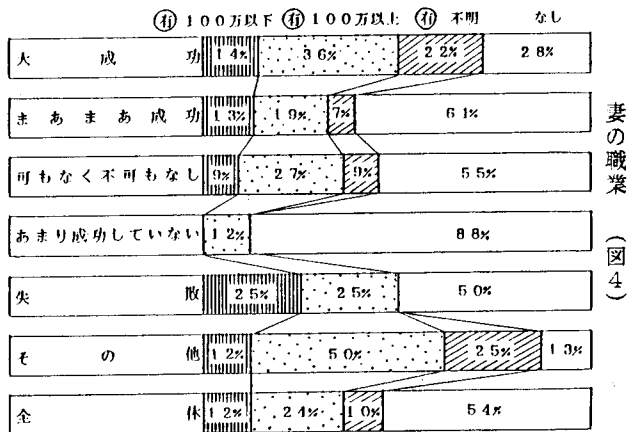
その他の年齢では、成功率と年齢の間に相関関係はみられない。結婚はいつしてもよい。二十五歳までにしないと幸福になれない、などと考えるのはナンセンスである。

妻が仕事を持っているほど成功率は高い！

「大成功」のグループのうち七二％が何らかの職業を持っている。しかも自立型の収入の高い人たちが多い。「あまり成功していない」「失敗」のグループを平均すると有職者は三一％であり、確実に少なくなってくる。(図)



4) 夫婦のコミュニケーションを豊かにするには、二人の共通体験を積み重ねていくことが必要であり、そのためには共働き、共遊びというパターンが非常に役立っているのではな



いだろうか。妻は「夫は金を稼いでくれるだけのもの」と考え、夫は「家庭は寝に帰るだけのもの」と考えていては、楽しい会話も成りたちにくい。

4・結婚時の状態

■恋愛は絶対か

Q 結婚の動機

適齢期 周囲のすすめ 恋愛 好印象

相手の熱意 性関係があったため 家

(親) から離れたかった 恋愛もしたし

そろそろ年貢の納めどきと思った 人生

の伴侶として望ましい人が見つかった

その他

「適齢期」「家から離れたかった」「そろそろ年貢の納めどきと思った」など、結婚への真摯な態度がみられない動機は、やはり失敗の確率は高くなる。

「大成功」のグループには、「適齢期」「相手の熱意」「性関係があったため」「そろそろ年貢の納めどきと思った」で結婚した人は一人もなく、「失敗」のグループの四分の三は、家から離れたくて結婚した人たちである。

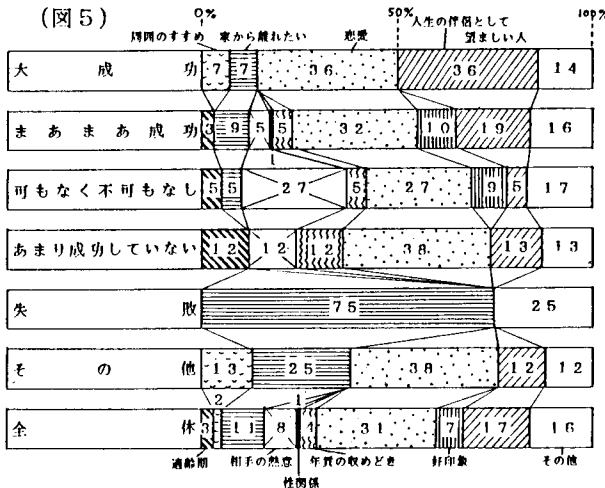
(図5)

「その他」という選択肢を選んだ人たちの記述内容を見てみよう。

大成功……この相手とずっと暮らすことが自分にとってベストだと信じた・妊娠三か月まあまあ成功……やりたいことを認めてくれた・他の男から離れたい・妊娠した・失恋後の淋しさからつきあい、子供ができた・いつもいっしょにいたかった・真面目で良識的・直感・ファザーコンプレックス・虚弱な夫には自分が必要・ハイミスなのであせった結果・価値観の一致・気のあう人と暮らしたかった・共通の貧しい学生体験はその後の生活でも理解しあえると思った・家の体面可もなく不可もなく……親を悲しませたくなかった・とにかく結婚したかった・生活不安の解消・兄の結婚で家にいれなかったあまり成功していない……境遇に同情失敗……思想の一致
その他……退職の理由として

結婚の動機

(図5)



なぜこんなにかげんな動機で結婚できるのだろうか、と首をかしげたくなる回答が目につく。そしてそれが全て失敗へと結びついてはいないところが不思議である。

全体として、トップの「恋愛」は三二%。

しかし、どのグループにも同じぐらいのパターンということは、恋愛イコ

ル成功ではないのである。「惚れました」で結婚しても、その熱き炎を持続させることはむずかしいことなのであろう。

二位の「人生の伴侶として望ましい人が見

■「とにかく」組は幸福にならない？

Q 結婚するとき どんな結婚観を持っていますか？

一人前の人間として社会に通用するための条件 女性の幸福はよい結婚をするところにある とにかくしなければならぬもの 人間の幸福はよい人生のパートナーと暮らすこと とくに考えていなかった 一人ぼっちで暮らすより とにかくそばに誰かがいたほうがよい 結婚は愛し合う男女を永遠に結びつけるものだ その他

大成功のグループの中には「とにかくしなければならぬ」とか「ともかく誰かがそばにいたほうがよい」と考えた者は一人もいない

つかった」は一七％。積極的でしかも、一番理性的に生活共同者としての相手を選びとっているこの動機が、最も成功への道に近いようである。

い。逆にこのグループで四三％もいた「人間の幸福はよい人生のパートナーと暮らすこと」は、他のグループでは確実に減っていった「あまり成功していない」グループは一二％にまで減り、「失敗」のグループはついに〇になる。(図6)

昔からの良妻賢母型を想像させる「女性の幸福はよい結婚をすることにある」と答えた人たちの数は少ないが、すべて「成功」のグループの中に入っている。

結婚をドラマチックにとらえた「愛し合う男女を永遠に結びつけるもの」も少数派で全体の六％にすぎないが、失敗はしていない。

結婚をする際、「結婚っていったい何なのだろう」などと、とくに考えることもなく、フワッと結婚してしまう一群が全体の一六％

もいることに驚きを感じる。しかも成功・不成功にかかわらずどのグループにもいる。

年代別に見ても、「とくに考えていなかった」と答えた人は、二〇代では三番目、三〇代では二番目、四〇代ではやはり三番目に多いのである。いったい何を意味しているのだろうか。(図6)

年代による結婚観の推移を見てみたい。二〇代には全くいない「一人前の人間として社会に通用するための条件」は四〇代以上になると、一三％で第三位に、「結婚は愛し合う男女を永遠に結びつける」も八・五％という数字で浮上してくる。(図7)

それに加え、四〇代以上になると、「とにかくしなければならぬもの」が一九％となり「人間の幸福はよい人生のパートナーと暮らすこと」と全く肩を並べてしまう。それらを考え合わせると、彼女たちが結婚というものを慣習としてとらえる反面、ロマンチックに夢をいだいている側面がうかがえる。

では、若い二〇代は、もっと主体的に結婚を考えているだろうか？ 残念ながらNOで

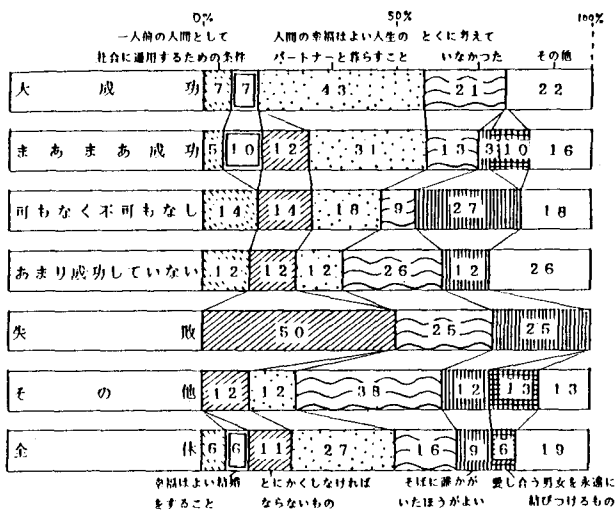
である。

「その他」と答えた三七%の人たちの内容を見ると、

・結婚は社会への順応手段

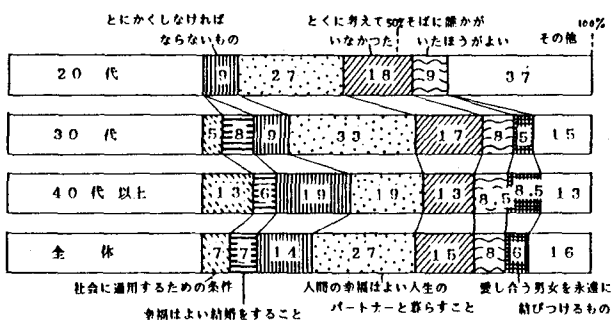
・ひとりでは生きていけない

結婚観 (図6)

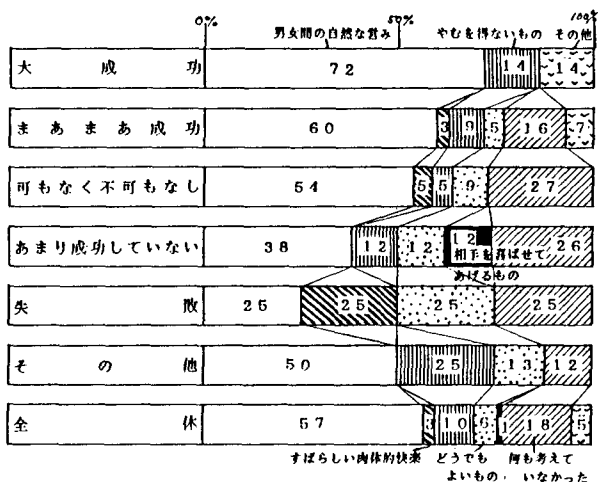


・お互いに自由で高めあいたい
 ・社会生活が楽し、みんながするから多分よいもの
 とあり、ロマンティズムからも、「女は結婚することが幸せなのだ」という固定観念か

年代別結婚観 (図7)



「性」について (図8)



らも解放されているように見えながら、実のところ根底においてはかなり自主性に乏しいことがうかがえる。こうなると、表現の仕方こそ違いますが、実体は年代によってあまり変わっていないのではないだろうか。

幸福と「性」との関係

Q 結婚するとき、性についてどう考えていましたか？

男女間の自然な営み すばらしい肉体的快楽 相手を喜ばせてあげるもの 結婚に伴うやむを得ないもの どうでもよいもの（結婚の幸福は他にある） 何も考えていなかった その他

「男女間の自然な営み」と答えた人は全体の五七％あり、「大成功」から「失敗」へと、

「目的なし」が多すぎる？

Q 結婚当時 はっきりとした人生の目的がありましたか？

何もなかった 結婚して幸せな家庭をつくるのが目的だった 自分のやりたいこと（勉学、職業など）を成功させたかった 何もないので結婚してみた その他

みごとに階段式に減ってくる。（図8）

「どうでもよいもの」と答えた人は「大成功」のグループには、もちろんいない。パーセンテージが上がるにつれ、失敗へとつながっていく。やはり「性」は幸福な結婚生活とは切り離せないものである。

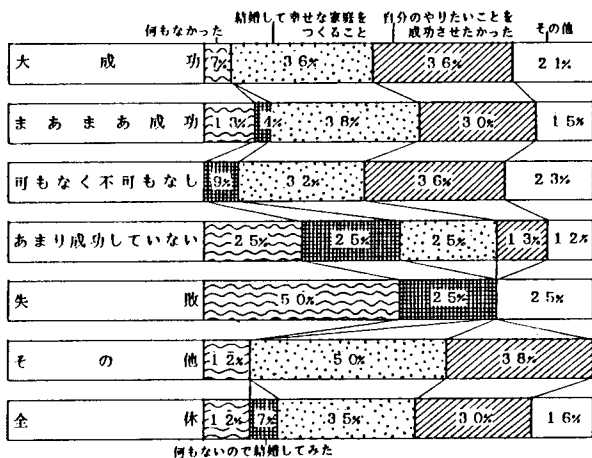
そして、ここでも目につくのは、「何も考えていなかった人たちの多いこと。全体では一八％、「可もなく不可もなく」のグループには何と二七％、約三分の一に近い数字である。

人生これから——というときに自分の人生設計を何も描いていない人たちが、やはり全体で一九％もいた。「何もなかった」と「何もないので結婚してみた」を併せると、「あまり成功していない」グループの五〇％、「失敗」グループの七五％にもなる。（図9）

結婚観を何も持たず、結婚における性の意

味あいについて考えることもなく、人生の目的も持たず、の人々の約半分が重なりあう。結婚生活にはば満足している八四％の中に、こういう人たちがばっちり入っているわけで、いったいこれをどう考えたらよいのだろう。

人生の目的 (図9)



■結婚を人生の目的と考える層が減っていく

結婚生活そのものに幸せを夢みる人たちと

自分自身のやりたいことを成就させ、自己実現を計りたいと願う人々が多数を占めて、肩を並べているが、これからはたぶん後者が多くなってくるのではないだろうか。

図10・11を見ていただきたい。

人生の目的として「結婚して幸せな家庭をつくること」と答えたグループを①とし、「自分のやりたいことを成功させたかった」と答えたグループを②とする。

若い世代ほど②が多く年代が上がるにつれ①が増えてくる。時代の流れとして、人生の目的を結婚することそのことのみにおかない、意識の変革が明らかにでている。

「妻が仕事をもっているかどうか」との関連性はどうかろう。②と答えたグループのほうが、わずかながら職業を持っている率も、仕事以外の活動をしている率も高くなっている。自分のやりたいと思うていることの中に、仕事もさまざまな活動も含まれているのであ

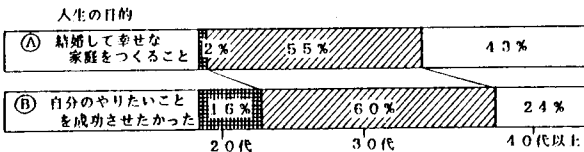
て、当然であろう。

結婚観を見ると、①のグループは「人間の幸福はよい人生のパートナーと暮らすこと」が圧倒的に多く五〇%。②のグループは全体にバラついていて、これといった特徴がない。結婚すること自体を人生の目的にしてい

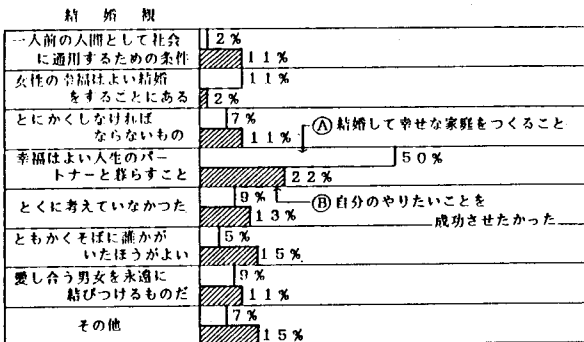
のだから、結婚観がどうであろうと、あまり関係がないということなのだろう。

「女性の幸福はよい結婚をすることにある」と「人間の幸福はよい人生のパートナーと暮らすこと」の二項目だけが、①に比べ半分以上であることも、興味深い。

↑つづく↓



人生の目的と年代 (図10)



人生の目的と結婚観 (図11)

情報センター

練馬のパーマ屋

東京都練馬区 小江 鍾子

■我が店オープン

十一年前、現在の所へ生後六か月と二歳になる娘達を連れて、引っ越してきました。この引っ越しは美容室のオープンも同時ですので、親子で体調を崩し、前途多難の出発でした。

まず感じたことは商売上ですが、今まで働いていた西武線の江古田のときより、シャンプーのお客様がほとんどいないのです。凍るように冷たい冬でも、ポタポ

タつららができそうな頭で自転車に乗ってみえるのには涙ぐましい気がしました。事情が分かってくると、皆さん住宅ローンをかかえ、育ち盛りの二、三人の子供を持ち、これも仕方がないことだと思いました。また、駅の近くにばかり住んでいた私にとって、こちらは駅まで徒歩十五分、七十歳前後の農家のお婆さんまでモンペで自転車をこいでいるのには驚きました。

高級が似合わない、庶民的で人情を感じ

じる店にしかなくてとはと、今日まで何とか、料金も十一年間そのままやっていきます。

住民の入れ変わりがあまりないので、お客様へ葉書を出しますと、江古田のときは半分ぐらいはいろんな理由で戻ってきましたが、こちらに来てからは、ほんの一、二枚だけです。そんな町では恐ろしいのはうわさです。良いうわさのときは、五、六軒の奥様が次々評判を聞いて来てくれますが、一人でも悪いうわさを流しますと、周囲の奥様が軒並みピタッ

と来なくなりませう。

お客様は、普通ぐらいのサラリーマンの奥様が大半で、少数派の大学教授、医者、弁護士等の奥様方は、気の毒なくらい焼きもちを焼かれたり、悪口を言われがちです。年を取って老人会に入っても、水と油の関係が続き、知り合いのお年よりで遠くのホスピスへ行かれた方もありました。

今はなくなりましたが、以前小学校の名簿を見ますと、保護者欄が母親の名だったり、母親の姓と子供の姓が違うのは一人くらいで、大半は標準的家庭の子供

■美容室はカウンスリングルーム？

私はお店が、お客様同士の情報交換の場になったり、悩みを話せる場になることが理想的だと思っていますので、駅の近くのようなザワザワした大型店にない良さを出したのです。

十一年間も来て下さっているお客様に、手作りのジャムや、漬物、田舎のおみや

達でした。私の娘達も住宅の中の数少ない商店の子として、ひどい先生は、家庭訪問のときに、「商人の子だから落ち付きがない」など、平気で見下すような態度を取るのです。へえー、じゃ先生の子は立派な子が多いのでしょうか？と言いたいのを我慢したことがあります。

日本中が長い間単一族だったように、ここも、古い地主さん以外は九十パーセントは住宅ローンをかかえたサラリーマンで、わずかな割合の職業の家の子供は羨ましがられるか、いじめられるか両極端のようです。

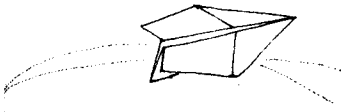
げなど、頂戴することも度々あり、母のいない私には、年輩のお客様はみんな母親のようですから教えていただくことも多い。今では地域の中にどっぶり、家族ともども馴染んでいますから、北九州の、ネオンまたたく都会の実家に帰るとかえって落ちつきません。

狭いながらも楽しい我が家であり、練馬という土地柄、未来も大して変わることなく、下水道もガスも水道もやっと通ったという愛すべきローカルムードと、他人を気にする近所とも付かず離れずで、気さくなパーマ屋さんで通そうと思っています。中学生の娘はパーマ屋さんの子と言われるのを非常に気にする年頃ですが、事実は事実で仕方ありません。

最近住宅ローンが終わって、建て直しの家が多く、北側の家と南側の家、坂の上と坂の下、日照権やら、雨水の行く先のこともめまぐるしく、となりの豆腐屋が引っ越して、ボヤク場所が少なくなり、私の店でもボヤキ、悪口続出、私の耳は洪水にあつたようになる。溢れかかると、全部聞いたことを忘れてあげます。安い料金で気分が軽くなるのなのと思う。話に夢中になり、来た目的忘れて、私がヘアースタイルのこと聞いても、「どうでもいい」という人さえいるのです。春になると憂うつ、受験生の親は誰と

誰というように覚えていないと、つい言
ってはいけない発言をしてしまう。ゴミ
出しもしたくない時期らしく、買い物も
遠くへ行くのです。住人の入れ変わりが
激しくないので、「今年はお宅、受験
ね」と言われるのは常識、よく他の子の
年齢を知っていて、就職しても「どちら
へ？」と聞かれる始末。

ロッキード事件にかかわった青木さん
というお宅の奥様は、暗くなってから買
い物へ行ったり、たいへんな思いをした
そうですが、とうとう家を売って越して
しまいました。こういう土地は、一度悪



MAKIKO

いうわさが立ったら、身を守るために引
越したほうが安全のようです。

嫁姑のこともよくよく口を堅く閉じて
いないと住めなくなる。見ざる、聞かざ
る、言わざるである。明日は我が身。そ
の点、転勤族の奥様は気楽な面もあるよ
うです。

東映撮影所が近く（歩いて七分ぐら
い）にあり、児童劇団に入っていた小林
綾子ちゃんの家も、私の家から二分の所
にある。おしんが始まった当時は小学校
の給食の時間、サインを求められて食べ
る時間がなかったと、同じクラスだった

■いろいろなことをぼやいても、やっぱり私はうがが好き

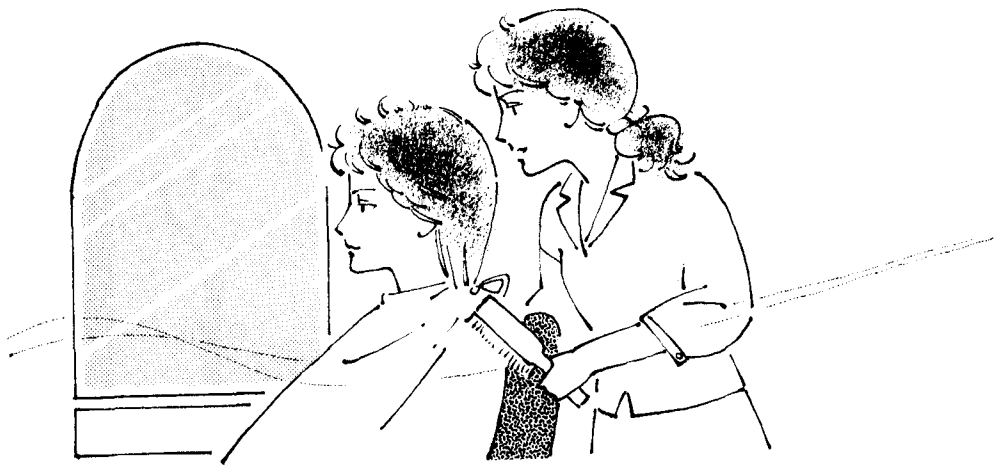
都心に比べると、ここは外国人と出会
うことが少ない。こんな話がありました。
地主さんのアパートを、外人が気に入っ
たので借りたと言ったそうですが、特
に理由もなく、外国人というだけで断わ
ったそうです。なんて心が狭いのか。だ
からこのへんは外国人もいなければ、引

上の娘は可哀そうがりました。「私は有
名人にはなりたくないわ！」などと、な
るはずもないのによく言っていました。

その当時、近所で、本人と家族をはめ
る人はまずいなかったので、すぐく私は
こわいと思ったことがある。他人が良く
なることへのひがみは、相当の数の人達
が持っているものと分かりました。私
は細々小さな店をしていて、つくづく良
かったと思った。これが店構えが立派で、
大繁盛していたら、何を言われるか分か
ったものではありません。

越してきてもなかなか仲良くなるまで
には年数がかかるのです。その点美容室
は何でも聞くのに気がおけないらしく、
まずは病院を聞かれる。電話局、米屋さ
ん、ソバ屋さん、写真屋さん、とにかく
隣に聞くよりまず美容室なのです。

近所付き合いがだんだんめんどうにな



って、一戸建からマンションへ引っ越した方の決定的な理由は、大雪が降ったときの雪かきで付き合いがまづくなる例が結構あるからだと言いました。東京の雪は問題が多い。まず私道が多い。共働きの多い。留守中に隣が雪かきをしてくれるのはいいが、近所に「あの家は雪かきをしたことがないのよ」といいふられる。聞てえたからには住めない心境もよく分かるが、これも限りがない話です。持家が大部分の中で、ほんの少しのアパート、借家の人は、必要以上に家の話をしながらない。逆に持ち家の人でも坪数にこだわったり、相手が、一見持ち家だと思った方が社宅だったり借家だったりすると、急に態度が変わったりする。バカげた話だと思います。私は大きな立派な家の中が、必ずしも平和じゃないケースをお客様を通してよく知っているだけ、幸せなのかも知れません。いろんなことをばやいても私は矢張りここが好きで、子供を育てるために選

んだ場所、店も持て、幼稚園、小学校、中学校が近くにあり、幼稚園のときは、東京の中ではめずらしく、畑に寄り道をしてたんぼや雑草をつんで帰り、家の前まできて、おしっこが間に合わず、立ったままで下の娘はよくもらしたものでした。きっと夢中で友達と雑草をつんでいたのだと思うと、可愛くなりました。練馬区の地主さんも税金のために土地を持ちきれなくて、広場が少なくなり、子供達が遊んだり、虫を取ったりできなくなりつつあるのが残念ですが、大きな工場の公害や、住宅に似合わない商店ができない限り、東京内ではまああの土地ではないかと、自分では満足しています。人間関係は世界中どこでもありますし、誠意で接していれば、他人も家族もうまくいくと私は信じています。住めば都にするのも地獄にするのも、自分次第という結論になりそうですね。

(え・小倉真樹子)

投稿ホットライン——珍獣一匹飼ってます

オットどっこい

粗大ゴミ予備軍の生態記録をとろう！

結びなおした夫との絆

香川県丸亀市 山田 幸子

夫はつい近年まで、リブ批判派の会社人間であった。彼とは、七〇年前後の学生運動の渦中で知り合ったのだが、いざ

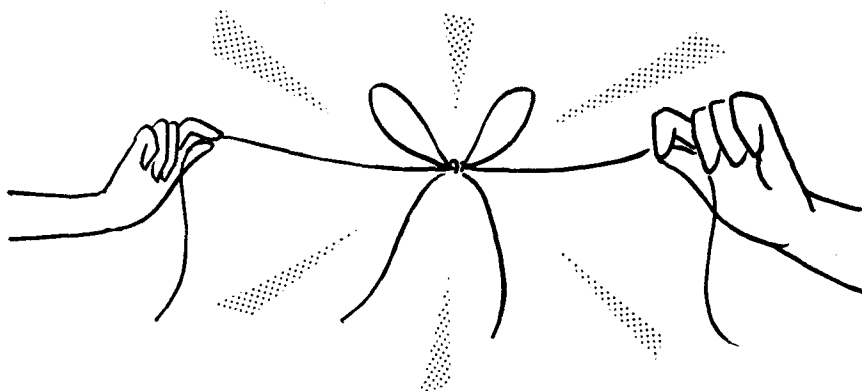
結婚してみると驚くほど保守頑迷な女性観、家庭観の持ち主だったのである。要するに、女は家庭を守って子供を育て、疲れて帰宅する夫をやさしくいたわる妻であってほしいというわけだ。

結婚して十三年近くなるが、その間、

そうした妻役割、母役割をめぐって、闘いの連続だったといっている。

そのかいあってか、ここ数年は世の平均的夫たちよりは、家事、育児に関わるようになってきていた。だがそれも、私が口うるさく言うからであり、決して心から性別役割分業を否定していたわけではない。

それがここへきて、自分の出した企画



が会社の方針と相いれず、改めて組織と個人という関係について考えさせられるという事態が起こった。ちなみに、夫が働いているところは、オーナーは別にいるが、学生時代の仲間たち数人が管理職についていて、彼らなりに既成の会社運営とは違ったビジョンをもって始めた会社である。

それまで、会社人間としての夫の働き方は家庭にさまざまなひずみをもたらし、ノイローゼ気味となった私は真剣に離婚も考えたほどだったが、そのように会社側に立って私に対処してきた夫が、今度は逆に個人の立場から会社および仲間との関係を再考するようになったのである。気心の知れた仲間たちという幻想が次第にはがれていくにつれて、会社組織というものの実体が見えてくるようになってきた。金は出すが口は出さぬというオーナーなど、そうそういるはずもなく、仲間たちの初期のビジョンも次第に資本の論理に呑み込まれ、その存在はしよせ

ん鶏飼いの鶏にすぎぬ。

そこではじめて夫は、今の企業が、個人の家庭生活をあげて協力しなければ、維持、発展しえないしくみになっていることに気づいたのである。つまり、性別役割分業の固定でなければ、働きバチはつとまらないのだ。そして、それこそが要求されているのである。

仲間の一人は、「生きるということは、ガマンすることであり、組織のためには我を折れ」と説く。それは、夫一人に要請されるものではなく、私を含めた家庭にも向けられる。

一時期、仲間たちといっしょにやっている仕事だからと自分に言いかけ、自分を抑えてきたあげく、自閉的なノイローゼ状態となった私に、それはとうてい容認しえないことばであった。そうまでして守り、大きくさせなければならぬ組織とは一体、何だろう？ 彼らは現実と折れ合っていくことを一種の成熟とみなして自らを納得させているようであるが、

だからといって、折れ合えぬ人間にそれを強要するのは、権力者の発想ではないか？

そういえば、おしんドラマのように、ガマンの哲学を説くのは、権力がつねに用いる手段ではあった。

こうして夫は、家庭にいる私の位置が見えてくるようになり、企業と家庭の基本的構図が理くつでなく、実感としてわかるようになったのである。この間は連日、夜遅くまで話し合い、お互いの価値観から人生への思い、相手に求めるもの、家庭のとらえ方など、実に多岐にわたってじっくり語りあうことができた。

一時は、夫の存在が非常に遠く感じられ、何のための夫婦か？ と思って苦しんだこともあったが、今は二人の考えの共通性を再確認できて、心理的にとても安定している。

私が何に興味をもち、どういう人ときあい、どんな仕事をしたいのか、今までのおさなりの態度とは違って、ごく自

然に、かつきわめて真剣に心にかけてくれるようになったし、私もまた、夫がどういう考えで新企画を出し、ために会社（仲間）と闘い、それが彼の生き方とどのように関わっているかが、よくわかる

優しく、押しつけがましく

東京都田無市 法村 祐子（74歳）

五か月ほど前のこと、

「お母さん。ちょっと来てごらん。いいこと教えてあげるから」と、六畳のほうから夫の声。また何事ならんと急いでそばに行く。「ちよつとそこに座って」「はあ」またこごとでも頂戴するのかと神妙に座る。

ところが……「ハイこれを持って」と三味線を持たされる。「僕はあんたが大好きだから授業料なし、ただで教えてあげるから弾きなさい」ときた。

「いま、片付けものをしていいるから駄目

ようになった。

これから先、事態はどう転ぶか予測もつかない。場合によっては、失職の可能性もあるが、それもまたよし、二人で再出発しようという心境になっている。

です」と私は抵抗する。

「それはあとですればいいから、ここは僕の言うことを聞きなさい」仕方なくいやいやバチを持たされ、弾く羽目になる。「ハイ、では先ず最初はさくら、から……。ハイ、三の糸の4を押さえて二回バチを当てる。そうじゃない、左の人さし指で4を押さえ、そのまま薬指で6を押さえて……ウンそうそう、その調子それでさくら。もう一度同じことをくりかえせば、さくら、さくらとなる。どう面白いでしょう」

★わいふバックナンバー

- 176号 わたしの恋愛体験
- 177号 肉親の老いをみつめる
- 184号 私の災害体験
- 186号 お医者さんを診断する
- 189号 知的内職の落し穴
- 190号 わが家の夫婦ゲンカ
- 191号 集合住宅で生きる
- 192号 私のやってみたセールス
- 193号 学校教育への疑問
- 195号 特集なし（私の昭和史①）
- 197号 親があなたに伝えたもの
- 203号 自営業主の妻

四五〇円 以下同じ

送料は一冊二〇〇円、二冊三冊二五〇円、四冊六冊三〇〇円、七冊九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。
Tel（三）二六〇一四七七・四七七三

こっちは迷惑、人の気も知らないで一人でえつにいつている。

それにしても教え方は、なかなか堂にいつてる。「お父さん、教え方なかなかお上手ですね」「そうでしょう。だから一緒にやろうと言っているのに、ほんとうにあんたは強情なんだから、やればなんでもできるのに」と、小言ともぐちもつかない一言。

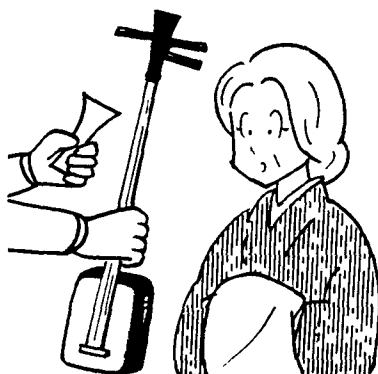
「さあもう少し続けてやろう、ほらバチの持ち方がまたおかしくなった。それではいい音が出ない」（や・よいの空は見わた・すかぎり）

「ああ疲れた、左肩が痛い……」と私。「じゃ、ちょっと休んで、肩を揉んであげるから」と。

ほんとうに優しい。これじゃ逃げるわけにもゆかず、どうしてこんなにじんわりと押しつけがましいのかと、頭にくるやらおかしいやら……。

別にきらいというわけでもないけど、まだまだ私にはせねばならないことは山

ほどあるのにと気があせる。なるたけつかまらないように気をつけていても、いつかまってしまう。でも「門前の小僧、習わぬ経を読む」のことわざどおり、いつの間にかやら「さくら」と「黒田節」が



弾けるようになった。とはいっても、指が思うようにうごかない。

自分で聞いてもたどたどしいと思うのに……「ウン上手になった。僕がバイトをやめたら二人でかどづけに行こうね」と上機嫌で「もう少し熱心にやれば、あんたは頭がいいからすぐに上手になると

思うよ」とおだてる。

そんなこといっても無理なんですよネ、今はやる気はないんだから、それに芸の上達と、頭の良し悪しとは関係ないと思うんだけど……。

だからといって、自分の頭が良いと主張しているつもりはありません。

これを書いている今も主人は、ピンピンとやりながら「どうあんたも一緒にやりなさいよ。合奏したらいいと思うよ」としきりに誘いかける。聞こえない振りをしているのもつらい。

だが待てよ。どうも最近白内障が進んで、新聞や小さい活字も見にくくなってきた。少しでも見える今のうちに、目が見えなくても弾けるであろう三味線でも習っておいたほうがいいかも知れない。授業料はただだし……。

教えてと言えは途中でやめるわけにもゆかなくなるし、どうしようかなあと目下思案中。みなさんならどうなさいますか……。

（え・大場美和子）

投稿ホットライン——物いわぬは腹ふくるるわざ

マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でもの申そう！

出会いと別れ

東京都武蔵村山市 大沢 陽子

「すごい子供が入ってくるようですよ」
教頭は、その子が前にいた学校から送られてきた書類を四年担任の教師たちに見せていった。それには、「お金を盗むくせがある。だらしがない。授業中歩き回ってばかりいる。父親は暴力団員」など、ひどい言葉がびっしりと書き込まれていた。「ぼくのクラスに入れてください」夫はいった。「ひどい子供らしいですよ」教頭は、その書類に書かれているとおり

の子供だと思っているらしい。「悪い子なんかいませんよ」その子が悪くいわれていればいるほど、腕が鳴る、という思いで、夫はその子を持つ。そうして受け持って、悪かった子は一人もいなかった。その子が転校してきた日、夫はその子をクラスの子供たちに紹介し、専科の先生方の所へも連れていって、ていねいに挨拶した。「こんどぼくのクラスの一員になった〇〇君です。よろしくお願いし

ます」と。その子も神秘的な顔で頭をさげた。

その子は、たしかに忘れ物が多かった。盗みぐせとか、授業中歩き回るということはまったくなかった。一年から三年までの勉強が身についていないから、なんでも人一倍時間がかかったが、投げ出すことはなかった。ぎしぎしと手に力を入れて、不器用に大きな字をノートに書いているその子を見て、まじめなんだ



な、と夫はその子をいとおしく思った。

夫は、忘れ物があっても咎めたりはしない。なければならぬにやっているんだから教師が怒ったりすることは無いとい、紙でも鉛筆でもみんなが自由に使えるように机の引き出しに入れておく。母親がいなかったりすれば揃えたくても揃えられないのだからと、木とか布とか特別の物を使うときは家から二人分くらい用意していく。いろんな家庭環境の子が集まっているのに、みんないちように一生懸命勉強しようとしている。健気なものだ、えらいものだ、と夫は思う。

「使っていないハンカチない？」と、夫は何度か男物のハンカチを持っていた。「給食用のナプキンを入れる袋を作ってくれない。名前を刺繍して」といったこともある。ハンカチも、ナプキンを入れた名前つきの袋も「使ったら洗って持てこいよ」と、そっとその子に渡した。その子は、それが汚れてしまうと、もう持ってこなかった。

その子はお母さんがいないうえに、お父さんの帰日も遅く、一人で持ち物の用意をしなければならなかった。だからその子が何を忘れても夫は怒らなかった。よいところを見つけてはほめる、ということが続けた。一、二、三年の間の勉強

をほとんどしていなくても、その子にやる気があり、その子がどこでつまづいているか教師が見つけ、前にさかのぼってゆっくり勉強を続けられ、かならずわかるようになる。その子はそれは熱心に勉強した。

夫は答案用紙にばつはつけない。あつているところに丸をつけて返す。丸のつかないところは間違っているんだから見なおして持っておいでとい、書きなおしてきた答えがあつていれば丸をつける。そうして全部が丸になるように指導している。その子はそういう作業をじつに根気よく続けた。運動はうまくないし、歌も絵もうまくない。三年までの勉強をしていないから勉強もできない。でもやる

うという気持ちがある。教師は、それを喜んで、スゴイネ、えらいネ、立派だ、とほめたり感動したりしながら勉強を続けた。

勉強がわかるということがうれしく、その子は穏やかな表情になり、ぐーんと明るくなった。「なにを見ていたんだろうネ。こんないい子を」と夫はいう。担任に憎まれたりする子は、おとなしい子ではない。おとなしければ、担任が目の敵にすることは無い。目の敵にされ、拒否され、いじめられる子はいくらもあるエネルギーを持っていることが多い。そういう子ほど見所があると夫はいう。彼のクラスにいと、みんな生き生きしてくる。誉められて認められて、学校に来ることが楽しくなるらしい。

その子が明るくなって生き生きした顔で歩いているのを見て、別人のようだ、と先生方はいい、もともといい子だったんだ、と夫はいう。お父さんも暴力団員などではなかった。静かな人で、「前の

先生には憎まれていじめられてかわいそうでした。転校してきてほんとうによかった」といった。

その子たちが五年生になるとき、組替えがあった。夫は、クジではかのクラスをひいてしまっても、その子が友だちに助けられて、今までのように楽しく勉強できるよう願って、その子のまわりに、その子と仲のいい子と心やさしい子をおいた。あと一年か二年その子と一緒にいたい、と思っても、夫は一人をとりわけておいて受け持つということはしない。世話する人がいないとか、心にかけて

乳癌など怖くない

T・Sさんという、とてもユニークな女優さんがいる。五十代の後半だと聞いたが、大柄で丸顔に派出な太縁のメガネをかけて、黒髪を女雛のようにふくりと結いあげた独得のヘアースタイルが決まって、とても若々しい。

くれる人がいないとかいろいろのハンディを負い、悪い悪いといわれ続けてやる気のなかった子が、別人のように意欲的になってきたとき、その子を大切に思い、その子を変えるきっかけになった人が、もう少し担任を続けて欲しいと私は思う。夫は、心にかかる子がいても、クラスわけをしたあとは、どのクラスを受け持つことになるか、いつも運を天に任せしてしまう。

ほかの先生方のひいたあとで、最後に残った封筒を夫は受けとった。その封筒の中に、その子の名はなかった。

東京都日野市 春名 春美(50歳)

そのT・Sさんが、一年余り前に乳癌の手術を受けたのだそうだ。乳癌と聞けば、二年前に同じ病名で左乳房を失っている私にとって、他人ごとではない。何となく仲間意識のようなものを感じて、彼女が出演しているテレビ番組をときど

き見る。

乳房は、女性にとって一つの象徴であり、命の次にいいとおしいものだ。そのいとおしいものを失う無念さは、同じ体験をした者でなければわからないだろう。片方だけ残された乳房の、何とも寂し気なこと。

ところがテレビに登場するT・Sさんは、いつでも底抜けにあかるい。人知れぬ悩みとの葛藤もあるはずなのに、暗いイメージなどみじんも感じさせない。まことに立派だ。

彼女いわく「病気に負けたらだめです。悪いところは、すばっととってしまえばいいんです。何くそっ、こんなことぐらいいで、と気丈に構えていたら、痛みなんかどっかへふっ飛んでいってしまいます。……乳癌の手術と申しますのは、出っ張っている部分だけを切り取るんじゃないんですのよ。私の場合は右でございませうけれども、右胸の組織、つまり乳線も筋肉もぜんぶ、脇の下の方までごっそり

とえぐり取られてしまいますのよ。ですから補正しますのには、まず陥没した部分をタオルとかで埋めましてから、その上にふくらみをのつけるわけで、ございます」

少々卑猥な言葉も、彼女の口から飛び出すと、からりとして嫌味に聞こえない。人柄そのままに、てらいもなく早口でしゃべり続ける彼女の表情は魅力的に輝やく。

幸か不幸か、私も彼女と同様に豊満な肉体に生まれついている。左右の段差を補正することにはひと苦労しているが、彼女が着る大胆なデザインの衣装は、体型を自然にカモフラージュしていて参考になる。

実際に、手術の傷あとは広範囲にわたり、全く原形をとどめない。呼吸をするたびに、でこぼこと縫合された皮膚の下で、肋骨がぐにゅぐにゅと波うつのが見えて、それは不気味だ。乳房もトカゲの尻尾のように、切られても再生するもの

ならいいな、と愚にもつかないことを考えていたら、元通りの体になった夢を見た。目覚めてちょっとしんみり。今さら未練がましいぞ、と自分を諷めた。暑いにつけ寒いにつけ傷あとが痛み、



腕のむくみなどの後遺症も避けられない。転移、再発の不安も常にあることは否めないが、日常生活への支障はそれほど感じない。要は病気に負けない精神力だ、ということを私も実感している。

先日の新聞で、「我が国でも、近年乳癌の発生率、死亡率とも著しい増加の傾向にある」と報じられていた。食生活が豊かになって、動物性脂肪を摂取する割合が増えてきたことも一因のようだ。

欧米諸国では、みにくい傷あとを残さず、しかも完全に再発を防ぐような治療方法が行われている、とも聞いた。日本で実用化されるのも、時間の問題だろう。その日が一日も早く来ますように……。

T・Sさんという。「乳癌の手術なんて、ちっとも恐れることはありませんのよ。でもね、日ごろからご自分でじゅうぶなお気をつけになっていて、とにかく早期発見し、迷わず適切な治療をお受けになることを、女性のみなさまにおすすめます」と、全く同感である。

娘に拍手

埼玉県行田市 小川 由里（40歳）

中一の娘が遅すぎる。冬の午後六時半はすでに夜の領域である。真っ暗な運動場でラケットふるわけもないし、と心配している

と電話が鳴った。娘からだ。『あのね、今日は部活休んでちょっと話し合っていたの。もうすぐ帰るから。先生もいるから』

早口に告げて、切れた。よくわからないうが、連絡があったことで私は安心した。七時すぎに帰ってきた娘は着替えもせず、一気に喋り始めた。こういうことであつた。

学校で人権週間というのがある。そのおり、全学年無記名のアンケートをとつた。娘の担任は、先生に對すること、友達間のいじめなどなんでも書け。これをもとに明日、話し合いをもとう、と言つた。娘達は喜んだ。いつも学校から一方的に厳しく管理されるばかり、生徒側の

言いたいことを聞いてもらえることはない。いい機会だと書きまくつた。

翌日、クラスで話し合いがもたれた。先生が取り上げたのはある男子の「僕は無視されている」という訴えであつた。

聞いた級友達は驚き、本人が一人でそう思い込んでいただけとわかつた。娘達は先生が自分達の書いたことをどう持ち出してくれるか、待つた。先生はなかなか自分や他の先生のことについてはふれない。そのうち時間がきた。肩透かしをくわされて娘達は「頭にきた」。

「なんで先生は自分達のことについてはなにも言わないの。あたし達、あんなに書いたのに」——次の日の放課後までその思いはくすぶりが続けた。ついに女子十九人のうち活発派九人が居残り「先生を呼んできて話し合ひしようよ」ということになつたのである。職員室へ呼びに

行くのはジャンケンで決めた。

担任はまだ二十四歳の男の先生である。昔「女学生の友」のさし絵に出てきたような少年っぽい雰囲気、とてもかわいいのだ。担任をもつたのは今度が初めてということである。表情を引き締めた女生徒に呼び出されて、内心ギリとしたに違いない。

先生は教室にきた。一人が「来てもらった」理由を説明した。先生はメモ帳をひろげた。

いよいよ質疑応答開始である。「先生はこの間、夜、男子二人女子二人の家に電話して、生徒会に立候補するようにと云つたそうですね。先生がそんなことをするならクラスで選出会をもつ必要はないじゃないですか」

九人の中に電話をもらった本人がいて「こんなことしてほしくない」とみんなの前で喋り、オーブンなクラスだからほかの三人もすぐばらした、ということである。

「それは、なかなか決まりそうにないので、活かつを入れようと思って——」

「なぜ、その四人にしたのですか」

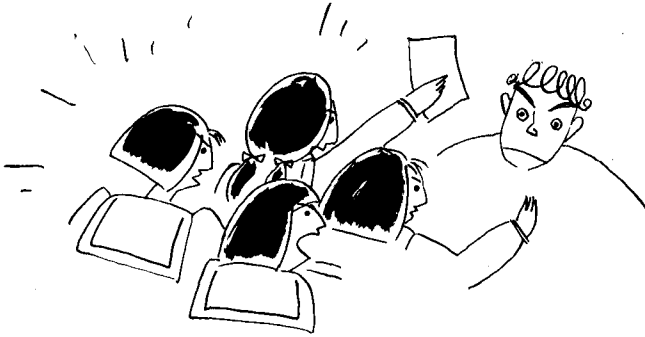
「代表委員の経験があつてクラスのことがよくわかつていると思って——」

「おかしいと思います。先生が電話したから、ほかのやりたいと思つていた子が立候補できなくなつてしまつたのです。先生がそんなことをしてもクラスはよくならないと思います」

「——」

「先生は漫画の本を取り上げて『覚えていたら卒業式に返す』と言いました。そんなことをしても仕方ないと思います。私達は学校で漫画を読んだりしません。貸し借りするのに手渡すだけです。部活で毎日遅くて、帰ってから貸し借りする時間がないから、受け渡しに持つてきているだけなのに」

などなど娘達は次々に「こっちの言い分」を突きつける。やがて先生はこう言つた。



「そんなら先生はもう必要以外のことはなにも言わないから自分達だけでクラスをよくしてみる」

開き直られてこの九人、カチンとこねはずはない。

「先生はどうしてそんな単純な考えしかもてないんですか。私達は先生になんにも口出すな、と言つてゐるわけじゃありません」

いやいや、たいした論客ぞろいである。先生の戸惑つた顔が目につく。

「いや、先生はそういう意味で言つたのではなくて、自分達でやってみると言つただけで——」

私にはよくわからないが娘達は、わかりました、それでは他の先生への不満も聞いてほしい、と続けた。

「ある運動部で試合に負けた子を顧問の先生が叩いて、その子は泣いていました。一生懸命やつて負けたのに、なぜ叩いたりするのですか」

これは私も聞いていて、言わねば、と

思っていたことである。よく言ってくれた。ひとのために怒る。新人類も捨てたものではない。

聞けばすべて筋の通った先生への不満である。私は感心した。先生もだんだん落ち着いてきたのだろう。メモをとりながら「話し合い」のあとのほうはみんなで気さくな雑談となった。

二時間が経っていた。先生は全員に十円玉を渡し、言った。

「先生もおまえ達の意見を聞けてよかった。遅くなったから、順番に家に電話をしておきなさい」

それが冒頭の電話である。

私は夕食の仕度をやめて聞き入っていたが、娘の話が終わると拍手を送り「よくやった」と褒めた。ちょっとじーんとしていた。先生に好感をもった。私がこの先生だったら、今夜は眠れないだろうとも思った。生徒達がナマの声をぶつけてくれた。話しているうちに心が通じ合った、初担任した甲斐があった、と……



完璧な道具「紙ヤスリ」

……。
三学期には担任との面談があるという。この若い、かわいい先生がずっと「聞く姿勢」をもち続けてくれる先生であってほしいから、私はにっこりとしてこう言うつもりである。

「私は娘に、先生に言いたいことがあれば、陰で言わずに正面から先生に言いなさいと言ってあります。先生は生徒達の言い分を聞いて下さる姿勢をもって下さっているようで、とてもうれしく思っています」

神奈川県横浜市 河上 友子

「紙ヤスリ、サンドペーパー」が思ってもみないことに使われていることを知りました。世界中でも、日本人しか多分しないであろうこと、それも多分ごく限られた人達しかやったことのないことを経験しています。

もったいぶっているようですが、それはなんと、女性の性器と陰毛を丁寧に消し去る作業に使われているのです。もちろん、本物ではありません。雑誌のグラビアに登場している女性のものなのです。

実は、私は、日本とアメリカとメキシコの女性雑誌に現われている「理想的な女性像」の比較分析研究をしているグループのメンバーなのですが、三国の雑誌を比較するので、それぞれの国の雑誌を集めなければなりません。今までは、書店を通して買っていました。直接購読ですと、三分の一ぐらいの費用で済むことがわかり、私がアメリカ雑誌の係となりました。

レディーズホームジャーナル、グラマ、コスモポリタンなどの購読の申し込みを私の名前でした。その中に、男性誌のプレイボーイ誌の購読も含まれていました。慣れないことなので、いろいろ行きちがいなどあった末、やっと、それぞれの購読者リストにのり、ボチボチと雑誌が届きはじめたある日、一通の予想しない封書が、横浜税関横浜外郵出張所から来たのです。

開けてみると、「あなた宛に来ているプレイボーイ誌は風俗を害すべき物品と

認められる」とのこと、ただただ、あつげにとられてしまいました。その書類によると、本通知書について貴殿に異議がない場合、「任意放棄書」に記入してなつ印して送り返せば、処分してくれると書いてあります。しかしこちらとしては必要なので、お金を出して買いもとめたものです。放棄するつもりはありません。書類をさらに読んでいくと、「この通知に不服のある人は本通知を受けてから、二か月以内に異議申し立てをすることができません」とありました。電話をすると係の人が「指定の個所を、本人が出向いて削除すれば、受けとることができる」との返答です。私が本人ですので、行くしかありません。

約束の日、八月末の暑い日の午後でしたので、汗だくで指定の場所に着きました。がらんとした事務所には沢山の人が事務をとっていました。入り口入るとカウンターがあり、その近くの人に係の人を呼んでもらいました。係の人は中

年の男性で、細く切った黄色の紙をはさんだプレイボーイ誌を持って近づいてきました。

「では、作業をしてください。個室はありませんので、ここでやってください」と言われた場所は、入り口に近いコーナ―で、うすよくれたブルーの布をはったつい立てでかこっただけの場所でした。中に入ると、古ぼけた事務机と椅子があり、「必要なものは引き出しにあります。紙をはさんでおきましたので、見落としのないように削除してください。終わったら、点検しますので、呼んでください」といって、係の人は自分の席にもどっていきました。

私は、「さて」と、引き出しを開けてみると、ありました、一センチくらいに切ったサンドペーパーがあったのです。作業をしてみると、びっくりしました。誰が考えだしたのか、紙を破らず、しかし、復元不可能な完璧な道具なのでした。すっかり感心はしましたが、それを使

って写真の女性達の陰毛や性器をゴシゴシ消していると、にっこりほほえんでいる女性、その人を抹殺しているような気がしてきます。ポルノが良いと言うつもりはありませんが、陰毛と性器が見えなければ、女性を「物」とみなしてもいいということですから、腹が立ちます。肝心のことは無視して、枝葉のことにやっきになっているのですから。そんな私の気持ちも知らないで、中年の係官は私をなぐさめるつもりなのでしょう「私もこういう雑誌が好きで、見ていますよ。ただ日本の国では、こういうことを許さないだけです。何も恥ずかしいことはありませんよ」ですと。なにかおいわんやでした。

追伸、前述の税関からの通知書によると、「異議申し立てができる」とありましたので、所長に私達研究会の主旨を説明して、アメリカで購読するのと同じ状態を受けとるようにできないものかと、交渉したいと思って、所長直接の連絡方

法をたずねたところ、「何のためか」ときかれ、事の次第を説明したところ、「所長は実務については一切関知していないし、全国どこでも同じように実施してもらっている。抗議してもむだ骨だし、あなたには、受けとれるように、便宜を図っているでしょ」という。さらにつけ加えて、「書店に並んでいるプレイボーイ誌を見たことあるでしょ、あれは、月一回、パートの女性達が地下の倉庫で、あなたがやったのと同じ作業をしているん

メカと女性と

ある自然科学の学会で、発表に立った某大学の教官が観測機械の優秀さを強調して曰く、「表示は正確だし、取り扱いが簡単で、女の子にもできる」と。これは一場の失笑を買い、後刻コメントイターが表現の不適切を指摘したというのだ。その学会にはもちろん女性会員もいて、何人かはその場に出席していた（以上は

ですよ」と。

倉庫の中で、何人かの女性がサンドペーパーを使って、女性の「一部」をかき消す作業を賃労としてやっているというのでした。私はこれを聞いたとき、ああやっぱりという気がしてがっかりしました。なぜなら、税関に作業に行ったとき、漠然と、書店の輸入課の男性従業員が私が出たと同じことを何百冊とやっているのかなと思ったりして、いい気味だと感じていたりしたものですから。

神奈川県横浜市 原 眞智子（51歳）

夫が見聞きして語ったところによる。

女性がメカに弱いというのは世間の通り相場のように、新型OA機器を前ににっこりしている若い女性の写真は、まさに「女の子にも使える」簡単さをアピールしている。

けれども私には、メカニックなものへの能力に男女の差が先天的にあるとは思

えない。それは幼児からの経験の内容に差があることが原因だと思う。つまり赤ん坊に玩具を与えるのに、男の子へ自動車、女の子へ人形という選び方をされることが多く、その後も成長の各段階にわたってこのパターンが繰り返されるとし

安全な野菜を

鶏が先か、卵が先か……。無農薬野菜についての農家の弁明をきいて考えてしまった。

農家自身も、いや農家がもっとも無農薬野菜を望んでいるという。農薬を散布する危険を一番よく知っているのは農民だという。また後、咳込んだりするという。病院に通いながら、全てを有機野菜に変えるのは不可能な現状をうれう。堆肥のために人ぶんを確保し、それを畑にまけば周囲から苦情がくる。虫がいるキャベツは店頭で売れ残る。消費者が

たら、電池の交換やフィルム装填がでない女性ができ上がっても不思議はない。

子供に接するいろいろな大人は、絵本やおもちゃの選択に当たり、こうした視点も必要ではないだろうか。

神奈川県藤沢市 河野 民枝

「みた目」を選ぶ限り、完全無農薬は不可能だという。

それに、農家自身の経済の問題がからむ。人手の問題、家族制度の問題もある。世の中全てがスピード化し、お金の価値ばかりが大手を振って歩いている現在、農家に昔どおりを期待するのは無理かもしれない。

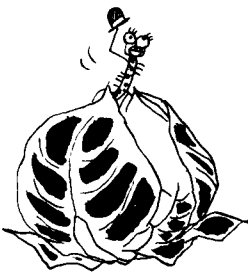
かといって、人間の身体を破壊するものを食べ続けていいわけはない。誰が「みた目」を要求しただいたのだろうか。消費者の意識がとるべき責任は大きい。が、

一部には、安全なものを探して歩く消費者、共同購入をしている消費者もいる。

流通機構の複雑さで、生の声が伝わらないことに原因があるとも思う。そして、お米にみられる政治の不在が大きな原因ではないかとも思う。

寿司に使うしその葉が薬くさかったり、名産といわれる地のキャベツが薬づけだったり、ちよつと身のまわりをまわしても、じわじわと私達の暮らしは毒されている。

「安全な食べ物」という当たり前の願いが実現する日は遠いのだろうか。



誰が一番わるいのか

山梨県北巨摩郡 古池けい子

このところ、連日新聞を読んでは、無性に腹立たしくなっている。

税制改革の話が、新聞に載らない日はない。確かに首相は、選挙前には大型間接税の導入は絶対にないと言った。しかし、そこは彼のこと、中型間接税とでも名付けてやるのかと思っていたが、「新型」というそうだ。

この新型間接税が導入されると、不公平税制は是正されず、いっそうの拡大となるという。その上存続させるといつていたマル優も、あっさり廃止されてしまった。

我が家は給料取り世帯であるが、給与の総支給額に対し、所得税、住民税の占める割合の何と大きいこと。受け取る前にすでにすっかり、税金は引かれ、それでも何とかやりくりして、細々と不時に備えている。その預貯金の利子からまで

税金を取ろうというのか。

物価は上がる、金利は史上最低、しかもそのわずかな利子にも課税されるというのだ。それでは病気になるたときや、老後働けなくなったときには、国でめんどうをみてくれるのかという、社会保障費は次第にカットされてきている。

やらずぶったくりとはよくいったものである。先のことはわかりはしない。中途半端な蓄えなどせず、使ってしまうというのだろうか。

誤解のないよう言っておくが、私は税金を払うのがいやだというのではない。

富める者、貧しき者、それなりの公平さで痛みを分かち合うのであれば納得もできる。しかし一方で、税金の無駄遣いは二百億円近いというではないか。

なぜこんなことがまかり通るのかといえば、やはり、三百七議席の威力だろう。

新聞は「自民党、数の力で暴挙」「中

曽根首相、公約違反」などと書きたてるが、なぜ三百七人を国会に送り出した側を、全く批判しないのか。もっとも腹に据えかねているのは、この点である。今になってこんなつもりで投票したわけではない、などという投書が載ったりすると、本気なのかと言いたくなる。

にもかかわらず、地元に立派な道路を建設してくれたとか、仕事を回してもらえると、お父さんが会社で世話になっている人に頼まれたとか、補助金が欲しいとか……数えればきりが無いほど、やたらにばらまかれた変なエサにひっかかった頭の悪い魚は、ほんとうは誰だったのか。

今、中曽根首相の考えていることは、増税でふやした財源を何に使うかということだ。先日、彼はこんなことを言った。「来年度の防衛費は、必ずしもGNPパーセントの枠にこだわる必要は、ないと思っている」。

(え・万谷陽子)

投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

生きてます 活字人間

——目の鱗、落としてますか？

The giving tree
by Shel Silverstein

おおきな木 (日本語版)
本田錦一朗訳

東京都田無市 岡部佐智子 (42歳)

少年と大きな木の姿を描いた絵
本です。

現代の子供達は、高価な玩具にかこまれ、十分な指導のもとに各種スポーツ、お稽古事をやるなどと、行き届いた配慮の下で、豊かな生活を過しています。が、果

たして十分に幸せなのでしょう
か？

子供というのは、例えばここに
大きな木が一本あれば、そこでた
っぷり遊べて十分に満たされるも
のではないのでしょうか？

And every day the boy would

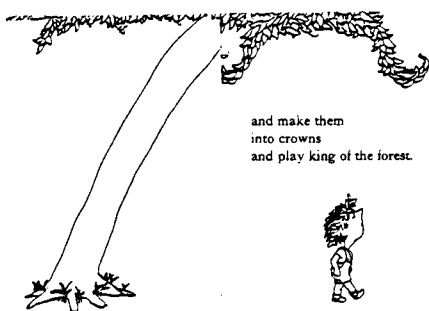
come,

and he would gather her leaves
and make them into crowns
and play king of the forest.

ここに描かれている木と少年の
交流の姿は眩いばかりに幸せに満
ちています。

活字を木の葉が散るようにヒラ
ヒラと散らばせたり、少年の左腕
と左脚はまっすぐに伸びきってい
て、少年の心や喜びまで伝えてい
る絵の楽しさを鑑賞して下さい。
ところが、少年が成長すると、

木にお金をもとめてきます。家が
欲しい。なにか失敗したらしい少
年は逃げるための舟が欲しい、と
求めてきます。木は自分ができる
全てを与えてとうとう切り株だけ
になってしまいます。しかし木は、
(少年の姿が毎日やってこないこ
とを) 淋しくは思っても、幸せと
いうのです。



and make them
into crowns
and play king of the forest.

(原書よりコピー)

そして、年老いて疲れ果てた少年が、またやってきます。切り株になった木は、少年になにも与えられないことを嘆きます。しかし少年は「わしゃもう疲れたよ。ただ休みたいだけだよ」とつぶやきます。

すると木は（それまでくしゃつとしていた切り株を）ピンと伸ばして、この切り株に座って休みなさいとすすめるのです。

そこに木の喜び、幸せが伝わってくる——そんなお話です。

私がこの作品にひきつけられてしまっている所は数か所あると思います。

まずは、最初のころの木と少年がともに幸せに溢れている平和な時代の懐かしさ——自分自身の子供時代や親となつての子育てのころがオーバーラップして、みてて見飽きないのです。

それだけに後半の木の姿貌ぶりは悲劇的で、衝撃といえるほど肌が粟だつばかりのものです。

それからあんなに幸せに満ちていた少年が成長するといつも貧しく、失敗し、疲れてばかりいること。このことは私を悲しませ、やりきれなさのあまり、なぜ？なぜ？ が際限なく続くことになつてしまします。

現代は愛されることばかりを求める時代です。その中で愛するために、自分の全てを真心から与えることで、心豊かな幸せを得ている木の姿を、作者は伝えたいのだと思います。

それは分かります。でも、でも……。

この少年の姿には、作者のメッセージはなにもないのでしょうか？
作者のシルヴァスタインは、裏表紙に大きな顔写真で微笑んでい

るのですが、実にエ、ネルギッシュでタフでヴァイタリティに満ちた表情をしています。

彼の作品には「ぼくを探しに（The missing Piece）」「ピッグ・オーとの出会い」などがあります。

これらの作品はあるいほご存じかもしれませんが。どれも心に残る水準の高い作品ですね。

こうして作家として成功した氏が、なぜ、これほど少年を人生の敗北者としなければならなかったのか？

テーマとなっている木の姿を強調するための単なるテクニクなのか？

或いは、作家としてのナイーブさが、少年の姿をより自虐的に描いてしまったのか？ 等々。

ともあれ、単なるテクニクとすれば、前半の幼児時代の部分で

すっかり共鳴、共感してしまっている読者にとっては、俄かには信じ難い事態展開へ引きずりこまれてしまうことになります。これではしかし、絵本としてのあり方が疑問となり、単なるテクニクとは思いたくありません。

かといって、高校を頭に三人の男児の母親としては、感動ばかりしてはいられない悲しみが残ってしまします。

というわけで、読むのは何分もかからない絵本ですが、何日、何か月経った今でも心にトゲか、引っかき傷が残っている作品なのです。

案に読めて、かつ心に引っかき傷まで作ってくれるとすれば、おすすめに値する絵本だと思います。

Harper & Row 社 二九五〇円
日本語版篠崎書林 八〇〇円

聞き書・日本の食生活全集 全五〇巻

日本の食生活全集編集委員会編

東京都八王子市 和田 好子

うさぎ追いかの山、小ブナ釣りしかの川。

なつかしい。ふるさと、は、戦後四〇年の急速な近代化、農薬国から工業国への変化の中で、夢のように消え去りつつある。

しかしそのふるさとのかのくらしの知恵は、何千年の伝統を踏まえた、民族の存在証明であって、消え行くに任せてよいものとは思われない。衣服や器物は形があるので、博物館にも収蔵されるけれども、料理などは、知っている人が亡くなればそれきりである。

農山漁村文化協会（社団法人）は、大正・昭和初期に村の主婦で

あった人達からの聞き書きによる、この大全集の刊行を始めた。

「岩手の食事」「高知の食事」「京都の食事」「茨城の食事」など、各地方の食生活を、献立、料理をじっさいに再現してもらって、記録に止めよう、という大事業だ。伝統料理を作る人々はすでに七〇八〇歳、もはやタイムリミットである。

「四季の食生活」「基本食の加工と料理」「季節素材の利用法」「冠婚葬祭と食事」と、たんに料理法の紹介にとどまらず、労働、行事等村の生活の全般が、再現される形をとっているため、わたし



たちの祖父の生きた日々がよく分かる。それは何と貧しく、何と苦しい労働であったことか。にもかかわらず、主婦たちが毎日、忙しい仕事（彼女達は専業主婦ではない。りっぱな農業労働者である）のひまに、作った料理のおいしそうなこと。けっして手の掛かる料理ではない。魚を食べるのは年に何回というような村でも、彼女たちはありふれた野菜をおいしく煮、おいしく漬けているのだ。心をこめて作ったというだけではなく、伝統の重味と強味が感じられる。それらの料理は、何千年のかのくらしの積み重ねの中で、女から女へと

伝承され、一代一代工夫されてきた味である。日本の食事の原点を、私達の台所で手軽に作ってみる楽しさもある。

▼切干し大根を水に浸してもどし、わかめももどして切る。わらびのゆでたのも食べよく切り、三つを油少量でいため、水、しょうゆを入れてことごと煮、味をしませる。

▼食用菊はさつとゆでて花びらをむしりとる。菊と、にんじん、いんげん、しいたけ、こんにゃくのゆでたのをしょうゆで薄く下味をつけ、くるみをすりばちですって塩、砂糖で味つけたもので和える。

▼そば粉3に水5の割合で加え、火にかけて、はしてちぎって食べられる固さによく煮、熱いうちに大根おろししょうゆ、ねぎ味噌で。

「③岩手の食事」より

農山漁村文化協会 二、八〇〇円

情報 コーナー

●京都市のシティセミナーへ どうぞ

- 一月二四日(土) PM二時～四時
テーマ 女も支える性の商品化
講師 深江誠子(桃山学院大講師)
対話者 松井京子(朝日新聞記者)
- 二月一九日(木) PM一時半～三時半
テーマ まだまだ若い何かができ
るー主婦の再就職ー

講師 金谷千慧子(京都
精華大講師)・片岡陽
子(女性問題研究者)

- 三月 八日(土) PM二時～四時
テーマ はたらく女性の新時代
講師 小松満貴子(武庫川女子大教
員) 対話者 国信潤子(関西学院大
講師)
- 会場 京都市社会教育総合セン
ター Tel 〇七五・八〇二・三二四一
- 受講料 一括一八〇〇円(定員
に余裕あれば、一回単位七〇〇円

で当日受付けます)

- 託児 一回五〇〇円。希望者は
申し込み時予約して下さい。

- 申込方法 京都市社会教育総合
センター一階事務室へ、受講料を
添えて申し込みのこと(先着順)

- 企画 日本女性学研究会フェミ
ニスト企画集団

- 主催 京都市社会教育総合セン
ター(財)京都市社会教育振興財団

- ジュータンクリーニングの
PRにご協力下さる方

求めます!!

お友達、お知り合いの方五人以上
集めて下されば、無料でお宅のジ
ュータン(六畳まで)をクリーニ
ングいたします。

なお、ご家庭でできるシミ抜き、
掃除方法もお教えますので、あ
なたも一度、ジュータンクリーニ
ングを経験なさってみませんか?
詳しくお知りになりたい方はお電

話下さい。

木村直美 (〇三)三六・一〇六・一八
〒160 東京都新宿区高田馬場三一
三・八

●お願いがあります!!

国籍法改正によって、子供に日本
国籍を取る権利ができたにもかか
わらず、父親の同意が得られない
ために手続きができない個々人の
情報を集めています。左記までご
連絡下さい。

〒661 尼崎市南塚口町二四〇―二
五 梁 暎子 Tel 〇六・四二七
三一〇九

●「ワンダー」の購読者や
スタッフになって下さい!!

自分自身の言葉で語る、生活から
の提言誌です(年間四号発行予定)。
●教育・子ども●平和●クレジッ
トカード●ボランティア●高齢化

情報 コーナー

社会・人と動物・物の豊かさ・地域づくり等々、毎号特集テーマは硬、軟とりまぜてさまざまな内容となっていますが、生活の中で「アレ、ナンダロー？」と思ったことを、立ち止まって考えてみようというのです。

人間としての思いやり、優しさを根底にして、物事をとらえていきたいと頑張っています。

- ◆購読料 一冊二〇〇円送料一七〇円、継続購読（四号分）一四八〇円、四冊まとまれば送料二〇〇円で継続購読四〇〇〇円。
- ◆申し込み・連絡先 〒241横浜

旭区若葉台二一八―一〇〇三
松丸明子宅 Tel〇四五―九二一―
九一六八

◆郵便振替 横浜九一―二七〇五三

●男も女も育児時間を！
第三集、お求め下さい

一九八〇年に発足した「育時連」は男も女も仕事と家事・育児を無理なく両立させたいという、切実なそして当然な願いから出発しましたが、今ようやく男女平等の育児時間を手がかりとして、未来への希望が見えてきた感があります。今度、表記パンフレット三冊目を出しましたので、ぜひお買い求め下さい。感想やいろいろな声も左記宛お寄せ下さい。

◆定価 三〇〇円 送料四冊まで二〇〇円、五冊以上は送料無料。パンフ第一集は品切れですが、二集は残多少あります。送料負担だ

けで進呈します。

◆申し込み・連絡先 東京都中野区古田四一―一七―一四ますのきよし気付 男も女も育児時間を！
連絡会（略称リ育時連）
Tel〇三―三八五―二二九三

※なおわいふ編集長田中喜美子もこの第三集に「育児時間は男をうるおす」という一文を載せています。

●手作りの作品
いかがですか！！

私、手織りのマフラー、テーブルセンター、ポンチョ、ベスト等を作って十年です。また、昔ながらのハンテンも作り続けています。東武東上線沿線の方、ぜひ見に来てお気に召したらお求め下さい。三千円より。お電話お待ちします。下車駅高坂です。 広沢衆子
Tel〇四九二―九六一―一八二七

●情報コーナー
もっとご利用を！

情報コーナーは皆さんのコミュニケーションのためのページです。もっともっとご利用下さい。

お友達を求める、ゆずりますあげます、本探し、求職、求人、臨時のお手伝いを頼む、など、いろんなことで、読者相互の助けあいをしましょう。縁談もどうぞ。

趣味でお作りになった作品なども、PRして販売なさってけっこうです。但し継続的に、しごととしてのPRをなさる場合には、広告料をいただくことがあります。金額はご事情をうかがい、ご相談の上とりきめます。

投稿ホットライン——笑う門には福来たる

ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば——ああしんど!

義父と暮らす



神奈川県横浜市 黒崎 和子(51歳)

いろいろな事情から、夫の父と久しぶりに一緒に暮らしている。半年を経てこんなものかと思うが、誰かに聞いてはしくて書いている。

この人、八十歳。起居に不自由なし。精神活動も普通。技術畑で長もついた人で、自ら持つことは人一倍。高血圧、多少難聴、片眼白内障は、現在までは重大な生活の支障となっていない。

十五年前に妻を失う。このころまで長男(私の夫)一家と同居。長男が転職して他県に行ったあとは、次男並びにその家族と暮らしていた。六、七年前に折り合いが悪くなり、父は単身家を出てアパートで一人暮らしをしていたが、間もなく自分で公立の老人ホーム入所を決め、手続きをして入り五年ほど経た。

老人ホームも当初は気に入っていたが、月日を重ねるにつれ人間関係や居住スペース(六畳二人)、食事内容に不満をもつようになった。それにホームでは、待遇は平等だが負担に差があるのが何故か腑に落ちなかったらしい。(厚生年金を受給していて、利用料は最高額を適用されていた。負担能力のない入所者は無料) 夫と私は、父が好んで入った老人ホームなら、そこで暮らしてもらうのに抵抗感はなかったが、父が(自分の面目が立つなら)家に帰りたいがっているのが分かってきた。それで第一家に家を空けてもいい、私たちが戻ってきて父を迎えたと

いう形にした。もっとも夫は他県の仕事についてたまで、もっぱら住むのは父と私、夫は週末に帰宅というスタイルである。

父がユニーク(変わった)人物であることは知っていた。独特の合理性を有し、他人の迷惑を気にすることは(まず)ない。

一緒に暮らしてみても、この判断が当たっていることを知った。せき、くしゃみは仕方ない。でも欠伸やゲップ、ため息があんなに公明正大にできるものとは。

食事中(箸で麺を宙に持ち上げ)左手で鼻をブルブルッ。パンをコーヒーに浸す。パンくずを丁寧にコーヒーカップに入れる(もちろんそれを飲む)。刺身に使った醤油の残りを汁椀に入れる(それも飲む)。はっきり見えてしまうと当方の食欲に影響するので、漠然と眺める術を会得しつつあるのだ。止めてほしいと言えば(その場合は)止めるだろうが、長年そうした食事スタイルだったようだし、た

びたび言うだけのファイトが私にはない。この父が友人への電話とか入浴の仕方になると突然弱気になる(弟たちと暮らしている間にあれこれ文句を言われた後遺症?)。私がスーパーから戻ってきて父の電話の最後のほうを聞くのはたびたびだし、夜あまり風呂に入らず、私たちが留守の日に浴室が使ってたたりする。

母親の愛つて？

子供が可愛い、という親はたくさんいるが、子供はウソをつけ、と言う。いざとなれば、大多数の親はわが子よりも世間体のほうが可愛い。ほんとうに子供が可愛かったら、子供が殺される前に子供の苦悩を共有し……親ならば、親ならば……。という二〇三号の門野晴子さんの文章と私の体験が重なった。

一九八五年二月九日、母とふたりでくらししていた未婚の、当時四十四歳だった

火を使うのも臆病で、私が外出する際用意していく食事は、ついお握りかサンドイッチになる。

でも、でも、一人で外出も旅行もできる父は(私も?)、幸せなのだろうか。毎日ギョッ、ハッとしながらも、未長くつき合っていかなければならないと思っている。

大阪府池田市 日比野 都(65歳)

妹が、近くのマンションからとび降りて自殺した。母は、どうして自殺なんかしたんだろうという悲嘆とはウラハラに「親孝行をしてくれた」とつぶやいた。それより以前に、妹が自殺に失敗、入院したときには「やりそこなうなんて……」とつぶやいた。

妹は二十四歳ごろから躁と鬱とをくりかえし、しまいには分裂症というレッテルを貼られていた。八十歳の母にしてみ

れば、他の子供たちのところの孫どもの縁談に差し障ることを考えたであろうし、嫁に対しては、気がねで身を縮めていたし、妹の存在はうとましく、亡くなってくれてホッのほうが、悲しみよりうまわったって咎められないだろう。私も年老いた母に妹を任せて、自分の仕事に夢中のエゴイストであつた。



妹が亡くなつてから、私宛の、封をし、切手も貼つてあるのに、出さずにしまつてあつた手紙が出てきた。お姉さんについてどうしようもないなあと、思い直したのであらう。

その内容は、母の過干渉、管理されることに對しての、うらみ、つらみがほとんどであつた。そういう母の下から、い

ち早くとび出さなかつた意気地なしの妹にも責任はあるが、精神を患つては、それも不可能だったのであらう。

母親の愛というものは、つきつめれば自己愛の延長である盲愛なのですから、と「書きたい女たちへ」の一〇〇ページに田中喜美子さんが書いておられる（その個所の前後も、ぜひ読んでいただきたい、そこだけとりあげては誤解があるかも……）が、まったくである。

自分も含めて、大多数の母親は、それを否定するわけにはゆかないであらう。私も自分がいちばん可愛い。ひとりぐらしも、自由にマイペースでくらしたいという自分の選択による。子や孫との接触もできるだけ避けている。すべて自分中心。さすれば、子供もフタンに思わず喜ぶだろうという計算もしている。

願わくは、コロッと死にたい。けど、そればかりは分かんから、一生けんめい稼がにやあというわけだ。金で解決できる部分は金で。どうにもこうにもな

らん部分についてのみ「おそれいます
が……」と子供に頼んである。すべては、
自分の選択による。忘れられない詩があ
る。寺山修司「家出のすすめ」角川文庫
に「彼ら笑う」と題して掲載されていた
石川逸子さんの詩である。

「この子の手足が長すぎる」

子を食べる母

朝に晩にばりばりと子の手足を食う母
血みどろの口と

慈愛の瞳

「わたしはお前のためを思っている」

いつもお前のためを思っている母から
子は逃げる

短くなった手と足で子は逃げる

母の沼 どぶどろの臭い放つ 沼から
逃れようと もがく

私は仕事の場合（講演）で、よくこの詩
を朗読する。妹の自殺を例に挙げ、生き
がいのある仕事も持たず、人生の目的を
結婚においていたため、それが叶わなか
ったので死を選んだという単純なもので

はなかったかも知れないが、結婚できな
かったという事実は自殺の大きな原因に
は違いない。

皆さん、女の子だから、まあ嫁にやれ
ばいいなんて、気楽に考えとったらあき
まへんでえ、妹みたいに、適齢期に結婚
できなくて、精神に異常をきたし、入
院している娘さんが、たーくさんいるん
ですよ、だいたい結婚は相手が要ります。
結婚できないかも分かれへんのですから、
まず、自分の口は自分で養う、自立する
ことが先決です、それから結婚を。結
婚したかて、私みたいに夫に死なれるか

転機

以前西村滋さんの「私が母からもらっ
たもの」という講演を聞いたことがあり
ます。ご存知の方も多いと思いますけれ
ど、九歳で孤児となり、戦時下の非人間
的な施設を転々とした経歴の持ち主です。

もよー。人生の予定とふんどしは、はず
れませー。

妹の自殺まで利用して私は口先で稼い
でいるのだ。何というイヤラシイやつや
とさげすまれることは十分覚悟の上で、
説得力のある話をと、利用している。妹は
死んでしまつて何の役にも立たない。でも、
私が話すことによって、子供の人生は子
供のものなんだなあと、母親のエゴにつ
いて考えてもらえるところなら、妹の死は、
いささか役に立つのではなからうかとお
もうからである。

静岡県清水市 田中 久子

西村さんが、「私の母は、死んでからも
私を守ってくれたけれど、毎日一緒にい
ても子どもを守れないお母さんもある」
と言われました。私は孤児ではありません
が、自分の親を信頼できないのがどれ

ほど惨めで恐ろしいことか知っています。小学生のときに、母が自分を殺すかもしれないと思ったから。

実際に母がそう思ったかどうかは別問題で、私はそう受け取ったのです。それで人間らしい（対人恐怖症）になりました。

自分なんかいてもいなくてもいい、何



の役にも立たない人間なんだとヒネクレていたから、結婚なんか到底できないだろうと思っていたけれど、ひょんなことから一緒になった夫は、本当にやさしい人でした。

けれども、私はすこしも幸せじゃなかった。自分のことしか考えられなかったから。

その夫が、酔っぱらいの車にはねられて、意識不明のまま二十八日後に死んでしまったのです。

そのときに出会った三人の若い脳外科医と看護婦さんたち、そしてまわりの人々の思いがけない一面（それまで私が気づかなかった）を知って、人間っていうのは私が思っていたようなものではないことがわかりました。

世の中にはこんなにやさしい人たちがいたのか、なぜ今まで気づかなかったのだろうと思いました。長い間恨んでいた母ですが、やっと感謝できそうな気がしてきました。

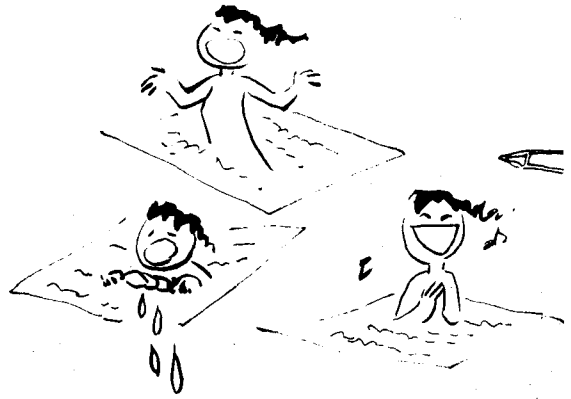
そうは言っても、今はまだ精神状態がホンモノではありませんから、カウンセリングを受けています。まだ、本当にわかったわけではないでしょう。

以前は自分の気持ちを表現することができなかった。その私が自分史を書くと思うようになったのは、「許可証」をもらったからなのです。

くれたのは夫の主治医だった脳外科の医長先生で、見かけはそっけないけれど、本当はすごくやさしい人でした。

それまでは、まわり中が自分に悪意を持っているように感じていたのですが、口の悪いその先生に、人の言うことの大部分は、思ったことをそのまま言ってるだけなんだと教えてもらったのです。

夫のことで失礼なことを言ってしまった。私は希望を言っただけなのにすが、どうも失礼なことだったらしいと気づいたので、退院後手紙を書きました。お詫だけでなく、先生のしてくれたことがとても嬉しかったからお礼も。



もう会うことはないだろうと思ったから書いたのですが、次に会ったときに、「手紙ありがとう。みんなで読ませてもらったよ」
「エッ、先生にだけ読んでいただければよかったんですけれど」
「一人で読むのはもったいない」
そんなことを言ってもらえるなんて、

思ってもみなかった（読んでくれるかどうか心配だった）ので、すごく嬉しかった。

それ以来、手紙をよく書くようになりました。自分の子どもにも書きますし、対等に話をしにくい相手にも書きます。それから未知の人にも手紙を書きます。返事は期待できないわけですが、なかには心のこもった返事をくれる人もいます。手紙のおかげで世界が広がりました。以前は筆不精で、年賀状をもらっても、ろくに返事も書かないという人間だったのだから、タイヘンな変わりようですね。

私は無宗教ですが、自分と似ている人たちのために何かできるようにになりたいと思っています。でも、一番似ているのはわが子ですね。

母は私の気持ちをまったくわかってくれなかったと言うよりは、それなりに心配はしていたようですが、肝心ことはわかってくれない人だったし、怒ってばかりいて、子どもだったときには、母の

笑った顔など見たことがないという感じだった。

私も、そういうところは多分にあります。子どもの気持ちがわかる、優しい母親になりたい。

母も、親に手をかけてもらえなかった、かわいそうな人です。母の気持ちも、わかるようになりたい。

そのためには助け手が必要なのです。夫がいらないのに働きもせず、金ばかり使っていることに、後ろめたい気持ちもありますけれど。

夫という言葉は語感が良くないけれど、「主人」はあまり好きではありません。夫婦・親子は対等であるべきだと思います。お互いに相手が必要なのだから。そして、尊敬しあうようになれば、どんなにいいだろう。

何にしても、信頼関係がなければ、どうにもなりませんね。

（え・片岡悦子）

チビツ子ギャングの馴らしかた
四歳までの育児としつけ

クリストファー・グリーン著
川口雄次訳



発売されるや、本国オーストラリアをはじめ、アメリカ、イギリス、西独、ニュージーランドでベストセラーとなった育児書である。原則だけで子どもは育たない。具体的にどうやって扱っていく子どもに向き合うべきか、迷い、悩んでいる親にとっての福音が、ここにはたしかに潜んでいる。

著者は小児科の医学博士。その豊

富な経験から、「幼児に関しては、どれか一つが絶対的に正しい方法であるとはいえない」と述べて親たちの気をぐつと楽にしてくれる。幼児は千差万別、天使のように大人しく素直な子もいれば、ギャングさながらの子もいる、ということが出発点だ。

ではどういうしつけが適当なのか。頑固な夜泣き、わがままで乱暴な子ども、悪いことばやウソ、さては盗み——あらゆる問題に良識と現実主義で具体的なしつけのノウハウを与えてくれるこの本を、子育て最中の親たちにぜひ読んでほしいと思う。

メヂカルフレンド社

一五〇〇円（N）

ダブル・アイデンティティ
働く母親

スー・シャープ著

翻訳工房「とも」訳



昨年、関西の翻訳グループ「とも」が出版したこの本は、日本と同時代のイギリスの働く母親の現状が、一人一人の言葉で語られており、掃除婦、保母、事務員、紡績工、パート店員等、ごく普通の労働階級の母親達の仕事と暮らしを密着取材してつくられました。

両立、手ごろなパート、再就職、夫たちのとまどい、母子家庭、働くよろこびなど、精一杯生きる英「女性」の真実の声が聞えてきます。母親と仕事を持つ一人の人間としての、二倍のアイデンティティを持ち、ゆれ動しながらも生活を支えている中に生まれた声が本からあふれています。

現代の日本でも、女性の働く場が広がり、家族の理解が深まったとはいえ、この本を手にするにすら難しいくらい忙しく、母親業と仕事を両立されている人に、ぜひ送りたい一冊です。

連絡先 大阪市天王寺区味原本町一六―二―二 大沼恭子方「とも」

創元社 一六〇〇円（T）

保健室の子どもたち

永井瑞江



これは三十一年間、小学校の養護教諭として働き続けた著者が、現場での体験のなから書きつづった大人たちへのメッセージである。検査しても検査しても、半年たつとあつという間にふえるムシバ。

背もたれのない椅子にかけさせると背筋グニャの子どもたち。子どもが朝、いつもより食欲がなくなってもいっこうに気づかない親。子供の抱える問題が、肉体を通じて逆サイドから照射され、その現実が

浮き上がっている。問題提起だけでなく、ケガのときの扱い方、性教育のステップなど、具体的に役立つヒントがたくさん潜んでいるのがうれしい。

慶応通信 一四〇〇円(T)

女感覚で生きる

仕事／子育て／若い

永畑道子



女感覚、このユニークな表現のなかに、著者の思いがこめられているようだ。

男と女と、子どもと——愛を手放さずに書きつづけてきた著者。いつも「ここ」ではない道を探し

もとめ、胸中の火種につき動かされて「生きた生の軌跡を、しみじみとした、しかし秘めた激しさをもって語っている。若いうちほど自分の身しなれば、という著者の娘時代の歩みを辿った

はじめの数ページが、ことに感動的だ。女の自立をみつめながら、つねに情感溢れる文章の流麗さは著者の独壇場。永畑ファンには見逃せない一冊である。

新評論 一五〇〇円(M)

あそびながら学ぶ

手づくり幼児教育のすすめ

J・マーズッロ

J・ロイド

共著

南博訳

ほん



子どもは「遊び」を通じて学ぶ。子どもにとって何よりも楽しく、面白いその遊びの中で、「学ぶ」ことができたらどんなにいいか——そうした大人の願いとチェとが結晶してできたような本である。

形を学ぶ、色を知る、数をかぞえ、ものの名をおぼえ、字をあてはめる——そうした「遊び」が、遊びの中で楽しみながらできる、その一つ一つの例が具体的に紹介されている。

この方法でなら、たしかに子どもたちははらくらくと「学べ」そうだ。ただし教育ママの多い日本で、母親たちがこの「遊び」にのめりこみそうなのが心配になる。

誠信書房 一八〇〇円(K)

ほん

迷ってること悩んでること怒ってること
知りたいことどんなことでも大歓迎です

読者のための相談室

翻訳者になりたい私

相談 匿名

アドバイザー 原田静枝

(再就職アドバイザー)

中学のときから英語が好きで、中・高を通じて成績がよかった私は、好きな道で、家にもずっと続けてできる仕事をしたいと、翻訳者になることを思い立ちました。

というわけで三年前から「日本実務翻訳学院」の通信教育を受けています。

十か月で修了するプログラムになっていますが、つとめのかたわら勉強するので到底ついていけず、現在三年目。三年までは延長することができるとがんばるつもりです。

ただ無事に修了できても翻訳者として本当にやっていけるかどうか、今になって心配になり、「わいふ」のプライベート・ルームに相談してみることになりました。

現在市役所の労組で事務の仕事をしていますが、六月にはやめる予定です。三歳の子を保育園に預けて働いています。

住いは北関東で、東京へは約一時間半かかります。

編集部 翻訳の講座をとうとうと思い立たれたきっかけは？

— 本屋でガイドブックを見たんです。自由国民社というところで出している「女性の副業と収入ガイド」。一ページに二つずつ職種が出ていて、仕事の内容と収入と相談先が出ています。翻訳のところに四つ相談先が出ていましたが、「実務翻訳学院」という名前に何となく魅力を感じたんです。

受講料は十か月七万円で、初めに一括して払いこみます。

編集部 受講なさってみたら、内容はいかがでした。

— 実務翻訳といっても専門コースがいくつかあって、「機械」「社会」「コンピュータ」などと分かれているんです。私は「社会」というのを取りましたが、最初はむづかしくてびっくりしてしまいました。

編集部 教材は少しずつ送ってくるんですか。
— 最初に一括してどさっとくるんです。その中から一週間に一度ずつレポートを送ってそれが添削され、返送されてきます。

何しろ縁のなかった労働問題とか国家間の紛争とかいうテーマが多いでしょ、ついていくのがせい一杯で、お点も最初のうちはCが多かったんです。そのうちだんだん上って、Bマイナスになり、Bプラスからだんだん上っているAマイナスとかBプラスといったところがふつうになりました。

内容は英文和訳と、和文英訳。和文英訳がむずかしいんです。その他に自分だけできる練習問題もあります。

編集部 大体一日にどれくらい勉強なさいます？

— そうですねえ……一日二時間、それで一週間に一度レポートを書けるというところでしょうか。よく分からないけれど。

編集部 添削の程度はどんなでした。

— とても親切で丁寧です。

編集部 終了後学院で、仕事を世話してくれるのですか？

— いいえ、規則書にもそういうことは書いてありませんし、電話で問い合わせても、「うちでは仕事のお世話はしません。みなさんご自分で探していっちゃいます」という返事

なんです。ただ学院でやっているテストで一級をとると「社外スタッフとして登録し、今後の翻訳依頼に活用する」と書いてあります。

編集部 一級をとる人はどれくらいいるのかしら。

— 一昨年の夏の結果が出てましたが、一級一人、二級八人、三級二十九人、というところでした。受験者全体の数は分かりません。

編集部 収入についてはノーコメント？

— 初めに見たガイドブックには「実力によりマチマチだが、よい人は平均的サラリーマンの二倍以上」と出ていました。それに、「これから伸びる職業」ともあったので、つい受ける気になったんですが、いざ終了間際といういまになって、本当にこれで仕事になるのかしら、と不安になってきたんです。それで「わいふ」にお電話したわけ。

編集部 とても嬉しいお電話でした。でも本当のところ、何でもスタートなさる前に情報を十分お集めになったほうがいいのですけどね。

アドバイザー

原田静枝

再就職アドバイザー



「翻訳が仕事になるか」という問題は非常に難しいので、取材して調べた結果を含めてお伝えします。まず翻訳の分野は多岐に渡り、

一般には次のように分類されています。

- (1) 文芸系翻訳 小説、随筆、ノンフィクション、戯曲、映画、マンガなど。
- (2) ビジネス系翻訳 各種書簡、広告宣伝、商事契約書、商品カタログ、会議録など。
- (3) 科学技術系翻訳 技術論文、製品説明書、特許・意匠登録、医学・学芸論文など。

このうちのビジネス・科学技術系を「実務翻訳」といいます。海外との経済交流の盛んな今日、こうした商業・工業分野の翻訳者が求められているのは事実です。文芸系の翻訳者も生活の糧は実務翻訳で得ているのがふつう

ですが、この分野は語学力プラス専門知識が豊富でなければ仕事になりません。

次に「社外スタッフ」について。通信教育講座とはあくまで「教育機関（わいふ一八九号一知的内職の落とし穴）参照」、本来は仕事をあつ旋しません。ただ、翻訳の講座の場合、その多くは翻訳プロダクションをも抱えていますから、受講生に仕事をあつ旋する背景は持っています。

現にA講座では「うちの資格試験上位合格者には仕事口を紹介している。ただし、クライアント（企業や官庁など）が試させて、気に入った者にだけ仕事をさせるから誰でもというわけにはいかない。仕事量はアルバイト程度が多い」、B講座は「実力ある人は受

講中でも仕事を回す」、C講座は「翻訳もううちの商品」です。優秀な人をスタッフにする」と一応は修了後の仕事はあるといいますが、残念なことにその人数や収入については企業秘密と断られました。私の調べでは和訳は四百字詰原稿用紙一枚八百円から千円が相場です。

ある通信講座の教務主任として、五年ほど働いた経験のある三田和美さん（仮名）は、「学生時代英語が得意だったというのは、理解力があつたということでしょう。プロの翻訳者には、誰でもが読んでわかる「表現力（英・和両方の）が問われる」といいます。そのためには「日本語の文章力」も問題になります。クライアントの希望に添った翻訳をしなければならぬプロを目指すには、読解力とともに表現力。これについて自信はありますか？

翻訳は年齢に関係なく続けられる仕事です。最近では地方でも海外取引をする会社が増え、周辺に語学力のある人が少ない悩みがあつて、都会の翻訳プロダクションなどにはるばる依頼してくるそうですから、あなたの地域にもそういう会社があれば直接訪ね、

自分を売り込むのも一つの手です。

三田さんもちつて語学を生かして働こうと探していたとき、新聞で、「フリー翻訳者募集」の広告を見つけて応募、実力を認められて通信講座の添削者、教務主任と進み、いまではある企業の役員秘書という立場で、毎日英語を生かして働いているのです。

千葉県柏市のSさんは、「わいふ」古参の読者。四年生大学英文科を卒業して結婚しましたが、十年前翻訳で身を立てようと科学技術系の通信講座の「特許明細書作成技術部門」を受講、修了後「科学技術翻訳士」の一級を取得してこの協会に登録しました。

まもなく協会を通して特許事務所から依頼があり、張切って仕事をしたのに、相手が支払いい日を守らない、未払いなどのトラブルが起こり（いまだに未解決）、協会からの仕事は受けないことになりました。その後工業雑誌で探した特許専門の翻訳会社に応募、トライアル（試訳のこと）もOKとなり、現在までその仕事を続けています。

原稿は郵送で届き、締切は一週間から十日

前後。A4版25行の和文英訳で二千七百円、

一か月の翻訳量は百枚平均です。特許出願の書類や広報に掲載するための発明要旨、詳細説明、改良事項、実験データなどを英訳します。

一日に六〜七時間仕事に当て、下書きをした後タイプで清書する。周回からプロ級と折り紙のつくSさんでも「頭の中で翻訳し、そのままタイプ」は難しい。そのため納期前は午前三時まで働くこともあるそうです。

一般常識や少々の勉強では補えないほど、専門的知識が必要で、ときには国会図書館まで出掛けて行って調べたりし、適切な翻訳を心がけています。「家でできる仕事ではあるけれど、座ったままではやっていけない」とSさんはいいます。

通信教育講座にかかった費用十万、このほか科学技術系の辞典（複数）や参考書購入に約十万。いま勉強のため月々購読している雑誌「工業英語」は年間七千二百円、原稿返送用切手、英文タイプ用紙、事務用品すべて自己負担。それらを差し引いた手取月収二十万

平均になるのには、講座修了してから七、八年かかったということです。

「仕事は自分で探して」といわれたそうですが、私もそれが当然だと思っています。いくらい講座を受講し、実力をつけても、最後まで面倒を見てくれるところはありません。その意味で三田さんとSさんがしたように、新聞や専門誌の求人欄から「翻訳者募集」を探し、片っ端から応募したらいかがですか。毎日見ていると結構求人が出ています。

これは翻訳業界だけでなく再就職全般に使えることで、私は皆さんに「百社応募」を勧めています。「えっ？」と驚くかも知れませんが、その覚悟でやった方は大抵十社前後で仕事を手にしているのです。

社会関係の実務翻訳を学んでいるとのこと、今の職場に「翻訳ができる」と働きかけてみてはどうでしょう。初めから「名訳は難しいけれど、その気であればやがてプロへの道も開けるかと思っています。」

どうぞ頑張ってください。

サークル だより

船橋周辺サークルだより

十一月十一日、千葉サークル初の集いは、延べ十一名の参加があり、誌面について活発な意見交換がなされた。最近では路線が一面的になって主に三十代を中心とした目の前の話題に終始している感が強い。とはいっても、友人に見せた場合、塾や親子関係云々といった内容に親しみやすさを感じてもらえる、

という面も否めない。しかし、こういう類のことはほんのいつときのもので、このリズムにのれる年代の読者は増えても、長い目で見れば支えとして弱いのではないか。あることにどう対処していくか、という情報交換も必要だし、実際に役立っているのも確かだが、それと同時に子供を育て上げた人、人生を逆算して考えら

れる人の手記も、もっとあってもいいのではないだろうか。日常から離れた生き方の問題として、幅広い年齢層の確保ということから

たとえば、成長した子供と社会との関わり、適応の問題、親の目から見たこと。また、長い結婚生活の道程で感じたこと。個人レベルの愚痴から脱皮して、結婚の形態の根底にあるものを掘り起こすといったことを皆で考えていけないだろうか。情報過多の時代にあって、目先のことにとらわれず、遠くにある人生の一点を見定められたい……と願う。

発言できる人はもとより、一人一人の女の声なき声を方向づけて大きな声にしていけたら素晴らしい。これは読み手と同時に書き手でもある我々の明日への課題でもある。

(山田淳子記)

あなたが日常の中で感じるさまざまな思いを、心ゆくまで語り合える人を持たないとしたら、夫や子どもと暮らし、外では人の洪水の波にもまれる生活をしながらも孤立していたら、胸の中に何かがたまり、息苦しくはありませんか。

自分の考えに耳を傾け、ともに悩み、喜んでくれる人がいたら、少なくとも、今よりは心豊かな日々があるとは思いませんか。あなたも仲間になって、歴史の線上で、現在の証言者として、「自分」の記録を書いてみませんか。

私の甘い(?)誘いの言葉に、幾人かの人がのってくれた。その一人、山田さんの発案で、交流会と「船橋周辺サークル」が誕生した。次回は二月末の予定、新しい方どうぞ!!

(森本邦子記)

◆連絡先 山田淳子 Tel〇四七四
一九一〇六七六

「東アフリカ野生動物」の旅

大阪府岸和田市

小出 久子



セレンゲッティ国立公園のサバンナ

あこがれのサバンナ を眼前に

初めてサバンナを目にしたときの感動は忘れられない。

何だか知らないが身体の内側からつき上げてくるような興奮で、震えが止まらない。

むやみとカメラのシャッターを押し続けたことを覚えている。

——とにかく写真をとっておかないと——
という思いがいっぱいであった。あつという間に消え去ってしまうと思ったのであろう。

日本でならいつもそうだ。はやくとらないととり逃がしてしまう、いつもせかされた思いがある。

なんてことはないのに。ここはアフリカ、サバンナ。一週間、車で走り続けても、毎日毎日目にしたのはサバンナの風景ばかりであった。

しよせん島国日本人のあわて根性は、



アフリカ象の群れ

トゲがいっぱいつき刺さっていた。
地平線上にキリンが十頭、シルエット
になって並ぶ様は、

サバンナ！

と叫びたくなるほど雄大であった。

ヘビクイワシやコーリンバスターの大
型の鳥たちが、平原にとりすまして立っ
ている姿は、いかにもサバンナの住人と
いう風情であった。

蜃気楼のたつ昼下がり、エランドの優
雅な群れが歩いていく。

その前方にはヤシの木々が茂り、本当
にオアシスのように見えるから不思議で
あった。光のイタズラとはいえ、大自然
の魔法を見るようであった。昔の旅人た
ちが、この蜃気楼を追ってどこまでも歩
いていった話が現実となって見えた。

シマウマが草を食む姿からは、いかに
ものどかなサバンナの生活を連想する。

写真や絵の中にあるような気分であった。
シマウマのシマ模様は、一頭一頭が全
部異なっているという。動物学者が調査、

研究のために個体識別を行なう場合、こ
のシマ模様で見分けるといふ。人間の指
紋と同じようにこのシマ模様は全部ちが
っている。

これほどの大群のそばにいるというの
に、糞のにおいも、獣特有のにおいもし
ない。

そういえばアフリカ大陸へ足を踏み入
れて、特にサバンナの平原ではちっとも
ニオイがしないのであった。一面の草食
獣の群れの中になると、鼻をつくほどの
ニオイがたちこめているはずなのに。不
思議であった。

アフリカにはニオイがなかった。

時間と距離

やっと来た！

待望のかい群団！

十数頭のアフリカ象の群れがブッシュ
から姿を現わし、こちらへ向かってきた。
われ先にとサファリカーの天井から首
をつき出した。カメラを構えて待つ。

そう簡単に消えはしない。

トゲのあるアカシア類の木々の間から、
マサイキリンの茶のギザギザ模様が浮き
出ている。口の周辺には十センチもある

胸の鼓動が激しく打っていることを意識する。

黒いアフリカの象たちは、私たちの乗っているサファリカーの前の水たまりを



一人でテクテク どこへ行く

めざして歩いてくるようだった。エンジンを止めて静かにじっと待っている。

一番前を歩くリーダー象。一段と大きく堂々としている。前から後ろへ、さつと目を移していくと、

いたいた！

最後部に一つ、小さくて黒いかたまりがくっついて動いてくる。子象である。

象の群れはメスたちとその子どもたちである。

水たまりに到着したのから順番に、長い鼻を使って全身に水をかけ、泥をぬたくる。

ガシャリ、ガシャッと絶え間のないシャッター音が、静寂の中で大きく響き渡る。

十二頭の象が水浴びを終えるまで一体何分であったのか？

ほんの数秒のようにも思えたし、一時間くらいだったのかもしれない。さっぱり分らなかった。時計など見ていた阿呆な奴は、さすが誰一人としていなか

ったのだ。当然誰も知りはない。

そして私たちの車から象まで、一体何メートル離れていたのだろうか。

これも全員マチマチの価であった。

サバンナというとても広く広い空間は、時間や距離といった人間が考え出した尺度を超えてしまうものかもしれない。そんなチッチコマイ（小さい）もので測れるものか、と嘲笑されているような気がしたものであった。

しかしこの地で生きている人々は、そのことを十分に心得ている。太陽とともに目ざめ、太陽に従って眠りにつく。どこまで行っても同じ光景の続く中を、マサイの男は黙々と歩いていた。何キロ、何時間、なんていう尺度がどんな意味をもつというのか。目的地に着くまで歩くのみだ。

サバンナの生と死

「見てっ／ ほらあのライオン、ひどい格好してるわっ／」

私は大きな声で叫び、車の上からそのライオンを指し示し、ゲラゲラと笑いこらげてしまったのであった。

年老いたライオンはたてがみもほとんど抜け落ち、骨盤やあばら骨がくつきりと浮き出していた。

長い舌を出し、ゼゼエと息をするのがやっとで、太陽の照りつける大地に横たわっていた。息をするたびに、テントがしぼんだときのように、皮がびったりと骨にはりつき、肉が全くついていないありさまを強調していた。

今、まさにこのオスライオンは生命が消えつつあるのだ、と気付くのにそう時間がかからなかった。

何ということをお走ってしまったのか、私は後悔の念でいっぱいであった。できることなら老ライオンのところにかかけよって、謝りたい気持ちであった。

同時につき会った若者ライオンたちを思い出していた。

四頭の若者ライオンは首を並べて水た



死にかけライオン

まりの水を飲んでいった。

近づきすぎた私たちの車に向かって、一頭が威嚇の声を上げた。いっせいにその精かんな顔がこちらを見た。

直径二十センチはあると思われる四本の足はしっかりと大地を踏みしめていた。ぐわっ／＼と開かれた口から鋭い犬歯がのぞいた。両目は赤みがかった黄金色で、燃えているように見えた。ピロードのような艶をもつ黒かつ色の毛がつややかに光を放っていた。

美しい／＼

ライオンがこんなにも美しい動物であるとは知らなかった。

たった三メートルしか離れていないところから、野生のライオンの美しさをたっぷりと味わわせてもらった。

野性に生きる厳しい美を秘めたその肢体には、一分のムダもなかった。

すっかり見とれてしまっていた私たちは、ライオンの威嚇の怖さを忘れていた。

死にかけたライオンにも彼らのような時代もあったろう。メスと子どもたちをひきつれ、オスとしての本分を発揮して、華々しく、力強く生きた時代もあったであらう。

死は人間にとっても動物たちにとっても、決してきれいなものではない。老いた肉体を抱えて死を迎える。

このサバンナの中で、こんな状態になりつつもまだ息をしている老ライオンが不思議であった。とつくの昔に餌食になっていたと思われるのに。

でもその生も時間の問題であらう。もう一夜ともつまい。

「かわいそうだわノ 見ていられないくらい。病院へつれてってやりたいわ」

若いOLの一人がつぶやいた。なんたって動物好きの人間たちの一群である。誰もが同じ思いに耽っていたであらう。

しかしまた、誰もが同じく、サバンナの死について、考えていたにちがいない。サバンナの獣たち、彼らは野生に生き、

野生の中で死を迎える。それが野生の掟であり、彼らの一生であり、彼らにとつて一番幸福な死に方である。動けなくなつたとき、エサがとれなくなつてしまつたとき、それは彼らにとって死のときなのだ。

自然の中で生き、自然のままに死んでいく。これが彼らの自然の死なのだ。

人間の一時の感傷や感情で彼らに手を加えることは、彼らを最も傷つけるやり方だ。人間の身勝手というものだ。

自然は自然が一番よく知っている。バランスをつねに考えている。人間が小賢しい知恵を働かせたところで、自然を汚していくだけだ。

無言の中でサファリカーはエンジンを始動させていた。

レンズの目

映画やテレビでみる映像のサバンナと、実際に肉眼にうつるサバンナのなんとちがっているのか。

実際サバンナの地の上に立つて眺める空間の広がり、決してレンズの目ではとらえ切れるものではない、ということを実感した。

肉眼でみる。

この実証こそ、ない「ひま」、ない「金」を都合してはるばるアフリカくんだりまで足を運ぶ「価値」なのだ。

セレンゲッティ国立公園（タンザニア）のはいて捨てるほどのヌー（ウシカモシカ）の一群の移動は、そのスケールの大きさはこの肉眼で感じとるだけの価値はある。

その迫力たるや、まさに「地球規模」の大きさである。

どこまで行っても黒い点、ヌーの海であつた。それが視界、三百六十度、どこを見ても、地平線上までずうっと果てしなく広がっていた。黒いヌーの海であつた。サバンナのご真ん中に黒い海ができたようであつた。

野生の中にあつて「弱肉強食」の掟はいかにも悪者にされている。しかしこの「思い」はレンズの目を通してこそ感じさせる「思い」である。

野生動物についての番組、テレビや映画の映像には必ずといっていいほど肉食獣の狩りの場面が登場する。ライオンがインパラをヌーをねらつて捕らえるまでのシーンがある。

あれはカメラの目を通すからこそ残酷に見える。そこだけが必要以上に強調され、自然の大きな空間の中の「生」の一言であることを忘れさせてしまう作用のせいである。

実際にシマウマを食っているライオンや、インパラの子をひきさいて食っているヒヒを目にしたが、大自然の中にあつてはそうとりたてて言うことでもない。それも自然のなりゆき、「生」のありようなのだ、すんなりと受け入れられる感覚になつてしまつた。

動物を識ろうとするとき、彼らの生き

ている空間をこの目で確かめられない限り、彼らを理解していくことはできないと思ふ。

レンズの目は確かに便利である。しかしその便利さに肉眼を忘れ去つてはならないと思う。

バラバラ(悪路)の 国際会議

悪路のことをスワヒリ語ではバラバラと言う。

十二月末というのに、今年はまだ雨期が残っていて、舗装などされているはずのない公園内の道は、ジクジクとしてぬかるんでいた。

オンボロ車のランドローバーのタイヤは、四輪駆動というのにタイヤはツルツル坊主。ブレーキだけはかううじて効く。シートは破れて中味が見える。ドアは走行途中でも開くというシロモノであつた。このすさまじい車に乗って、タンザニア、ンゴロンゴ動物保護区の公園内へ下り

ていく。ここはちょうど阿蘇山を大きなスケールにしたような地形であり、カルデラ湖のある近くまで、数キロ下つていくのであつた。

その山道が問題であつた。

シートの枠にしがみつき、足は踏んばっていないと、いつ外へ放り出されるかもしれない。

タイヤが通る二本のすじだけが深く溝になつて来ていた。ちょうど田植え期の泥田んぼのようであつた。

そんな泥んこ道を走るのである。むやみとエンジンをつかして運転する黒人ドライバーのお兄さん。とうとうぬかるみの中へタイヤが滑りこんでしまつた。

やれやれだっ！

うんざりした私たち、仕方なく泥田の道へ下りて後押しである。

ゴウ！

というかけ声とともにドライバーがエンジンをふかし、それに合わせて私たちは力いっぱい車を押し続けた。しかし足元

はヌルヌルで力が入らない。タイヤは空転し、周囲の泥をすごい力で回転力ではねとばす。私たちは全員頭から顔、全身に泥をいっぱい浴びる有様であった。

やっと這い出したランドローバーに乗って走り始めた。

が、つかの間、止めをさされることになった。

しばらく走ると、でっかいタンクローリーが泥に足をとられて、道幅いっぱい横づけになっているではないか。これではどんな車も通れない。なんとたってタンクローリーを本来の位置に戻さなければならぬ。

私たちの車の後には続々と車が数珠つなぎになってきた。

どうした？

と叫んでは車を降りてのぞきにやってきた。たちまち数十人の人ばかりとなってしまうた。

白、黒、黄色の種々の人種が混じり、道はすっかり国際会議場になってしまっ



ドロコ道をひっぱり出す

た。スワヒリ語、英語、ドイツ語、フランス語、ヒンズー語、アラビア語、日本語が飛び交っていた。

どうせ私などは役にも立たない、と傍で一部始終を見守ることにした。どうせ暇だからとカメラを向け続けた。

その間、延々二時間。男たちはロープを引っ張りもう泥だらけであった。

イラストレーターのWさん。やけっちなになって叫んだ。

「なんでアフリカくんだりまでやってきて、土方やらされなきゃなんのだ！」すぐ横のブッシュの陰にはブチハイエナの姿が見えかくれしていた。

生命の危機感

今しがたライオンの一群が、口を真っ赤に染めてインパラを食っているところを見たばかりであった。その横を、ブッシュの陰からクロサイ母子が顔を出した。またまたわがオンボロサファリカーは、ぬかるみに足をとられ、タイヤは半分以



羽を休めるハゲワシたち

上かくれ、車体は左に大きく傾いてしまったのだった。

どうしようか、と言うまでもなく、全員降車して後ろから押す以外に手はない。黒人ドライバーがむやみとエンジンをふかすので、タイヤはのめりこむ一方であった。すぐ傍に生えている草をひっこめ、枯枝を集めてはタイヤのすべり止めにした。

誰もが気が気ではない。

ここはナイロビ国立公園内である。しかも半径百メートル以内にはさっきのライオンたちやクロサイがいる。きっと彼らは私たちに気づいているはずであった。当然予測されるアクシデントに対応すべき道具の一つも積んでおいてよさそうなものなのに……。次第に腹がたってきた。

土のかけらも、毛布のボロの一つさえ用意はない。とうてい日本人の感覚では、プロのドライバーの仕事ぶりとは思えない。

ライオンやサイがとびかかってきたらどうするんや？

私たちは真剣であった。「食われるかもしれない」という身の危険を誰もが肌で感じとっている。

急がねば……。次第に焦り始める。

イラストレーターのWさんが、その腕をハンドルにも試してみても、やっと脱出することができたのだった。

「グッド・ドライバー」

本職のドライバーは無邪気に誉めたたえた。

「何がグッド・ドライバーだっ！」

一斉に声が出てしまった。

ブッシュが開けた場所に、頭部がはげたハゲワシの群団がその茶かっ色の羽を休め、上昇気流を待っていた。いつ見ても気持ちのよくないヤツらである。

それでもじっとみつめていると、多少なりとも愛きょうのある顔つきかも、と思われるようになった。

どうみても五十羽はいるだろう。

車の足元がどうもおぼつかない。

「あいつたちの昼めしになつてはかなわん」

早々にUターンしてよい道を走り出した。

彼らが一斉にこっち目がけてとんでくれば、ひとたまりもありますまい。全員骨さえ残らず、きれいさっぱりと彼らの胃袋へおさまるだろう。

動物たちとのつき合い方を知らぬ人間は、食われても仕方なろう、と現地の人は言うだろう。彼らは動物たちには決して近づかない。

日本人の感覚では、動物といえど動物園の動物である。「かわいい」などと口走っては猛獣にさえもすぐ手を出したがる。

サバンナに生きる野生動物たち、つまり本物の象やライオン、チーターは「かわいい」などと表現できるものではない。両の目は赤々と黄金色に輝き、つやを帯びた毛並の美しさは恐怖を与える存在

でもある。

黒々とそびえ立つ真っ黒い巨体のアフリカ象にぶち当たられたら、人間のちっぽけな肉体などふっとんでしまうだろう。本物を眼のあたりにした迫力は、生命の美しさと尊さを感じさせる。同時にサバンナの中で人の力の弱さをまざまざと思い知らされてしまうのだ。人は完全に動物たちに屈伏する。車という文明の利器を除いてしまえば、私たちは彼らのエサでしかない。

アフリカンバッファローの大きな角が白骨化して、あちこちにちらばっている。今、くわれてしまったばかりのヌーのしっ尾と皮が残っている。

ここで車をなくしたらという恐怖感と、それもまたよからうという自然感覚の、奇妙なとり合わせ感覚が混在する。「動物に食われて死ぬ」などという危機感は、日本では決して味わい得ないものであった。

マサイ族は死者をサバンナに放置し肉

食獣にまかせたといわれる。この大自然の中にあつては誠に合理的な生活の知恵である。自然との一体感、土に還っていく肉体、それもまたうなずける風習である。とつくづく感心した。

動かなくなったわが肉体はハイエナの胃袋に入り、翌朝ウンコとなってサバンナの土の上のころがっている。それをフンコロガシなどの昆虫がきれいさっぱりと掃除してくれる。土のこやしになったわが肉体のかげらは、動物たちを養う植物に吸収されてしまう。

これもまたいいのではなからうか。土から生まれ土に還っていく。

ソーン・トゥリー の樹の下で

ナイロビ最後の夜。

いよいよ明日はアフリカ大陸とお別れである。サファリもおしまいなのだ。ナイロビの夜は静かであった。

ちょうどホテルの前には、大きなソー

ン・トゥリーと呼ばれているアフリカ特有の木が植えられている。食事を終えた人は、ナイロビの夜を素肌で感じながら、おもいおもいの話をして楽しんでいた。

私たち気の合った四人も、ウイスキーを片手にアフリカ最後の夜を語ることになった。

マンガ家の卵のWさん。

「ぼくはねえ、どうしてもブチハイエナを主人公にしたマンガをかきたいと思ってる。タイトルも決めてる。『サバンナのなかまたち』というマンガ。大体の構想はできてるが、もうひとつ、やっぱり本当のブチハイエナに会ってその行動を見ないとねえ。」

いくらマンガといったってウソはかきたくないからね。ハイエナって知られてるけど、本当は頭のいいかしい連中だからね」

独身OLのSさん。

「ウーン、私はねえ、アフリカへどうしても来たいって思っていたわけではない

の。今までエジプト、ヨーロッパ、アメリカと行ってきて、今回なんとなくアフリカへ行ってみようかなって思ったからね」

独身OLのBさん。

「友だちがタンザニアのダルエスサラームにいるの。彼が日本に留学したときに友だちになったんだけど。どうしてもダルエスサラームの街が見たかったの」
このBさん、私たち一行と数日離れ、単身初めての地タンザニアへ飛び、ダルエスサラームの街を歩いてきたのであった。そして再び合流して、サファリへと出かけたのであった。

他の三人に比して、私だけが既婚者であった。

「アフリカへなど旅行するんだから、きっと独身だと思っていたわ。そしたら結婚指輪をはめてるから、一体どういう人かと思っていたわ」とSさんとBさん。

「ふつうはそうよね。お正月に家族を放りっぱなしにして海外旅行に出るなんて

ね。どんな奥さんでありお母さんなんだと思うよね。しかも二週間という長い時間。

でもね。私は一応夫も子供も家庭もそろっている。だからこそ、こうして出か

けてくる意味があると思うの。

だって独身だったらこんなこと簡単なことよ。お金と暇さえあれば実現できることよ。

でも既婚者はそうではないわ。何より

も『家庭』のことを考えてしまう。妻であり母であり、家族の一員であることをね。世間一般の目もやさしくはないわ。だからこそ、こんなことをやりとげることが意味をもつわけよ。

まあいわば自分への挑戦よね。

仕事も家庭も放り出して、ときには自分一人、人間を考えてみる時間も必要なのよ。こんな大自然の中に自分一人を放り出してみるのも、何かをつかむきっかけができるものよ」

キザなセリフと思いながらも、私は自身に言いかけせるように喋っていた。

そう、何よりも自分への挑戦である。

日常のすべてから脱却してのアフリカ旅行である。四十歳になった今こそまた再び「アフリカ」へ行きたいと思う。これからいつまで体力が許すかは知らない。でも挑戦し続けたいと思っている。

次はルワンダのマウンテンゴリラを観に行きたいとも考えている。こうして次のアフリカ旅行のプランは進んでいる。



マサイの牛追い

わいわいガヤガヤ

病人と病名

大阪市 匿名

Aさんが胃を全摘したことを聞いた。

自覚症状もないままに会社の集団検診で異状が発見され、即手術に及んだ人だった。

昨年の夏、息子が入院したときの同室の方で、つい数か月前には、外来で逢ったそうで、他病棟に実習にゆく途中で、ほんの二、三分の立ち話であったが、同室だった他の患者さん達もいて、〇〇病室の同窓会みたいだと懐かしがって元気そうだったという。

手術後の回復も早く、食欲も旺盛で、お菓

子や果物、カップラーメンまで、自分が食べるたびに、隣のベッドの息子に食べる食べろとすすめるほどであった。

六人部屋だった病室は四人の人が癌患者であった。本人達には胃潰瘍だと伝えられていたが、「胃が悪いのに何で脾臓まで切られるのか」と怒る人もいて、誰もが自分の病名を疑っているふうであった。

教授回診のときに研究医とやりとりされる専門用語が気になるらしく、執拗に診察の後で訊かれ、困惑気味だった息子のようすを思いついて、医学知識も未熟な若者とわかつてはいても、医学生であるというだけで縋るように質問を向けてきた人達だった。死への戦きと生への執着から、疑いを否定させずにはい



られない切実さが伝わってくるようであった。数度の手術に耐え、辛い治療にも菌を食いしばって頑張っていた少年もいた。華奢な体で不眠不休の母親は、二か月の命と診断された一人息子を看病して半年目だった。生きる望みを持たせたことが、結果的には壮絶な病魔との闘いを強いることにつながっていると思えば、心臓をえぐられる心境だといった。だが、日進月歩の医学に希望をつないで、一日でも多くの延命を望み、もしかして、明日にでも新薬の発見があるかもの期待を捨て切れないから、頑張らせるしか仕方がないとも言った。そして、息子の退院後一か月して少年の訃報を聞いた。最後まで治ると信じ込んで逝った少年に、今は病名を知らせないで良かったと思うしかないと話していた。

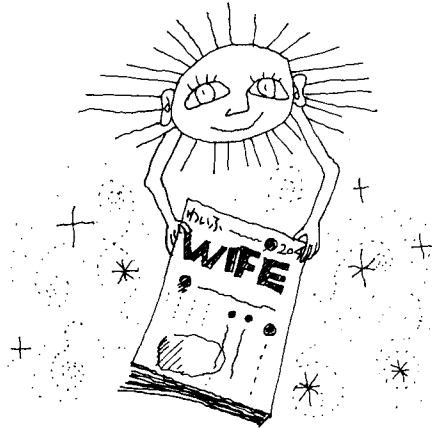
痛を本人に告げるか否かが論じられて久しいが、私自身は知りたい思いと反対の気持ちで交錯している。最近では初期の癌は患者に告げるケースが増えているそうである。アメリカでは子供にまで癌であることを告げるといわれるが、国民性の違いもあって、それを即日本人に適用するには無理があると思う。

健康体のときにはぜひ知らせて欲しいと願っていた人が、癌におかされたとき疑いを持ちながらも、どうか否定して欲しいという心の変化をみせることもある。また、同僚達が他患者のレントゲン写真をみせたりして必死で隠そうとしてくれても、すぐ病名を診断できる医者という職業を、このときはどうらめしく思ったことはない、といわれたある教授の苦悩も、癌への恐怖を語っているように思える。

少なくとも私のお逢いした患者の方達は、病名を正確に告げられなかったことにより、心の平静さを保っているふうであった。その内の一人であったAさんの、あまりに早い再発に癌の恐ろしさを突きつけられた思いでいる。

“わいふ” 継続の記

埼玉県鴻巣市 鈴木 洋子(38歳)



“わいふ”二〇三号とともに、振替用紙が同封してあった。

もう今年かぎりではめようかな。いやまてよ。この二〇三号を読み終えてからでも遅くないと思いついて、継続中止の要請を日延べ

した。

“わいふ”を手にして二年になるが、毎回頭にカチンとくること。それは「働かざる者女にあらず」式の文がひしめいているからです。それに「家の悪ガキうんぬん」の文。

四歳の次男を交通事故で亡くしている私には、皆さんが「ギャーギャー」言っているのだけでも、貴女方が幸福な証拠なのです。よ、いつも斜にかまえて読んでいます。そんな私も、来春、三十九歳にして再度、子育てに挑戦。次男のときのような失敗（専業主婦でありながら、交通事故に遭わせた）をくり返さないためにも、今度こそ思いでいるのです。

出産とともに、また目のまわるような忙しい日々となるが、世の中への目を失わないためにも“わいふ”を継続して読もうということになった次第です。

子供の一周忌に出しました“寛史ごめん”の本を同封します。読んで下さる方ありましたら幸いです。（読みたい方は編集部までお申し出下さい。お貸しします。編集部）

チョットさんの思い出

兵庫県宝塚市 野村 純子

チョットさんが亡くなって七年になります。

私がおそろおそろ脳外科病棟の六人部屋に足をふみ入れて、まずギョッとなったのがチョットさんの姿でした。普通、髪を剃って開頭手術をしても、術後三か月もすれば五ミリほどの髪がまたビッシリ生えて、傷跡など隠れてしまうものですが、チョットさんは術後も放射線治療を受け続けられたため、髪が生えずに、手術の跡も生々しく「こは紛れもなく脳外科だ」という現実を印象づけるのです。

私はチョットさんの隣のベッドになりました。ここはチョットさんの「チョット、チョット」がうるさくて耐えられなくて、最後に一つ空くベッドなのです。その人はその「チョット、チョット」がもとで、皆に「チョットさん」といわれているのです。

チョットさんには大変優しいご主人がいらっしやって、たしか隔日に泊りで看護にみえました。二十歳前後の大柄な娘さんもあって看護婦さんとも仲良く、この方もしばしば看護にみえました。その他に中学生の息子さんと、結婚されている長男もあって、みんな自分たちの人生の中に突然入ってきたお母さんの大病と闘っているようでした。

当時チョットさんは小床状態で、リハビリ訓練を主にするという毎日でした。ベッドの上に起き上がって、パンツをずらして、ベッドの横の簡易トイレに掛けて、用を足して、パンツをあげて、ベッドによじ登って、再び寝る。これを病棟の看護婦さんたちは、まずチョットさん自身にやらせようと必死でした。

しかしチョットさんが尿意をもよおして看護婦さんを呼んで、看護婦さんが簡易トイレを用意しても、チョットさんが用を足すまで優に十分、ときにそれ以上かかることがあります。看護婦さんにちよつと手を貸してもらおうと「チョット、チョット」を連発するチョットさんと、鬼軍曹のような看護婦さん、

また優しくてきびしい保母さんのような看護婦さん、それぞれのやりとりを私は毎回息をこらしてカーテン越しに聞きました。

だいたいチョットさんは言語のほうのリハビリも必要なようで、呼びリンを鳴らして「ハイどなたですか」「チョット」、で看護婦さんには「チョットさんであることは分かるのですが、看護婦さんは「チョット」では分かりませんよ。だれですか」と応答して名前が出るまで根気よく応対します。一事が万事脳外科ではリハビリの材料でした。

しかしチョットさんにとって最大の関心事は「下のそそうをたくない」この一点のみ



でした。だからしょっちゅう「チョット、チョット」と呼びました。呼んでもすぐには用が足せないのが分かっていたので、よいいちょっととした尿意でも呼びました。そしてやっとの思いで簡易トイレに掛けても、そのときには尿意はどこへやらということもあって、忙しい看護婦さんを怒らせました。そうするとよいいチョットさんの気がかりは尿意に集中するようでした。

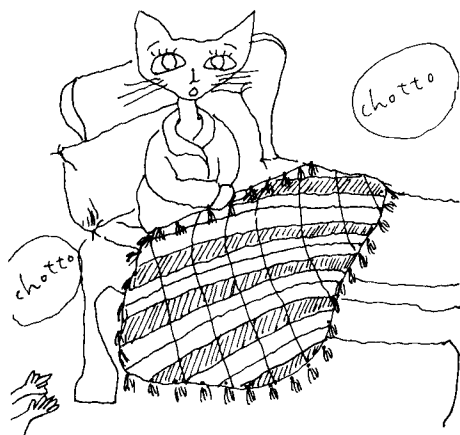
ところが優しいご主人が看護されるときは、もうまったく「チョット」一言で万全でした。さすが二十年以上連れ添ったというか、チョットさんの「チョット」のちよっとした違いにもすぐ反応して、お茶を飲ませたりミカンをむいたり、トイレにさっと掛けさせたり体を起こしてやったり、もちろん廊下にいるご主人を呼ぶときも「チョット」です。新婚さん顔負けの全身全霊をこめたお願いの「チョット」でした。そしてご主人相手には最少限の「チョット」で、しかも「チョット」一語で用が足りるチョットさんでした。でもそのことはかえってチョットさんのリハビリを台

無しにしていました。

ご主人が帰った後のチョットさんはまた一からやり直して、前にも増して看護婦さんの手を借りようと「チョット、チョット」と言い、看護婦さんのがまん強い指導がくり返されました。娘さんは看護婦さんに言われて、看護婦さんがやるようにチョットさんの訓練をしました。しかしこれにはチョットさんは大きなダダツ子のように癪癪をおこして怒りました。結局チョットさんはご主人の看護の日を心から待ちのぞみ、ご主人への依存心をどんどん強めていきました。

チョットさんの少し前に、母一人子一人の患者さんが、やはり同じように手術をしたが、機能を失った、言葉も忘れたという状態でありました。しかし中三の一人息子が、高校をあきらめなければいけないのかと言って泣くのを聞いて発奮し、言葉もとり返し、機能も回復して立派に退院していったという実例があります。

看護婦さんたちは今さらながらに病気の快復にとって意志の力の重大さを実感し、手術



前の私に話しました。他の臓器とちがって、脳は手術で悪い所をとりのぞく医師の仕事のその後に、その脳を使うという患者の意志が働かねば、再び元の働きをとるもどきない。何事でも自分がやるんだと思うその心が、やがて本当にそれがなされるということにつながる、大きな第一歩なのでしょう。

チョットさんはそれでも少しずつ上達し、車イスでリハビリセンターへ行って、平行棒を持って歩く訓練までするようになっていました。ときはちょうど暮れ、家にベッドも買ったし、病院は簡易トイレを貸してくれるし、

この分だとお正月は家に帰れそうだと、周囲のみんなが喜んでいました。特にご主人は「正月は久しぶりにゆつくりできそうだ」ともう絶対一時帰宅を決意していらっしやいました。

でもチョットさん自身は帰宅をひどくいやがりました。「家には手もいっぱいある」とご主人。でもきつとチョットさんにとってそのことが「いや」の理由だったのでしよう。

下のそそうをして嫁さんにこっぴどく叱られたのよとか、噂がヒソヒソ流れました。お正月休みには病院も家へ帰れる患者さんは帰すのでガランとし、看護婦さんの数もへります。

チョットさんもワゴン車でむかえに來た長男と、簡易トイレと車イスまで病院から借りて、一家団らんの夢に心うかれたご主人と楽しいお正月を迎えるべく、家に帰っていったのです。ところがチョットさんは休みあけに重体で病院に戻ってきました。そして二月になる前に亡くなりました。結局、自分でこれからも生きていこうという気持ちがなくなっただけにちがひありません。

「ちょっとすみません」って健康な人でも使う言葉です。体が不自由になると、ついつい多く使いがちな言葉です。「ありがとう」をつけると、たいいていの人は「ちょっとすみません」でいろんなことをちょっととしてくれます。自分でするよりやっぱり楽です。「ありがとう」と言うと、してくれた人は満足に、優越感からいい顔で「いいええ」なんて言うときもあります。だからちょっと人にしてもらってもいいような気にもなります。

また特に家族の者には、「ちょっと、その〇〇取って」などとよく使います。家族には甘えがあつて、「ちょっとしてくれない」と言つてちよつとしたことに怒ります。何でも自分でやる気であれば、その結果に納得もいくし、その続きにまた何をしようという考えも出てきます。「ちょっと、ちょっと」と他人に依存した姿勢は、その人の生き様の反映です。ちょうど同じ年の暮れ、ストーブの横にデーンと座つて家族の者を「ちょっと」でこき使つていて、哀しいチョットさんの「チョット、チョット」の声と姿を思い出しました。

エホバの葬式

栃木県宇都宮市 古沢 涼子

「エホバの証人」という宗教をご存じでしょうか。

代理兼運転手で、遠縁の葬儀に出向き、エホバ風の儀式に参列する機会を得ました。

栃木県南部の田舎道、曲がり道。地図で確かめながら車を走らせました。

「花輪をと電話したら、生花しか受けないって言つてたから、フツウの葬式じゃないかもしれないよ」

との情報があつたので、花輪を目あてにするわけにいかないのが、まず不便な点でした。店のシャッターの一隅をあけて、受付をこさえてあるきります。

花いっぱい玄關から入つてすぐ階段があり、二階へ通されました。襖を外して広げた部屋中に、座布団がしきつめてあります。

奥には説教壇らしきもの。その前に白い布におおわれた棺が、やはり花々に囲まれて、畳の上に安置してありました。

やがて、壇に立ったのは喪主。説教が始まり、あちこちで聖書が開かれます。

「私たちの心をくんでくださって、ありがとうございます。私どもの信じているエホバ神について、少しお話ししたいと思います」

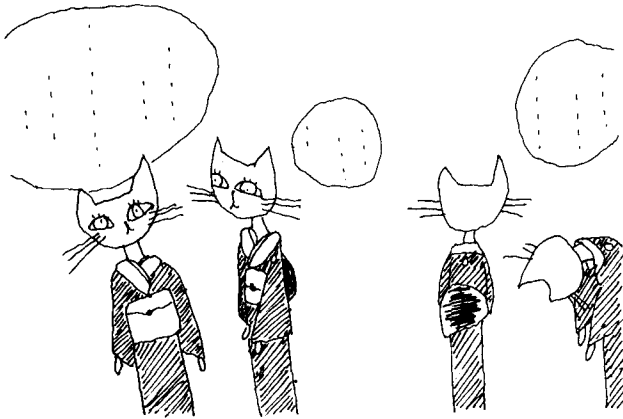
友引だってかまわない喪主と、それじゃあ私が浮かばれめえという親戚筋、そんな葬式きいたこともあんめ、と困る隣組。まとまるまでにはもちろん、すったもんだがあったはずです。

「エホバ神は、死は永遠の別れではないといっています。復活の日がやがてくることをこの聖書に示しています。なんと温かい教えでしょう。」

私たちはいつか、父にふたたび会いたいのです。エホバ神が父を覚えていてくださるようなやりかたで、父とお別れしたいのです」
亡くなったのはおじいちゃん。遺族は、おばあちゃん、跡取り息子にその妻、幼い孫三

人。

エホバ神を信じはじめたのは、この息子が修業中に神様も覚えてきたのが始まりと聞きます。心に添う娘と結ばれ、家族はなんでも心をひとつに、という家でしたから、みんなで信者になっていったのでしょうか。



「父は私たち子供を、わけへだてなくかわいがってくれました」

故人の紹介と賛辞、しばしの別れの挨拶のあと、遺族と参列者が花をささげ、棺は閉じられました。

霊きゅう車に続く貸し切りの大型バスに一同ぞろぞろと乗りこんで、火葬場へ。

待合室ではいろんな話が聞けるものです。

「焼いっちゃまっているのけえ。キリスト教は焼かない人と違うのけ」

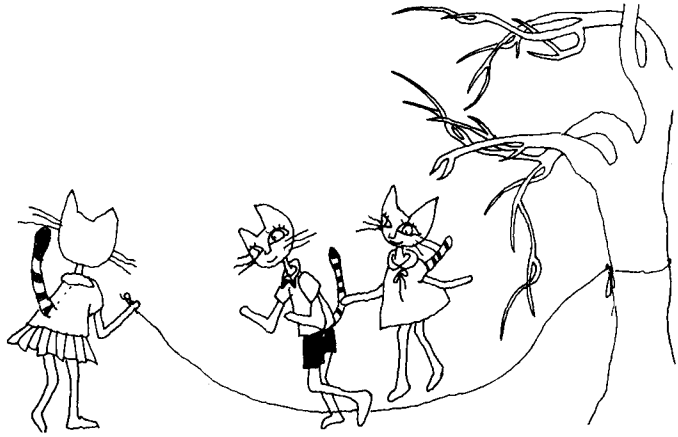
「だいじぶなんだよ」

「エホバっていうのはさ。このごろ新聞に出てる、輸血するより死んだほうがいい、ってやつじゃないの」

「んでも、胃ガンで手術したって聞いたかね。輸血もしたみたいだよ」

「見舞いにいったら、なんだか機械がすごかったねえ。こんな田舎じゃ見たこともないような大きなのがいくつも。病人ひとりのためにかいてくれたんだと」

「店やってっから、医者さまにいっぱい運ん



夜は家族だよな」

「フーッ」

腹がへったというウチの年寄りのため息。

「ポリポリポリ」

昼からの葬式で食事ださないってことあんめえに！ ツマミとジュースじゃ大して腹の足しにはならんが、これしかねえという音。

「大変だったでしょう。よく続けましたね」

遺族の、ほっそりしたオヨメさんに、私からのひとこと。ヨメ同士、他人を看護する立場の者で会話が成り立ちます。

「ええ。でも私は、主人や姑やお姉さんたちがいっしょうけんめいだったから、夢中でついていただけ。」

姑は、一月半のあいだ二度しか家に帰っていないの。お風呂と、着替えに。主人と私も店が終わるとすぐ病院。主人はいつも腰かけたまま眠っていて、看護婦さんが入ってくると夢うつでスーッと体をおこすの。

私は、血はつながってないでしょ。姑や妹

とは手の形が違うからわかつちゃうのね。でもだんだん、私の手でも安心して握ってくれるようになって嬉しかった。男の手じゃダメだっていうの。

もうすこし早く行っていればね。おじいちゃん、お医者さらいだったから。

お医者さまにしかれたんです。俺は丈夫だっていばっているのは、オレハリコウナンダとふんぞり返ってるのと同じだって。だれでも完全な体じゃないって。

でも私たち、もう一度おじいちゃんに会えると信じてますから。人に押しつけるつもりは少しもないんですけど」

「お医者さまもよくみてくださったんですって」

「家族が見捨てたものを、なんで医者が懸命になれますか、といわれました。やはり幾晩か徹夜してくださって。何度も持ち直したから今度も大丈夫と思ったんですが」

「お子さんたち、仲良く遊ぶわね。いとこ同士みんなで七人？ 八人？」

「近くだから、子供三人、毎晩あずけてまし

だんだろ」

「ずいぶん熱心に看病したっていうんじゃないの。つきそいが三人、いつもいたって」

「なんでそんなに？」

「必要なんだとさ。昼間は看護婦もいるけど、

た。もともと、あの子どもみんな幼稚園や保育園に出してませんから、昼間いっしょで馴染んでるんです」

お骨を壺に納めると、新しい墓地に向かいました。日当たりの良さそう、ゆるやかな丘の上です。掘られた穴に、骨箱を葬って、こもり土を盛って、おしまい。
簡素な葬儀でした。

帰りみち、ウチの年寄りの感想。

「ありや安あがりだ！ 花と棺箱と隣組のふるまいしか、かかっちゃいない。坊主を呼ばないだけでも大した違いだ。香典でもうかるかもしれない」

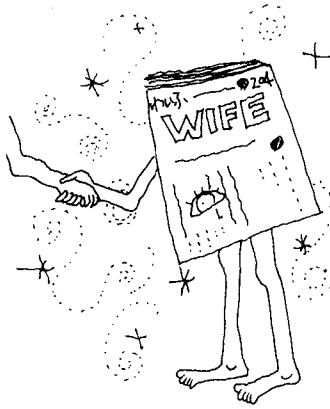
後ろの席から聞こえる吐息があまり切なげなので、空腹のあまり新しい葬式ができれば大変と心配になり、車を止めて腹ごしらえをしました。

ひそかに私の感想。

「子供も年寄りも、食べ物もってあるかなくちゃダメだわ」

もっと早く知れたかった

愛知県豊橋市 つばきはらミナ子



「カンの強い息子が生まれてほしくなく「これが育児ノイローゼか」と思うくらいにイライラが続いた。引越して慣れない土地での生活は、慎重派の土地柄か友達は作りにくく、カルチャーショックも手伝って、辛い毎日だった。」

育児相談電話はあっても、育児疲れの母親の気持ち相談電話はなく「そんな悩みは受け

たことがない」や「長い人生のはんの一瞬だ」といった期待はすればかりである。

いかに産後の肥立ちが悪くても、少しずつ軽くなると、元来書くことが好きな自分をどう昇華させるかなどと考えるようになり、手帳として目に止まった「童話教室」を選んだ。教室が始まると、定期的な外出と共通の話題を持った友達がふえて、子連れではあるが最高の気分転換だった。

同じころ「わいふ」に度々投稿する谷山由美子さんと知り合い、貴誌を勧められた。

本当に有名なかわからない、雑誌が作り上げた有名人や有名店の羅列とか、衣食住のアラカルト三昧の雑誌の陰に、きつと「わいふ」のような本があると思っていた。七冊ばかり借りては読むと、いよいよ思いもつり、定期購読という真正直な恋愛が始まった。「やっと、お目にかかれましたネ」そんな声も聞こえてくるみたいだ。

私の育児疲れは、童話という生甲斐づくりに流れを変え「わいふ」によって今、新たな挑戦状を自分に課してみようと変化している。

地獄のような半年は、確かに一瞬の育児ノイローゼだったかも知れないが、あの時期知り合えたらと思うと残念でならない。知らない土地で話し相手がいないなら、書くことの好きな私だもの、新聞や貴誌に投稿し広く世間と話し合えたはず。書くこともままならないならカセットに吹き込めたはず。

結局は自分で答えを出すしかなかったけど、終ってからでは、もう遅い。

今、育児ノイローゼの方々に、優しい一声をかける何かがあっていいはずノと思った。

老いに向かって立つ

東京都東村山市 長井 淳子

当時、大学受験の勉強中であった私を上からのぞきこんで、母は言ったものだ。

「どうしたの？ その頭」

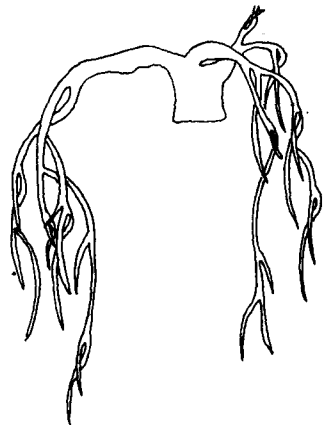
おさげ髪のは、ねじりハチマキこそしないものの、世界史の年号、メンデルの法則、拋物線、英単語などなど手あたり次第に頭の

中につめこんでいたので、頭もオーバーヒート気味で、髪の中もむれていたらしい。たまたま手に持っていたのが両端をけずった青と赤の色えんぴつ。無意識のうちにその先をかってゴシゴシしたものだからたまらない。見事に赤と青の線画が白い頭皮にかきこまれた!!

アバッチインディアンに頭皮をひんむかれたら、芸術作品としてもはやされたことだろう。

さて、あれから幾星霜。私の面の皮が厚くなったのに反比例して、髪の毛はうすく細くなり、白いものも目立ち出した。若いつもりでも、私の老化は老眼と髪にまずやってきたノと自覚しだした矢先。出勤支度で忙しいはずの息子が手をとめて、シゲシゲと私を上から見おろして言うのである。

「お母さん。なんだか頭のとっぺんがハゲたみたいだよ……」その声は気の毒そうにきこえた——マイッタ。パーマがとれかかっていたせいもあり、わけ目が妙にわれて中から地肌が白々と見えていた。ああ無惨……。



その日私はあわてて美容院に行き、パーマをふっくらとかけて頭頂をカモフラージュしてきた。夫は気づかぬのか遠慮したのか、この件に関してはノーコメント。

それ以来少しでもごまかそうとしていいましい努力をしているが、髪のはうがどこまでうすくなるのか。もしハゲのようになったら思いきってカツラにでもするか——、または昔とったキネヅカで、ボディペインティングよろしく、頭皮に美しい絵でも描いてやるうかとひらき直ってみたりする。要するに、頭皮の下にあるもののほうが大切なのだ、せいぜいボケないように、老いても勉強しなくては——と思いをあらたにする次第。

いつも寂しい私

福島県 匿名



先日、読売新聞の人生案内を読み私はおどろいた。今ふうにいえば「エッ！ ウッソ！ ホント」の心境なのです。五十二歳の海外出張経験もあるキャリアウーマンが、孤独で寂しいという悩みである。私のように結婚と同時に退社し、主婦十五年、中・小学校の子持ちのオバサン業からみると、その方の生き方みたいなのは、もううらやましくてうらやましくて、主婦達の希望の星、あこがれの星のように思えるのに。

働く女性がどんどん増えていく世の中で、専業主婦は何かこう気がひけるといふか（今中三の長女が生れた昭和四十六年代は、専業主婦がほとんどで、働いてる人は専門職の人だけで、教師とか看護婦。パート、内職はほんのわずかの人達。それがこの数年前から変わり、専業主婦はほんのわずか）、悪いことをしてるような、なさけない気持ちでいる私です。この方の悩みを読み、人間はすべて孤独なんだなあと思いました。

今、私は、二人の子供と働きざかりの「会社人間」の夫と、毎日が朝から晩までワタワ

タとあわただしくすぎていき、一日でいいから一人でのんびりと食事作りなどからのがれて温泉にでもつかってみたいと思いつつ、あつというまの子そだて十五年。それでもふっと思うと、さびしかった。夫がいても子供がいても、どこかさびしいのです。

現実的な話では、家のローンのこと、主人の停年後もつづくローンの支払いを考えると、恐ろしくて朝などこのまま永遠に眠りつづけたと思うほどです。会社員の妻となつてからは、化粧品、自分の衣類など、これ以上切りつめようがないくらい切りつめた生活。働いてる女性を見ると、すばらしいファッション、アクセサリー、お化粧、そして自分の自由に使えるお金、ため息がでるほどいいなと思いつつ、私は、自分で主婦を選んだのだからと、自分にいいかせてこれからも胸がキゅッと痛くなるような寂しさとともに年を重ねていくのです。

ああ、それにしても、この胸がしめつけられるような寂しさは、どこからくるのでしょうか？

持続の上に花が咲く

大阪府箕面市 作田美恵子 (44歳)



ご近所に外壁のまぶしい真っ白な家が建って数か月、どんな方がお住まいになるのかと楽しみに待っていたが、ある日窓に配色のいいグリーンのブラインドがつき、玄関の石段に鉢植えの緑が行儀よく並んだ。とたんにその家は生命を吹き込まれたような温もりを発散し、息遣いも伝わり、その一角は活気づいてきた。

ブラインドの隙間から覗く観葉植物を眺めながら八年前を思い出していた。入居したばかりのピカピカの新居にまるでジャングルのように観葉植物を並べ、毎日掃除が趣味ですと言わんばかりに磨きまくった。あの無精者がいつまで続くことかと私を知る者達は驚き笑ったものである。

ローンをかかえての苦しい経済の中から、工夫の限りを尽くして部屋中を飾りたて、そんな中で幸福感にひたっていた私、あのころのエネルギーはどこへいつてしまったのだろうか。あれも私の趣味に共通する一過性のものだったのだ。

人形作りを始めるや部屋中が人形で埋まり、夜中の月明かりで見た人形の顔に恐れてみんな手放し、今では一体の名残りもない。アートフラワーしかり、編み物しかり、ピアノしかり……数えあげればきりがいい。そのときそのときには熱にでもうかされるようにのめり込み、夢中で過ごしてきたが、今では虚しさしかない。もう一步踏み込めば新しい世界が見えたかもしれないのに、根気がない上に

才能なしと簡単に見切りをつけてしまったからだ。

かつての過ちは繰り返すまいと心に決めながらまたしても揺れ動く思い……、しかし胸中に去来する思いを書き続けて三年半、という事実は非常に大きな意義をもつ。放浪生活の末にようやく定住地をみつけたような思いでもある。好きだからこそ続いていたとしか言いようがないが、ここで踏んばらねば……、もうやり直しのきかない年齢になった。四十年数年もかけて才能を捜し求めてきたが、そんなものはもともとなかったのだ。平凡な私に残されたものは持続でしかない。ようやくそのことに気が付き始めた。もしかしたら持続の上に花が咲くこともあるかもしれない、そんな夢を持って書き続けようと思う。

そんなことを思うと、引越してきた当初のエネルギーなど悔やむほどのものではない。それにしても……、観葉植物のかわりに本や雑誌の積みあげられた居間を、殺風景な部屋になっちゃったものだ、かすかな痛みを感じながら見渡している。

元氣印のシールをもらって

千葉県船橋市 山田 淳子

先日、船橋の三田公民館のセミナーで原田静枝さんにお会いでき、大変元気づけられました。その後、十一月十一日に船橋地区のわいふのサークルの初めての集まりで、森本邦子さんと話す機会を持つことができ、わいふのおばさん達は皆なんてステキなんだろう、と感服しているところです。

このところ落ちこんでいるので、二人の先輩おばさんに、元氣印のシールをペタリと貼ってもらったみたいで、氣力がわいてきました。年をとることが少し楽しくなってきたような気がします。投げやりな中年おばさんでなく、感受性豊かな元氣なおばさんを目指そう！と思っています。

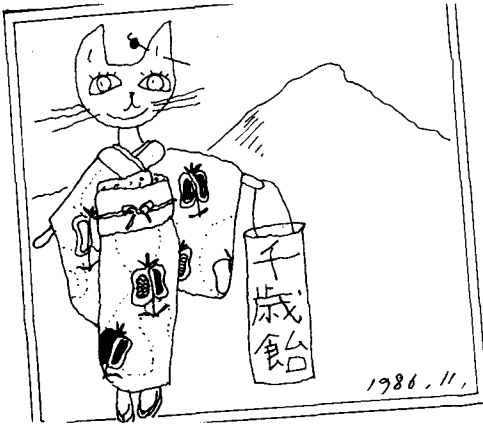
話ばかりですが、私、編み物講師（手編み、機械編み）の免許持っています。編み物の製図の仕事、編み物の本の編集も経験あり

ます。このところ三社ほどの面接受けましたが、すべて×。メゲますね。

でも、原田さんのお話に励まされて、求人欄愛読しています。

七五三

神奈川県 匿名



結婚式が年々豪華になり、先日ラジオで聴いたのだが、新郎新婦の入退場やケーキカットのときに、生のトランペット演奏の出前まであるとか。追隨したわけではあるまいが、昨今の七五三商法ますますエスカレート中である。

世の中が豊かになったと喜ぶべきなのか、なげかわしいことなのか、ローンに追われバートにかけずり回りながらも、子供のため世間体のため、派手になる一方の七五三である。わが家の二人の子供。

長男が五歳のとき、七五三のちょうど一か月前に長女を出産した私は、赤ん坊とともに留守番。入園祝いに叔母からもらったブレザーにネクタイ姿で近所の神社に父親と二人で参拝。バカチョンカメラの写真撮影でチョン。

「哲ちゃん会社に行くみたいなお洋服着てお出かけしたよ」

遊び友達の彩ちゃんがお母さんに報告したとか。

そして長女。

彼女が三歳の誕生日を迎えるころ、私はついに夫と別れる決心をした。家族そろっての神社参拝などわが家には無縁のことだった。

早朝自転車荷台に娘を乗せ、形ばかりの参拝。娘、白のセーターに赤のつりズボン。私、普段のジーパン姿。それでも自宅前にてスーパで買った千歳飴を持って証拠の記念撮影。神社のお手伝いとおぼしきおばさんが、記念のおせんべいを二袋も娘の手に持たせてくれた。

昨年、何人もお友達が七五三をやったらしく娘から催促された。美容院で聞くと、女の子は着物を着るお宅が多いので小学一年で行なうのが増えているとか。

「来年しようね」と納得させた。

今年、まだ娘は何も言わないが、あと十日もすれば、

「○○ちゃん七五三したんだって」

このせりふを聞くのは火を見るよりも明らか。はてさていかがりしたものか目下思案中。母子家庭をふびんがり、遠く離れた横浜まで宅急便でおはぎまで送ってくれるおばあち

ゃんも、七五三のしの字も言っていない。万事が派手な田舎なのに、どういうわけか七五三を祝う風習がほとんどないのである（私もやってない）。

友人達は着物一式貸してくれると言うのだが、もう一つ乗り気にならない。

一か月に一度しか父親の顔を見ない子供達なので、どんなことも人並み以上にしているつもり。私の私も、あの晴れがましきには気おくれしてしまう。と言いつつも、平和で幸せな家庭を築いているのであれば、世間並みに七五三商法に乗っかっていたかもと自問している。

両親に果ては祖父母まで一家総出の華やかさの中、母子三人の神社参拝は二の足を踏む。父親の不在を感じさせない二人の兄妹も、ホームドラマそのものの画面をまの当たりとしては傷つくのではと思われる。ひがんでいるのは母親の私だけかもしれないのに……。

「ねえお母さん、七五三しないの」

長女の言葉を聞くのはあといく日後であろうか。

（え・栗田佐織）

お友達に△わいふ▽を おすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さることに、誌代プラス送料とも一回延長。

（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

△わいふ▽年間分をプレゼント にお使い下さい

●ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。

お申込みただけは、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしておしらせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

次号投稿募集

▼特集テーマ原稿

●二〇五号の特集テーマは、いつもとちがいの原稿募集ではありません。みなさまに記録をとって寄せていただきたいのです。

テーマは「ある日曜日・夫婦の会話」です。大分前に、夫婦の会話時間、平均一日三十分というデータを「わいふ」でとったことがあります。意外に多い（？少ない？）この三十八分の内容がいささか気になるところでした。

そこで今回は、日曜日、夫が一日中家にいるときの夫婦の会話を、朝おきたときから夜ねるまで、ばっちり記録していただきたいのです。

①自分のいったコトバ、相手のいったコトバ、それぞれありのままに書いて下さい。②それから、そのコトバを吐きながらやっていることなど、そのときの情景描写もお願い致します。③夫と妻の年齢、④結婚年数、⑤子ども

の数と年齢、⑥夫婦それぞれの職業（もしありましたら）をお書き下さい。⑦一見無意味なコトバも全部お書き下さい。返事のないときは「……」と書いて下さい。

いつもは余り会話がいないのだが、その日に限って大議論、あるいは大ゲンカしてしまっただけというだけでも結構です。ただしその旨は書き添えて下さい。

ご面倒でしょうがとても面白い記録になると思います。どうぞよろしく！

▼ワンポイント情報

二〇五号は「わが家に伝わる郷土料理」です。今は都会のマンションで暮らしていても、「故旧忘れ得べき」心情を抱いている方も多いことと思います。ふるさとの味、母の味、祖母の味。わが家に伝わり、ときどきは食卓にのぼる故郷の料理をお寄せ下さい。読者が誰でも作れるように、「レシピ」の形でお願ひします。材料で手に入りにくいものは、手に入れる方法か、代替品を書いて下さい。

△氏名 住所を秘密にしたい方△

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。

「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

△仕事をしたい方△

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事でしたいですか）というアンケートを、お送りしたことがあります。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せます！

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。（無記名のものは受け付けません）

●次のコラムへご投稿をどうぞノ

●うちのワルガキ 子どもとその周辺の話題について、どんなことでも。

●オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。

●ナウい熱年 今どきの若い者へ、一言いいたい方のためのシルバースhirt。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。

●ファミリー・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそでは

言えないホンネのはけ口に。

●マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。

●職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

●親のホンネ 親、ことに母親はどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことがありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。

●男性専科 敵に塩を送る心意気、男のいいたい放題のページです。

●マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろあるんじゃないですか。遠慮ない告発をノ強いマスコミに弱いミニコミからなぐり込みかけよう。

●マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですね！。

あなたの主張や切実な体験をお寄せください。

●対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。

●女の道楽 あなたがやってるホビーについて。

●観たり聴いたり 映画、演劇、音楽会

展覧会などの感想を。

● 狂育ニッポンどこへ行く 日本中狂ったみたいに教育がさかん、でもそのわりに、変チクリンな若者や子どもが増えていると思いませんか？ 新人類の若者や子どもたち、あるいは狂師たちの生態報告をどうぞ。

● 生きてます活字人間 読んだものについて。

● 遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

● わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

● エッセイストクラブ ずいひつのよさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

● ワンポイント情報 一つのものまたは事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。

● 以上いずれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。

締め切り偶数月二十五日。

×

● 持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのもので。掲載分には薄謝を贈呈します。枚数自由。締め切り日はなし。他の出版社などに推せんもします。自費出版も引受けます。

● 短い投稿はハガキでもけっこうです。気楽に投稿して下さい。

● 絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。

● ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせてお送り下さい。

×

● 投稿は原則として一応編集部で選択します。できるだけ多くの方の投稿を公平に掲載することをめざしています。

● 編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえて下さい。

● 年齢をお書きそえになりたい方は、名前の後ろにアラビア数字でお書きこみ下さい。

● 匿名またはペンネームは投稿原稿の文頭にお書き下さい。

● 投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

● ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお書き下さい。原稿用紙の使い方はルールを守って下さい。

● ヨコ書き原稿は書き直すことになるので必ずタテにお書き下さい。

● 原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

×

● 「プライベート・ルーム」（読者のための相談室）へのご投稿をお待ちします。約千二百字。電話でのご相談でも結構です。

● 二重投稿は堅くお断りいたします。

編集だより

●あけましてお目出とうございます。暮・正月の休みが入ったにもかかわらず、あまり遅れないで発行できましたので喜んでいきます。

●たいへん長いことお待たせしてしまいました。が、ようやく「結婚アンケート」の集計、分析が出来上がりました。回答数は一二四人で、性のアンケートの約半数でしたが、幸いなことに、実に充実した結果が出たのです。

「家庭に満足」の日本人九〇%の裏がしっかり読み取れる面白いデータや、「幸福な結婚」のためには何が必要なのか、という基本的な条件が、意外なほど浮き上がってきています。回答数が少ないのが玉にキズですが、その少なさを吹きとばすぐらい充実したものと自負しています。これもお答えをお寄せ下さったみなさまのご協力のおかげです。本当にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

●今回は「ワンポイント情報」に一通の反響

もありませんでした。書類・データの整理はやはり主婦の日常に坎ケイナイ話だったのでしょうか。編集部一同がっかりしています。

●去年までの連載が一応みな終わり、今年は新しく法村香音子さんの「八路军とともに」が始まりました。これまでも中国について断片的に書いて下さった方ですが、中国で育ち、八路军とともに在った幼少時代、彼女が「少女の目」で見た中国の物語を、みなさまに心ゆくまで味わっていただこうと思います。こうした文を発掘できるのが、ほんとうに「わいふ」編集のだいご味です。

●二〇三、二〇四号の合評会は、二月十七日の火曜日、午後二時―四時、飯田橋の東京都婦人情報センターでいたします。出席ご希望の方は編集部までお電話をどうぞ。

●読者の方から編集長、編集部あてにたくさん賀状をいただきました。誌上を借りて厚く御礼申し上げます。ではお元気で、



購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

WIFE

(隔月刊) 204号

1987年 3月1日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共3600円)

発行所・株グループわいふ

編集・わいふ編集部 ●162

東京都新宿区市ケ谷加賀町2-5-23

TEL (03) 260-4771・4773

郵便振替 東京5-110430

銀行口座 三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れてもひき続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

好評文化出版局の本 自然を丸ごといただく献立

丸山光代／梅研究会編

見て楽しく食べておいしい！ 手間もいらず無駄も出ない！ 自然の恵みを丸ごといただくバランスのとれた四季の献立。そんな丸山光代さんの健康料理を美しいカラー写真で紹介します！

■発売中／■定価1,500円



好評の
自然食
シリーズ

作って食べよう

なっとうの本

作って食べよう

とうふの本

作って食べよう

みその本

作って味わう

お茶の本

健康を食べよう

いわしの本

健康を食べよう

玄米食の本

健康を食べよう

青菜の本

健康を食べよう

パン食の本

健康を食べよう

梅の本

健康を食べよう

りんごの本

健康を食べよう

ハチミツの本

健康を食べよう

豆の本

健康を食べよう

からだが好き きのこと

健康を食べよう

海草の本

伝統の味を見直そう

そばの本

■定価1,000円～
1,500円

〒151 東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL 03(370)3111(大代表)

月刊

ゆたかなくらし

定価 500円(送料50円)

年間購読料 6,000円(送料600円)

御購読は直接当会へ御申込み下さい。

郵便振替・東京9-162684

すいせんします

原田 正二

鷺谷 善教

木下 恵介 中島 紀恵子

山田 洋次 浦辺 史

早乙女 勝元 真田 是

前田 甲子郎 長 宏

寿岳 章子 小川 政亮

＝国民的課題としての老後を考える特集＝

2月号特集 高齢化社会危機論を斬る

3月号特集 社会福祉に強まる扶養義務強制

4月号特集 福祉・医療従事者の健康問題

5月号特集 高齢者と文化

＝確かな情報と役に立つ連載＝

女性の健康……………野末 悦子

老人ホームの歴史……………岡本多喜子

人生の詩……………増岡 敏和

味はいかが……………井出美保子

居ごこち住みごこち・情報コーナー・くすりの話

編集・発行 全国老人福祉問題研究会

〒177 東京都練馬区南大泉4-16-37

わいふ二〇四号

一九八七年三月一日発行(隔月刊)

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28
☎03-202-7391 振替・東京6-113487

●新評論●

雑誌・新評論 年間送料込500円
ブックガイド1986 送料実費170円

●フェミニズム論争に結着を迫る問題群の集成

フェミニズムとエロロジ



青木やよひ 一貫してエロロジの視点からフェミニズムを論究してきた
コロジカル・フェミニズムの旗手が、女性問題の現在を明らかにし、『フェ
ミニズム論争』に結着を迫る力作! 問題作『フェミニズムの宇宙』(青
木やよひ編) 以後の論稿を中心とした最新論集。

四六判上製 二五六頁 一八〇〇円

●娘として、母として、そして女として

女 感覚で生きる

永畑道子〔仕事・子育て・老い〕

『野の女(明治女性生活史)』、『炎の女(大正女性生活史)』以来、庶民の女性
の生きざまに迫って来た著者が現代の女性の生き方を問うエッセー集 一五〇〇円



●イリイチ、網野善彦らが西欧と日本の文化を徹底討議!

ジェンダー!

〔「イリイチ、B・ドゥーデンを囲んで」

玉野井芳郎監修
新評論編集部編

文字・身体

来日中のイリイチ、ドゥーデン両氏を
囲んで、網野善彦、樺山鉦一、鶴見和
子、丸岡秀子、永畑道子らの各氏が、
「ジェンダー」「文字」「身体」を歴史的
に見直し、西欧文化と日本文化を比較
論究する初の企画! 二〇〇〇円